

二次元

ミルフィーユの新作PCゲーム情報も載ってるよ!

cover illustration by  
あぶりだしざくろ

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

新連載小説

隷従希望の異色ヒロイン登場!

Kissing for my stray dog with everlasting promise

捨て犬少女に  
誓いのキスを

愛枝直×A.S.ヘルメス

毎号好評!分岐小説

魔宝ハンター  
レジーナ&メリル

山本沙姫×時丸佳久

大好評連載&読み切り小説

今号も2話掲載!

聖換天使  
エクスラグナ

上田ながの×羅森瑞羽

新居佑×牡丹

夜士郎×綾瀬ちよこ

酒井仁×緑川葉

二階堂安芸×辻風

表紙&ピンナップ  
テレホンカード  
応募者全員  
サービス

カラーイラスト  
ギャラリー

譲葉  
sian

大人気えっちマンガ&4コママンガ

新連載  
美少女魔法戦士  
ピュアメイツ

助三郎

おおたたけし

空木次葉/トキサナ

嘉納あいら

今号の特集  
悪魔の娘

カラーピンナップポスター

いるまかみり  
ジェット世渡り  
あぶりだしざくろ

カラー  
新企画



文字コミ

宮代龍太郎

一之瀬ユキ/狩野景

DIGITAL  
EDITION  
デジタル版

vol.66  
2012

10

立ち読み版



淫惑の小悪魔ルカ

小 説…  
イラスト…  
読者…

「ジツとして、おにーちゃん。ルカが全部してあげるから……ね」

金色の瞳を閃かせた小悪魔が小さな手を上げ、厚い胸を軽く押すと、茹で蛸のように頬を赤らめた男は低く呻きながら仰向けに横たわった。

（さて、と……うわっ!? やだ、すっごい妄想!）

思考触角を揺らめかせて男の胸中を探りかけたルカは、怒濤の如く押し寄せる淫らなイメージの奔流に驚き、慌てて接触を断つ。

相手の妄想に合わせて淫戯を行えば効率よく精液を搾り取れるが、合わせすぎて精神的な主導権を失えば魔界に戻れなくなる。そうして人間界に繋ぎ止められ、性奴隷として屈辱の日々を送っている先輩たちも少なくないのだ。

（でもまあ、あんなに妄想を溜めているんだから、小細工しなくても大丈夫よね……）

接触を断つ前に垣間見たいいくつかのイメージを反芻しながら、ルカは妖艶に微笑んだ。要は精液を搾り取ればよいのだ。獲物に淫悦を与えるのは精液を得るための手段であり、目的ではないのだから、細部にこだわる必要はないだろう。

「おにーちゃん、ルカに会いたい会いたいって強く強く思っていたでしょう？ だからルカは、こうして実体化したの。ありがとう、おにーちゃん」

「ふあっ!?」  
大きく盛り上がった股間を小さな手で撫でられ、肥えた腹を揺らして間の抜けた声を漏らす男。ただでさえ締まりのない顔がますます緩み、早くも恍惚

に蕩けていく。淫悦の予感に脳が早くも沸騰してしまったのか、小悪魔を疑ったり怖れたりする理性は欠片も残っていないようだ。

「うふふ……おにーちゃんのコレ、すごく硬くなってるね。ルカのことを考えると、こんなにコチコチになっちゃうの？」

「そ、そうだ、よ……」

男の上擦った返事を聞き流しつつ、ルカはベルトを弛め、猛々しく勃起した淫棒に細い指を絡め、愉しそくに引つ張り出す。

「ふっ!? ちよっ、待……」

「まだ出しちゃダメだよ、おにーちゃん。これからルカが、いっぱいいいっぱい気持ちいいことしてあげるんだから!」

手の中でビクンビクンと震えている淫棒をしなやかな指でしごきつつ、妖しく微笑んだ小悪魔が男の腰を跨いだ。鋼のように硬いペニスを片手で押さえ、真つ赤な龜頭をへっに向けて——仰向いた裏筋に、己の股間をソツと押し当てる。

「く……あ、ううっ!?」

生まれて初めて体感した少女の重みに興奮したのか、男は耳の先まで真つ赤になつて弛んだ腹を波打たせ、目を白黒させた。

「どう? 感じる? ルカのお■ンコ……」

「か、感じる……直接触れてないのに、プニプニしてるのが、分かる……」

「うふふ……ルカも、お■ンコでおにーちゃんを感じてるよ。ルカの中に挿入したい挿入したいって、暴れ出しそうなくらい昂つてるね……あ、まだダメよ、ジツとして。ルカ、大好きなおにーちゃんのためにいっぱいいいっぱい勉強したんだから」  
理性を失つて獣に変わりがけた男に意地の悪い笑みを見せ、ペニスを弄っているのとは反対側の手を尻の後ろへ回す。しなやかな指先で玉袋に触れ——。

「ふあっ!? く……うおっ!?」

繊細で敏感な玉を柔らかな掌に揉みまぐられた男が、いまにも昇天しそうな顔で吼えた。ルカの手の中では勃起ペニスがビクンビクンと痙攣し、赤黒く照り光る薄皮に怖ろしげな青筋がくつきりと浮く。

「まだよ、まだ出しちゃダメだからね……」

妖しい微笑みを深めた小悪魔は、片方の手で陰囊を玩びつつ、もう片方の手で肉茎を握り直して、小さな尻をゆっくり前後に動かし始めた。

「ううっ!? く……ううっ!? る、ルカたんの、お……」

「お……お■ンコ……があっ!?」

「そうよ。ルカのお■ンコが、おにーちゃんのお■ンにシュッシュッしてんだよ」

「うう、く……うう……ッ!」

鋼のように強張った裏筋を少女の柔らかな肉畝に揉みまぐられ、弛んだ頬をさらに弛める男。

その腰に跨がったルカも、薄布越しにペニスの強張りをまざまざと感じ、あどけない頬に淫靡な笑みを深めて悪戯っぽく舌舐めずりする。

（想像していたよりずっと熱いし、硬い……これなら一回だけでなく、三、四回は搾れそうね）

大量の精液を得られそうなのも嬉しいが、それ以上——こんなに硬いペニスをねじ込まれたら、きつととても気持ちいいだろう。

「も、もうダメ……こ、これ以上は、無理ッ! お願ひ、挿入させて……ルカたんっ!」

「まだよ、まだまだ。おにーちゃんのお■ン、もつともつと硬くなるでしょ?」

「そ、そんなあ……ッ!」

情けない声を上げる男の上で次第に腰の振りを強めながら、ルカは恍惚の予感に胸を高鳴らせ、硬い裏筋に揉み込まれている股間をじゅわ、じゅわ、と熱く濡らした——。







淫魔レティス 路地裏の誘惑

小 説… 斐々（いし）嘉和

イラスト… sisan

「さあ、坊やたち……こつちよ、ほら、ここ……」

淫らに潤んだレティスの声に誘われて、鼻息を荒らげながらふらふらと近づく若い男たち。薄暗い路地にはねっとり濃厚な牝香が充満し、チンピラたちのただでさえ少ない理性を完全に麻痺させてしまう。

「すつげえ……痴女つてホントにいるんだ……」

「目がアブネーし、涎ダラダラ垂らしてるし……変なクスリでもやってんのかな……？」

余裕を見せようとして口々に言うが、その声は明らかに上擦つており———により、ズボンの股間が大きく膨らんでいる。

（うふふ……見込んだ通り、元氣いいわね。でもまだダメよ、オ・ア・ズ・ケ）

いまにも飛び掛かってきそうな若い男たちに流し目を送り、レティスは密かに魔法で押し留めた。焦らせば焦らすほどペニスは硬くなるし、精液はいつそう濃くなるし———魔力補充の効率が高まるだけでなく、快感も増す。せつかく得た獲物たちなのだから、存分に愉しまなければ損だ。

「ねえ、ほら……見て、私のオッパイ……」

「う、お……ッ!?」

淫熱に焙られて内側から火照る柔らかな乳房に、若い牡たちの熱い視線が集中した。淡く翳る乳合に刺すような眼差しが降り注ぎ、無数のナメクジのようにぞわぞわ、ぞわぞわ———と這い回る。

「く、うう……ッ! も、もつと見て、見て!」

発情した淫魔の身体はどこもかしこも性感帯だ。

触れられればもちろんのこと、ただジッと見詰められただけでも快感の微弱電流が湧き起こる。

「み、見られることが好きな、変態か……」

「そうよ。私、変態なの……いまね、お股がすごいことになってるの。この中でね……ン、んふっ! 熱い蜜が、じゅわっじゅわって滲んでいるのよ」

囁きながらショーツの腰紐に指を引っ掛け———。

———くちゅ。

ぬちゅ、くちゅ、にちゅ……。

「うおっ!? い、いまの、聞いたか!?」

「おお、聞いた聞いた!」

淫らに粘つく幽かな水音を耳にして、若い血をさらに滾らせる男たち。股間の膨らみはいっそう硬く、いっそう大きく———理性も知性も蒸発し、淫魔の尻を潜った細長い尾が蛇のようにくねるのを見ても、なんの疑問も抱かない。

「も、もつと……ふう、はあ……もつともつと、見て……見られると気持ちいいの、アソコがぐちよぐちよになつちゃうの……」

酔ったように頬を赤らめたレティスは、潤んだ瞳でチンピラたちの顔を見回しながら、自在にくねる尾の先を己の股間に押し当てた。

「ン……ふっ!」

布地にうつすらと浮き上がる割れ目に沿い、軽く上下に動かすだけで、熱く熟した割れ目に肉悦の細波が反響する。尖った先端に少し力を込めれば、余裕を失った股布に勃起淫核が押し潰され、稲光のような快感が閃いては消える。

「ねえ、お願い……もつと人を集めて……たくさんの人に観られたいの、もつともつと、エッチな気分になりたいの……」

「へ、へへ。とんでもない痴女だな。よし、望み通り人を集めてやる」

「ほら、こつち向いてエロっぱくアピールしな!」

携帯電話を取り出した若者が、紅いランプを灯して動画を撮り始めた。

妖艶な流し目を向けたレティスは機会を逃さず、小さなレンズ越しに魔力を発揮。しっとり汗ばんだ女体をくねらせ、火照る乳房を重々しく揺らしながら、まだ見ぬ牡たちを蠢惑する。

「ねえ、来て……早く、早く……身体が熱いの、芯が疼いているの……アナタの硬いオ……ン……ン……を思うと、腰がほら、勝手に……」

膝を深く折ってしゃがみ込んだ姿勢のまま、器用に腰をカクン、カクン、としやくるレティス。

股間に押し当てた尻尾が薄布に軽く喰い込み、秘せられた割れ目をほのめかす。

「おいおい、なんで腰振つてんだ? 見られるだけじゃ我慢できないってか?」

「そ、そうよ、もちろん……オ……ン……ン……が欲しいの、いっぱい……欲しいの……だからお願い、すぐに来て! みんなで私を、滅茶苦茶にして!」

———じゅくんっ!

己の言葉に昂つてしまい、レティスの秘裂が熱く燃えた。

（も、もう少し……もう少し待つよ……もう少し待てば若い男たちが殺到してくる、滾るペニスで、私を滅茶苦茶に突きまくってくれる……）

その激しさを想像しただけで、膣穴の奥に新たな蜜がじゅわっじゅわつと滲む。クリトリスがますます怒張し、痛いほど痼り勃つて、股布の裏側にきつくきつく喰い込んでしまう。

「お願い、来て……早く、早くうんッ!」

甘え声で媚売りながら火照る乳房を弾ませ、長い髪を揺らすレティス。

絶頂の予感があまりにも強く、あまりにも生々しくて———魔力を補充するという本来の目的を、早くも忘れかけていた。







隷属の鍵を巡る少女達の戦いが  
幕を開ける——

スレイブ

Kissing for my stray dog with everlasting promise.

# 捨て犬少女に 誓いのキスを

第一話 禁忌の鍵が  
開く時

小説  
NOVEL

あいえだなお  
愛枝直

挿絵  
ILLUSTRATION

A.S. ヘルメス



降りしきる雨の中、少女は倒れ伏す二つの人影をぼんやりと見下ろしている。

片方が弱々しくぬかるんだ土を掻いた。生きている。少し、ほっとした。これならしばらくすれば動けるようになるだろう。

かつてない乱戦になった。手加減をする余裕はなかった。無我夢中で鎧を振るった。

どれだけ自分が『マスター』に頼りきりでいたか、分かっているつもりでまるで足りてなかった。これまでは、彼に言われた通り動けばそれで良かった。傷だらけの少女の隣に、今は誰もいない。

「いそがなきや……」

傷の修復が遅い。服は裂けたまま戻らない。

重たい雨が身体をただ打ち据える。だが守らなくては。『マスター』の言いつけを。最後の言葉を。

走るしか、ない。戦うことだけではない。彼がいなければ電車に乗る方法さえ少女には分からない。

流れていく町並みを真横から眺めるあの光景も、おとなしくしている自分を叱る、低くて落ち着いたあの声も、今の私には得られないものなのだ。

「さみしいですよ。マスター」

じわりと目尻に浮かんだ涙を、きつく目蓋を閉じ押し潰す。小さな顔を打ち振るってキッとまた目を見開くと、少女は軽やかな足音を立てて飛び、戦場を後にした。

☆

電波式の目覚まし時計の鳴る直前に、高崎堅悟はいつも通りに目を覚ました。右手を伸ばして背面をなぞり、スイッチを降ろした。

一階に下り洗面所に向かう。身繕いを終えたら、寝間着を洗濯機に投げ込む。壊れた吸水ホースに代わって風呂の湯をバケツに汲んで移す。洗剤を仕込んで開始ボタンを押した。槽の回る軋んだ音が、また高くなった気がした。そろそろ持たないかもしれ

ない。

納戸で制服のスラックスを穿き、カッターを着込む。リビングに出る。

「おはよう、姉さん」

「おはよう、姉さん」

「おはよう。ご飯もうすぐだから、座って待っててね」

キッチンではパンツースーツにエプロンと、なんともミスマッチな出で立ちで、姉の悠里が朝食をこさえていた。コンロから振り向くと、綻ぶような笑みを堅悟に向けた。

堅悟もキッチンスペースに入る。食器棚から茶碗を取り出し、炊きたての米をよそっていく。箸を並べ茶を淹れる。「おねえちゃんのお仕事、とつちゃだめよ」と姉が抗議してくるが、無視した。

「う……今日の当番は、おねえちゃんなのに……」

「姉さん、第一次反叛期じゃないんだから……」

二人は食卓に向かい合わせて朝食を摂る。姉がまだ駄々をこねるので、堅悟は苦笑しながら窘めた。味噌汁を一口啜る。空の胃がほっとするような、慣れた味だった。

「うふふ、愛情たっぷりですよ」

ここ数年で聞き慣れた賛辞のはずなのに、姉の機嫌はただの一言で好転する。

何一つ欠ける物のない、いつもの朝だった。

早朝のテレビはまだ無人放送で、天気予報がBGMだけを頼りに繰り返し流れている。今日からは、また晴れるらしい。

「洗濯もの、お外に干せそうね」

「布団も干すから、寝室に邪魔するよ」

「お願いね——うふふ」

気がつくのと、姉は箸を止めてじつと堅悟を見つめていた。ほんの少し首を横に倒し、瞳をふにやりと

細めた優しい笑顔。

「なに？」

何となく照れくさくて、堅悟は短く尋ねる。

「頼りになるな——って、思ったの」

彼女があまりにも幸せそうに言うせいで、頬が熱くなる。慌ててぶいとそっぽを向いた。「たいしたことはしてないよ」と呟くと、姉は「あらあら」と朗らかに笑った。

母が死に、虚ろな目をした父がふらりと居なくなると、姉は大学をやめて働きに出た。

その頃の自分とは言えば、突然に降りかかった現実を受け入れきれず、ただ呆然としていた。実際、自分の方がよほど彼女に頼りきりなのだ。

新しい環境に飛び込んで悪戦苦闘しながら、腑抜けた弟の面倒を見る。自分だって傷ついていないわけがないのに、溜め息一つ、恨みの一言、涙一筋見せることなく、いつも笑顔で。

それがどれだけ難しいことか、簡単なことに気付くだけにもだいたい時間がなかった。

視線を正面に戻す。「なあに？」とおっとりした声で尋ねてくる姉は、家族のひいき目を差し引いても美しい。

少し目尻の下がった大きな瞳にぶつくりと艶やかな唇。肌は透き通るように白く、背中までの黒髪が流麗に輪郭を彩る。

背は少し高め。超すのに中二の終わりまでかかった。抱き付けられると力が抜けるほど柔らかくて、振りほどくのに苦労する。

当然モテないわけではないのだが、恋人の居たためしはない。高校を出るまではともかく、それからの理由ははっきりしていた。

「早く大人になりたいって、思ってた」

姉さんをもう縛らずに済むように——後半半分は省いて食事に戻る。姉は「まあ」と呟き、また笑う。



彼女のために、自分には何が出来るだろうか――  
堅悟は最近そんなことばかり考えている。

あらかたの家事を済ませると、二人で家を出る。

「はい、お弁当」

「ありがと」

小さな手提げを受けとり、戸締まりをして敷地を後にする。向かう先は同じなので、並んで徒歩で行く。

車庫には自転車一台だけ置いてある。その鍵も、スクールバッグの前ポケットにしまい放しだった。(鍵……と言えは)

消えた親父が残した家の鍵には、薄気味悪い特徴がある。手に持つと、人の喉元に鍵穴が見えることがあるのだ。

誰にでもではない。かなり稀で、若い女性が多い。そして今もソレは姉のほっそりした首に見て取れる。「？」

彼女が首を傾げると、鍵穴も斜めに傾いだ。

「なんでもない。いこつか」

平静を装い靴にしよう。そうすると、穴も消えた。少しホッとすると。見続けていると何か妙な気持ち芽生えてきそうだった。

(ま、ほっとけばいいことだ)

妙な鍵を持つているのも、変な鍵穴が見えるのも自分だけ。そしてくだらな好奇心を誰よりも大切な人に優先させる理由はどこにもない。堅悟は詰め襟の肩に食い込んだ靴を背負い直し、歩き出す。

少年は厄災の元凶についてを、まだ何も知らない。

「それじゃ堅悟くん、お勉強頑張つてね」

校門に入つてすぐのところ二人は別れる。

悠里は父親の知己であった学園理事長に秘書として雇われ、堅悟はこの春ここに奨学生として入学し

た。

教室に入つた堅悟は級友への挨拶もそこそこに参考書を広げて自習を始める。

県下上位校にあつて少年の態度は特に浮いているわけではない。それを考慮しても、堅悟の周囲への無関心はあからさまだつた。

各人の人となりがあらかた周知された五月にあつて、押して彼に話しかけようとするものは居ない。堅悟もそれを歓迎していた。正直姉さん以外の人間に興味はない。

「よう良い子ちゃん共。楽しい楽しい授業の時間ですよつと。お喋りやめー。自習切り上げー」

チャイムが鳴り、教師が入室して朝課外が始まる。当たり前のように正課の内容を進行して、終わり続けざまにホームルームが始まる。

「あー、高崎。進路希望調査票のことで話すつから、放課後職員室な」

一つ学園生活に問題があるとすれば、このダレた喋り方をする担任が何かとちよつかいを出してくることだ。

午後課外を含む授業が終わり、夕方。職員室脇の指導室、いわゆる説教部屋に髭面の中年男と連れ立つて入る。机を挟んで向かい合い、パイプ椅子に座る。

「あのさあ……コーヒー飲んでたわけよ？」

担任は、意味不明な切り出しで「指導」を始めた。

「何の話です？」

「まあ最後まで聞いてくれよ。んで、お前さんの調査票見た瞬間にさ、たまたま教頭が通りがかつてくれんの。あの人良いスーツ着てんだよ」

担任は言葉を句切つて件の調査票を滑らせる。

「コーヒー吹いたわ。ブーッと。すげえ怒られた。ちびるかと思つた。どうしてくれんの」

胸元につつかえされた紙片は、第一志望が公務員一般職、第二志望が帝都大学で記入欄を埋められている。確かに自分の書いたものだった。

「なんだよ最高学府が就職の滑り止めつて。新し過ぎだろ」

「コーヒーに関しては先生がリアクション過剰なだけです」

何一つ、やましいことはない。堅悟は淡々と言いがかりをはねのける。教師はうつと言葉に詰まり、ポリポリと頭を掻いた。

「いやまあそりや否定できんげどさ。それにしたつて無理があんぞ。公務員一般、いわゆる旧三種。倍率知つてつか？」

「十五倍を超えて現在も上昇傾向です」

「お、おう……しかもその七割はもはや専門卒だ。正直現役は下手な難関私大より難しい。やらしい話だがな。んな曲芸に注ぎ込むリソースがあんなら普通のお受験を頑張つて欲しいわけだよ。奨学生くんには」

まるで挑発するように、担任は大人の都合を押しつける。

「ですので、授業料の分は貢献します」

あくまで表情を崩さず、堅悟は第二志望を指さした。

教師は深く溜め息をつく。

「その台詞をぶち切れながら言うんなら面白え、やつてみろつてなるんだがな……」

苛立たしげにまたガリガリと頭を掻いてすわつた目で堅悟を睨めつけた。

「書き直せ」

「その必要はありません」

「家庭環境は承知してつからどうしてこうなつたとは言わん。だがな、この無茶を実現すんのに何をどれだけ切り捨てる？ 現にお前さん、まるでクラス



に融けこむ気がねえだろ」

「……そんなことはないですよ」

「ほらそれだよそれ。自己主張より相互理解よりとにかくふれあいの面積を減らそうとする。余裕をなくして証拠だ。言つとくがな高崎。人間小器用に大事なもんだけ選り分けておけるもんじゃねーぞ？」

危うく舌打ちが漏れそうになる。この人は何が言いたいんだらうか？ まさか俺が本意を忘れて姉さんのことまで蔑ろにし出すとでも言いたいんだらうか？

「余計な心配はして頂かなくて結構です」

理由なき反抗にエネルギーをさくほど暇ではないが、こうもしつこく沸点を探られれば、さすがに苛立ちを禁じ得ない。堅悟はつつけんどんに吐き捨てる。だが――

「だったら訊くが、こいつに書いてる人生計画は、あの美人のねーちゃんに話してんのか？」

二回りは年上の教師の言葉に、少年は黙り込むことになった。男はその様子を見てにんまりと笑った。「ほくれみるガキンチョめ。分かつたら調査票は書き直し。保護者様とよく相談の上再度のご提出をお願い申し上げます。そんじゃ帰ってよし」

「……ご指導ありがとうございます」

幼さを正面から突きつけられた屈辱に、堅悟は顔を真っ赤にして震える声でお定まりの台詞を口にす。最後の意地で、指導室の扉はそつと閉めた。

☆

その女は白衣を纏っていた。

足下は編み上げのニーハイブーツ。スリットの入ったマイクロミニのスカートに臍から薄い胸元が露出するインナートップス。首元には三列のバックルが並び拘束具めいた雰囲気醸す。

いっそ不健康なほど細身の身体を、ミスマッチな

装いで飾った金髪碧眼の女を医者や科学者と捉えるものは居ないだろう。

三步後ろには、青い髪の少女を引き連れている。不自然な髪色に合わせた青のワンピースは古びて端々がすり切れ、肩紐がよれてずり落ち細い背中が見える。

棒のような手足にはそこかしこに生傷がつき、包帯や絆創膏がごまかすように貼り付けられている。子供らしいと見るには、少女はあまりに虚ろな目をしてる。そして――首に巻かれたぶかぶかの首輪と、そこから女の手まで伸びる鎖が、危険な印象を決定的にしていた。

ともすれば職質すら受けかねないほどの異質な、何もかもがちぐはぐな二人だが、注意を払う者は誰も居ない。

駅前の人の群れはそれぞれ日常の中にいて、何事にも気付かず二人のそばを歩き過る。

女は白衣のポケットに手をつ突込み、携帯端末を取り出す。タッチパネルを操り、地図を呼び出す。「さすがの、狼犬。も、新幹線には勝てないみたいねえ」

ディスプレイを眺めてニマニマと嗤う。マップ上には三つのアイコン。そのうち二つはほぼ重なっており、残りの一つが猛烈な勢いで接近していた。

縮尺を拡大すると、真っ先に移動する点が表示から外れる。

更に拡大していく。やがて細かい路地までが明らかになり、中心に表示されたアイコンともう片方を結ぶラインが現れた。

一端はマップの中心かつ駅の前。アルファベットでスペリングされた名前はジェイミー・コララルクラフト。そしてもう一端には同じくタカサキ邸とある。

「行くわよ、サンゴ」

女が、鎖を引く。斜め上に首を絞められ、少女が噎せ返った。

ジェイミーは苛立たしげに舌打ちを鳴らす。「うざったいわねえっ……大袈裟なのよっ」

「ケホ……申し訳ありません、マスタア」

無機質な声音で謝罪する少女にまた一つ舌打ちを鳴らし、女は硬質なヒールの音を鳴らして歩き始めた。

☆

「ただいまー」

無人の我が家に向けて、悠里は律儀に帰宅を告げる。大量の食材が詰まったスーパリーの袋を框の上に置き、ふーと息をついた。スーパリーに押さえつけられた大きな胸が、それでもなお柔らかく揺れた。スリッパに履き直して一度手を洗い、また袋を抱え、パタパタと台所へ向かう。

まだ、堅悟は帰ってきていない。メールに、『進路指導で遅くなる』旨の連絡を受け、悠里は夕飯の献立を変更することにした。冷蔵庫の合い挽き肉を使ってハンバーグにしようかと思っていたが、もう一手間かけてロールキャベツだ。

旬のキャベツをかうついでに、明日からの食材もばっちり準備した。やはり、肉類が多い。年の割に落ち着いて見えても、堅悟は食べ盛りの男の子だった。なんととはなく微笑ましくて、悠里は幸せそうに頬を緩める。

今日使わない物は冷蔵庫にしまつて、二階へ上がる。

「おねえちゃんが部屋に着替えたらしい」

珍妙な節に奇つ怪な詞の鼻歌を口ずさみながら、悠里はスーパリーを脱いだ。ロング丈のキャミワンピースにカーディガンと、寛いだ格好に着替え終わると、軽やかに階段を踏み鳴らして降り、また台所に立つ。

「おいしいーご飯がー ぽぽぽーん」



悠里には耳にしたフレーズを適当に改変しながら

歌う癖があった。それをいつも聞かされる堅悟のな

んともいえない表情に、本人だけが気付いていない。上機嫌で愛用のエプロンを着ける。わんこのアツブリケが着いたそれは、堅悟が小学生の頃家庭科の授業で作ってくれた物だ。恥ずかしいからやめてくれとよく言われるが、いくら可愛い弟の頼みでも、きけることとぎけないことがある。

キャベツを茹で、みじん切りしたタマネギとお肉を合わせてタネを作る。下ごしらえをしながら、悠里はふと昔の弟のことを思い出す。

まだ小さい頃は、大きく口を開けて笑い、顔をくしゃくしゃにして泣く、『普通の子』だった。両親がいなくなつて、ほんの少しゆっくりして、それからの堅悟はとても物静かな子になった。

無気力というわけではない。むしろがむしやらかなほどの頑張り屋さんだ。遅れていた勉強を瞬く間に取り返し、実力で奨学生の立場を勝ち取った。

お家のことも率先して手伝ってくれるし、笑いかければ立場も忘れて思わずドキリとしてしまうほどの優しい笑顔を返してくれる。でも――

「おねえちゃんはお世話を焼きたいの」

本人には口が裂けても言わないが、あまりにしっかりものなせいで、甘やかす隙がまるでないのだ。

最近では朝ご飯ぐらいなら自分でおいしく作れるようになって、ますますおねえちゃんは立場がない。ここは一つ腕をかけておいしいお夕飯を作る必要があるだろう。

ネイルなどの飾り気のない、だが生のままで美しいおやかな指でタネの形を整える。くるくるとキャベツでくるんでいく。

作り終えたロールキャベツを鍋に敷き詰める。トマトジュースを注いで味付けをして火をかける。

付け合わせを何にしようか迷っていると、カチャ

リと玄関の鍵が廻る音がした。

「あらあら」

どうやら思ったよりも早く解放して貰えたようだ。扉は開けたままでおいたから、廻せば逆に閉まってしまう。クスクスと笑いながらタオルで手を拭き、迎えに行く。

悠里は鍋を温める火が時を同じくして消えた不思議に気付いていない。

日常は今、崩壊する。

☆

「どちらさまでしょうか？」

少し困ったような曖昧な笑顔で誰何する女に、闖入者であるジェイミーの方も困惑した。この女、なぜ消えない。

鍵の力で異界化した部屋に、尋常の人間は入れない。元々境界内にいた場合は一時的に消滅する。

(ああ……首元)

だが、ジェイミーは悠里の首元に開いた鍵穴を、蒼の瞳で確かめ――ルージュに彩られた紅い唇を酷薄に歪めた。

一見しただけで胸くそ悪さがこみ上げる、人を苛つかせる天賦の才能を持った女だった。

叩けばすぐに赤みの差しそうな白い肌。服の上からでもはつきりと分かる、むっちりとした男に媚びる体つき。いやらしいがな牝の身体をしておきながら、その顔立ちが清純ぶるように、甘い柔和な造りをしている。

なにより――さつきからチラチラと背後のサンゴを見る、心配げな目つきが気に入らない。なんだろうか。私がこの子を従えているのがそんなに危うげに見えるのだろうか？ スレイブ適性者――牝豚のくせに、弁えないことこの上ない。

「高崎悠里の娘ね？」

「父のことを、ご存じなのですか？」

娘が驚きに目を見開く。表情が硬くなるのはつきりと分かった。ガキっぽいデザインの子ブナエプロンを揺らして、一步詰めて寄ってくる。

「知ってるわ、もちろん。もちろん知ってるわ。あいつほど目障りな奴はいなかった。犬みたいに忠実なふりで、鍵を集めて、適合者を探して、敵を叩いて……それでいてスリした態度は崩さないの。ちよつといい、スレイブを引いたからって、調子に乗り過ぎだったわ」

対してジェイミーは嘲笑を浮かべてべらべらと悪態をつく。

「あの……父は今何をしているのですか？」

剣呑な様子にビクつきながらも、娘はまだ律儀に對話を試みる。いつそ滑稽なほどの善良さだった。

「何をしている？ さあ？ 知らないわ。私もそれを知りたいわ。あの男、何を思ったか、7号を寝取って、鍵究会を裏切ったのよ。私はその落とし前つてところね」

そもそも――ジェイミーは悠里との對話を求めている。豚に人語の理解を求めるなど滑稽極まる。

ゆえに何ら解説もなく、独り言のように彼女の世界の専門語を捲し立てる。

「何が何だか分からないって顔ね。いいのよ、それで、それでいいの。とりあえず貴女は――」

要は、この悪意さえ伝わればそれで良いのだ。悠里は、詰めた一歩を後退る。両手が胸の前に縮められている。表情はもはやあからさまに強張っている。

頭上に大量の疑問符が浮かんでいる様すら見えそう。

「あの男のせいで酷い目に遭う。これだけ理解していればいいの――サンゴ、やりなさい」

「はい、マスター」

牝豚の怯えた表情ほど目を楽しませてくれる物は



ない。それが敵の肉親ともなればなおさらだった。

ジェイミー・コラルクラフトは彼女の奴隷に目の前の獲物を蹂躪するよう命じ——金属をすりあわせるような不快な声を立てて嗤った。

☆

初めは、何か文化の違いがあるのだろうと思っていた。目の前の女の人は金の髪に蒼い目と、西欧人の特徴を備えていたからだ。

だが、そんな一言で小さな女の子を首輪と鎖で繋ぐことを許されるわけがないし——弟にはお人好しすぎる、警戒心が足りないといく言われるが、あからさまに悪意を向けられても気付かないほど悠里は鈍感ではない。

もともと、事態はとつくの昔に——この妖しげな二人組が高崎家にたどり着いた時点で——多少の分別が用をなす段階を超えていた。

保護者の背後に隠れるように、身じろぎ一つせず立っていた少女が、感情のない声で「マスター」に返事をした次の瞬間。頼りなげなほどほっそりとしたシルエツトが一気に膨張した。

「ひっ……！ あ……あ……やつ……！」

人形のような少女を起点に、むわりと妖しげな匂いが立ちこめる。その小さな身体から、無数の触腕が伸びていた。

父の遺した家の、決して狭くはない玄関を、腐肉の群れが埋め尽くしている。

それは蛸の足のようにも見える。だが、どれだけ大きな個体でも、あれほど密集した数と、天井に届かんばかりの長さを持つモノはないだろう。

そして、ぬらりと粘質に光る点は共通しても、その形状は、実に種類に富んでいた。

それこそ蛸そのもののように吸盤の生えたモノ、代わりにバスマットのような繊維毛がびっしりと生え

たモノ。あるいはごつごつと荒々しいイボを生やしたモノに、魚の脊椎のような多数の節が連なったモノ——先端部の形状すらまるでまちまちで、丸い口から牙を生やしていたり、割れた花芽から白濁のような細長い糸を垂れ流していたり。ぼっこりと拳大に膨らんだ頭を持つ個体もいれば、果てには針を備えるモノまである。

一本として同じ物のない触手達だが、その全てが生理的嫌悪を喚起するグロテスクさを備えている。

悠里は無意識のうちに頬を羞恥に火照らせた。我が物顔で蠢く肉凶器達が、淫らな目的のもとに生まれたものであることを、女としての本能が察したからだ。

縛れそうになる脚でリビングの中に駆け込む。パンと音が鳴るほど勢いよくドアを閉めて、震える手でノブを押さえた。しかし——。

「いっついやつ！」

悠里は悲鳴を上げて手を放し、尻餅をついた。木目調のドアの下端から、電気ケーブルほどの生白い触手が忍び込み、手足に絡みつこうとしたのだ。細引きの触手は目先を変えてノブに張り付き、器用に引き下ろす。ゆつくりと開いたドアの向こうから、少女が感情のうかがえない瞳で悠里を見つめていた。

「マスター」が土足で框を上がり、少女がそれに続く。

「あ……あ……つ」

カタカタと歯を鳴らしながら立ち上がる。向かう先はキッチンだ。作りかけのロールキャベツ、出しっ放しのまな板に包丁。見向きもせずに勝手口に向かう。ノブを回す。開かない。ぶれる指で鍵に手をかける。回らない。再びノブを回そうとする。開かない。開かない。開かない！

ガチャガチャと無様な金属音を立てる悠里の背後

には、すでに無数の「悪意」が迫っていた。ぬるり——と右の足首に吸盤付きの触手が絡みつく。

「ひっ!? きゃあああつ！」

そのまま恐ろしいほどの力で引き倒された。ドアノブにかかっていた指がほどける。フロアリングに手を突っ張る余裕すらなかった。床にこすれたエプロンが、捲れ返ってすっぽ抜ける。倒れた女体はずるずると手繰り寄せられ——悠里は招かれざる客の足下にひれ伏すこととなった。

「ばかねえ。二度、鍵を廻した時から、この家は私の領域となったの。持たざる者は入ることも、出ることも出来ない。サンゴ、見せてあげなさい」

「はい、マスター」

命を受けて少女がリビング中央に鎮座したソファーに触手を絡みつかせる。掃除の時には半ば引き摺って動かす大きな家具が軽々と持ち上がり、南に面した大きな窓に投げつけられた。

「つ!?……?」

悠里は慌てて目をつぶる。耳に飛び込んだのはガシャンという破碎音ではなく、ドスンと重い衝突音。おそるおそる目を開ける。長椅子はひっくり返って窓際に落ち、ガラス戸には傷一つ付いていなかった。

「ご理解頂けたかしら? ここが、異界であることが、察しの悪い、牝豚にも」

見下ろす支配者が言葉を句切って、勝ち誇るように言い含めた。

立て続けの異常事態に、もはや返す言葉もなかった。だが——混乱しきりの悠里は、なおも陵辱に晒されることとなる。

「だから、貴女がどれだけ泣いて叫んでよがっても、だあれも助けてはくれないの。一匹、例外がいるけどね」



「いつ……いや……いやあああああああつ!!」  
ずるり——と。鎌首をもたげた幾本もの触手が、悠里を脅かすように眼前で蠢いていた。

☆

「あつ、やだ、やだあつ」

細い足首からむつちりとした太股に向けて、吸盤の触手が螺旋を描いて這い上る。慌てて上体を起こし、スカートがめくれるのも構わず両手で掴む。

しかし、肉厚の魔手は指が廻らないほど太く、そのうえ表面が生魚のようにぬめっているため、とても非力な悠里に引き剥がせる代物ではない。

碌な対処も出来ぬうちに、また別の触手が二本、ぐちゅりと両手に絡みつく。

「やつ、あうううつ!!」

二重三重にも手首に巻き付いた肉蛇が、細腕を万歳の形に掲げさせた。右手のモノなどは頭頂部から広がる細身の触手を指の間に這い回らせてまでいる。ワンピースとカーディガンの隙間に更に別の触手が潜り込む。ミミズのように節の付いた身が開いた右脇をなぞり、うなじにねちやりと触り、鎖骨を粘液で穢しながら、豊かな胸の谷間に割り入る。

しつとりときめ細かなもち肌に、触腕の体表から分泌される粘液がじくじくとなすりつけられた。

その肌が粟立つような湿った感触に、強烈な恐怖がこみ上げる。堪えきれず悠里は、ぼろりと一筋涙を零した。

「ぶっ……ちよつとお、まだ何もしてないじゃない」

その泣き顔を見て、謎の女は嘲笑を浮かべた。命を受けて手を下す少女は、変わらぬ無表情であった。意思を感じさせぬ虚ろな瞳のままで、少女は肉道具を操る。的確に残酷に悠里を追い詰めていく。

いつの間にか触手は左の足にも絡みついている。無理矢理に開かれた両足の間に、また新たな触手達が割り入ってくる。

一本は先ほどドアを開いた細引き触手。豊麗な腰元をざわざわと撫でてショーツを持ち上げる。そして、たつぷりと肉の詰まった桃尻に食い込んで伸びた布地に、もう一方の牙を生やした口付きのモノが喰らいついた。

「あつ……あ、だめえ……っ!」

パツンと頼りなく腰肌を叩いて、女の鎧が千切られたのが分かった。

二組の触手は更に肌を逆上がり、同様の手順でブラを裁断する。支えをなくした柔乳が、キャミソールの中でたぶんと重力に引かれて位置を下げた。

切断された上下の肌着は、ワンピースの裾から抜き取られ、放り捨てられる。

「だっさい下着」

飾り気のない白の下着を、金髪の美女は鼻で嗤った。

悠里の頬がかあつと染まる。育ちすぎた胸を包めるブラは、手頃な値段ではなかなから見つからない。遠回しにコンプレックスを突かれて、たまらない恥ずかしさがこみ上げる。

恐怖と羞恥、そして混乱。極限の危機に晒され、視界が色を失い歪んでいく。全身が強張ってカタカタと震え、身も心も刻一刻と消耗していく。

「あう……うあ!! やつ……いやつ」

巢に捕らえた蝶を蜘蛛が弄ぶように、服の下に潜り込んだ触手達が白肌をねぶり始めた。

片足に絡んだ吸盤が、まるでキスでもするように吸い付いては離れる。もう片足はぞりぞりと柔毛でこそがれる。脇下から忍び込んだミミズ触手が、すかさず左の下乳に潜り込んで巻き付き、ごねごねと豊果の付け根を揉み引き始める。

「ひんっ……あひあつ。あう、ううううっ……」

また一本肩口からハケのような先端を持つ触手が忍び込み、とぐろを巻いて胴に巻き付いてはくびれた脇腹をはき出す。あるいはスカートの裾を分け入った、人の舌のような器官を持つ個体が股ぐらにくぐって背筋に取り憑き、べたべたと分泌液をなすりつける。

清楚な白のワンピースの下で、無数の触手達が我が物顔で女体を廻り回す。服地が不気味に盛り上げられて、もともと歪に蠢く様が、悠里の柔肌が受ける陵辱の激しさを物語っていた。

ねづつ、にちつ、と、水音が立つほど、触手達は多量の分泌液を体表から染み出させる。それを吸った悠里の服は見る間に濡れそぼち、かろうじて保たれていた肌を隠す役割すら失っていく。重たく張り付いた純白の向こうに、肌の色と毒々しい触手の表皮が透けて見える様は、いっそ全裸よりも卑猥であった。

異形の生物に、絶え間なく若肌を揉み捏ねられて、急速に全身が虚脱していく。思考がぼやけて恐怖が薄れ、代わって身体の芯から妖しげな熱がこんこんとわき出す。

ぬるつく肌がびりびりと痺れる。ヒクンヒクンと節々が不随意に跳ねる。未知の震えは粘液を塗り込まれる一擦りごとに強くなっていた。

「あうっ、うううんっ……っは……ダメよ……こんなこと、しちゃダメ……っ」

恐慌と淫情の潮目にあつて、悠里はつかの間の小康に息をつく。論ずように語りかける相手は、触手を操る幼気な少女であった。

「誰の許可を得て人の物に口をきいているのっ」

だが——その行動は、酷く保護者の不興を買った。

「サンゴッ!」

「はい、マスター」

服の下端から侵入していた触手の一本が、胸の谷間に割り入って顔を出す。そのまま前に身体をたわめ、前合わせのボタンを弾き飛ばした。



「あつ……きやあああつ」  
ぶるんつと重たげに揺れて、たわわな肉果がまろびでる。たつぷりと淫液を擦り付けられた乳肌は、淫狼にてらてらと濡れ光っていた。

「だらしない身体。まるで牛みたい」

心底の軽蔑を込めた冷たい声音に、息が詰まるほどの恥ずかしさがこみ上げる。

ふくよかに過ぎる体つきが悩みの種である悠里は言葉もない。指摘された相手がまるでモデルのようなスレンダーともなればなおさらだ。

両手を広げて縛められ、胸先を隠すことも出来ない。眼前に、新たな触手が迫る。左の乳房はすでに触手が巻き付いて、ぎゅむぎゅむとたわめられている。向かう先は解放の余韻にまだふるふると揺れる右の豊球であった。

開く寸前の花芽のような、ぶつくりと膨れた先端が緩慢に近づく。いやいやと首を振れば、柔らかな果実がそれだけでぶるんと震えた。

「なあに？ 下品に揺らして。誘ってるつもり？」

「ちっ、ちが……あああつ!!」

縛められた悠里を更に、女は言葉で追い詰め萎縮させていく。何をしても馬鹿にされそうで、身じろぎ一つ出来なくなっていく。

乳肌の揺れが治まるまで悠然と待ち——触手はがばりと四つに割れて開く。

真っ赤な内粘膜が覗いたのもつかの間、異形の顎は実りに実った水蜜桃にかぶりついた。

「ひあああああつ!! だめえ! 吸っちゃダメよお!!」

根元までも一呑みにして、じゅるじゅると卑猥な水音を立て触手が柔桃をしやぶりたてた。

「あううん、あふあ、ダメですつたらあ……ああんっ」

器官の内部には無数の肉舌が生えており、乳肌の

隅から隅までが執拗に舐め回される。

それは乙女の突端も同様で、とりわけざらつきの強いべろが、いつの間にか硬く痼つていた可愛らしい桜色をねりねりと虐め齧った。

感受の天秤は、一気に淫楽に傾く。

母性の証を弄ばれて、ふしだらな電流が絶え間なく生じては下腹に向かって流れ込んでいく。

きゅんきゅんと臍下が跳ねて内ももが震え、くびれた腰が悩ましくうねる。

どくどくと早鐘を打つ心臓に当てられ、半開きの口からはあはあと熱い吐息が零れ出る。白磁の頬が朱に染まり、潤んだ瞳がとろりと緩む。

「もう感じてる。さすがは生まれ持ったの変態女ね」

意地の悪い金髪の女がそれを見逃すはずもない。蔑みきった調子でかけられた声に、頬の赤らみは耳にまで広がった。

「わ、わたしそんなのじゃ、……っはうん……どおして、こんな……あひんっ」

震える声で問う悠里だが、その言葉は半ばで途切れる。先んじてパン生地のように捏ねられていた左胸の突起にも、脂肪吸引キヤップのような責め具が取り憑いたのだ。

「高崎悠里は裏切りの後、その『スレイブ』をここに向かうよう仕向けたわ。家族への報復を恐れたのね。私の目的はその子の回収よ」

両胸の性感帯へくちゅくちゅと粘っこい愛撫を受け、ひんひんとはしたくない声が漏れる。見下ろす女はにやにやと嗤いながら、相変わらずの理解させる気のない説明を行う。

「貴女が適合者だったのは想定外よ。鍵は一本しかないから貴女に使うわけにはいかないけれど、契約す前まで黙っておけば、いい取引材料になるわ」

その間にも配下の少女は身体中に絡めた肉縄で、得体の知れない粘液を擦り込んでいく。

張り詰めた牝肌がむちむちとたわめられる。もはや淫熱は骨の髄を伝って頭に達し、思考が煮えて曖昧になる。それでも——生きたクリップとでもいうような、細身の触手が両足の付け根目指して一直線に忍び込んでくれば、淫らな恐怖を覚えずにはいられなかった。

「もつとも——そんなのは全部後付けの理由。本当のことを言えばね」

悠里の意識は送り込まれる紐触手に釘付けとなり、女の言葉を碌に聞いていない。

「あつ……あつ……いやっ……いやよおっ」

目を見開いてふるふるとかぶりを振る。

濡れたスカートの血管のようにのたうつラインが浮き立っている。腰も腿もがつしりと肉厚の触手が巻き付き、逃れるどころか身じろぎも出来ない。その終点が股ぐらに達し——。

「私が貴女を犯すのはね。単なる暇つぶしよ」

「ひいひいひいんっ♡」

牝園の中心に、強烈な刺激が駆け抜けた。

「っつ……摘まれてるう……わたしの大事なこと摘まれてるう。いやああん! そんなにコリコリしちやダメッ、ダメよおっ!!」

目が付いているかのような正確さで、触手は悠里のクリトリスに取り憑いた。

肉厚の外陰唇に頭を潜り込ませ包皮を剥き、神経の密集した快楽器官を集中的に磨き込む。

目の前がちかちかと瞬いて見えるほどの媚電に悠里は狂乱し、ビクビクと腰下を打ち震わせた。

生体クリップも例に漏れず、肌を火照らせる分泌液を垂れ流す。ただでさえ敏感な陰核が真っ赤に腫れ上がり、小指の先ほどにも膨らんで更に感度を増す。触手はその集まった血流を散らすように、きつく肉豆を挟み潰して練り捏ねる。

「ひっ♡ ひんっ♡ ひいんっ♡ あひいん♡ あ



ひいひいんっ♡ 許してえっ……おかしくなっちゃう……おかしくなっちゃうのおおっ！」  
もちろんその間も、胸先を颯り、肌を揉み込む愛撫を容赦して貰えるわけではない。

こりこり、ぞりぞり、くちゅくちゅ、ぐちゅぐちゅと、果てしなく総身を責め立てられて、重たく痺れるような淫楽が下腹に溜まっていく。

おっとりとした優しい美貌を歪め、歯を食いしばって耐えても、間近に迫った破壊をほんの僅か先延ばしすることのほかに悠里に出来ることはない。

「なあに？ イっちゃうの？ こんな気色の悪い触手に身体中弄り回されてイっちゃうの？」  
傲然と見下ろす金髪の女が、それは楽しげに耳元で囁く。

『気色の悪い』——その形容に直接手を下す少女がびっくりと身じろぎし、肉淫具を操る動きが僅かに鈍ったことに悠里は気付かなかった。

「やっぱり牝豚じゃない、貴女」

零下の声音で突きつけられた事実、意識が真っ白になるほどの羞恥が脳裏を焼いて――。

「ひあああああああああつ！」

半ば悲鳴のような嬌声を上げながら、ビクビクビク！ と豊満な身体を波打たせ、悠里は被虐の絶頂に舞い上がった。

ぐんと背が反り、真上を向くほどに頤おおいを持ち上げる。自然、胸は突きだされ、プリンのような柔乳が、触手拘束を振りほどかんにに激しく揺れた。

まるでオモチャのようにガクガクと跳ね回る。ほどなくして尿口から、ぷじやりという水音と共に淫水が漏れて溢れ、むっちりとした太股を伝ってカーペットを濡らした。

はひ、はひとふしだらに息をついて、アクメの余韻を追い出そうとする悠里を、金の髪の女は見下げ

果てたというようにあざ笑う。

「いい年してお漏らしなんて、恥ずかしいのかしら」

「あう、うう……っ。もお……もお許して下さい……」

恥ずかしい事実を指摘され、悠里は瞳いっぱい涙を溜めていやいやをした。だが、その憐れつばい仕草も女の嗜虐をそそのかに終わる。

「なにを甘つちよるいいこと言ってるの」  
女の目配せを受けて、サンゴと呼ばれる少女がまた新たな肉凶器を悠里に突きつける。

思わずひいと情けない声を漏らした。

「本番はこれからじゃない」

「ごつごつと青筋の浮き立った太い幹に、ぶつくりと張り出した楕円球の傘が乗る。立派に育ったキノコをグロテスクにデフォルメしたようなその触手は、昔保健の教科書で見たことのある、男性器の形をしていた。」

「いつ、いやあああつ！ それだけは……それだけは許して下さい」

陶酔は欠片も残さず吹き飛び、さあつと顔から血の気が引く。再びの恐怖にカタカタと歯が鳴る。絹を裂くような悲鳴を上げた悠里を、手枷触手が引き倒す。束ねて絨毯に縫い付けられ、しどけなく腰を突きだした、横座りの姿勢を強いられた。

自然に閉じた足を、右側に絡みついた肉縄が膝から吊って持ち上げる。

下着はとうに剥がされている。眼前に立つ二人がほんの僅か横に廻って覗き込めば、隠す物なく女の最奥が見えてしまう格好だった。

「だ……ダメっ、ダメよお！ そんなこと無理よおっ！」

「どうなの？ サンゴ」  
狼狽する悠里を更に追い詰めるべく、間を置かず

肉茎触手が秘園にくちゅりと押し当てられる。熟れた女体は本人の意思を裏切つて、敏感に膣下を跳ねさせた。

「十分に濡れています。挿入に支障はありません」  
形や感触を確かめるように、くちゅ、ちゅぐと淫器が蠢く。陰核絶頂に綻びかけた、楚々としたピンクが押し広げられ、もっちりとした脂肪の乗った肉土手が左右に潰れる。

複雑に層をなした粘膜のミルフィーユは、少女の言葉通りたつぷりと蜜を溜め込んでいた。触手肉傘の一掻きごとに、愛液の飛沫が霧となって弾ける。

そのたびに望まぬ愛悦がビリビリと下腹を苛む。まるで陵辱を期待するかのよう、花びらは開き癖を強めていった。

「ですってよ」

白衣の女はくすくすと可笑しげに怯える悠里を見下ろす。

「あつ、あうっ、お願いです、お願いですからあつ」  
そして――寝かせたシャフトで秘裂を擦り上げていたベニス触手が、身を起こして牝の口に突き立つ。

「待って、待って……あぐううううううううっ！」  
媚声混じりの懇願を無視して、慈悲なき凶刃が悠里の身の内を引き裂いた。

あまりにも呆気なく理不尽な喪失に、頭の中がからっぽだった。きーんと耳鳴りがして視界がぐんやりと歪む。

茫然自失の悠里に構わず、触手陰茎は膣道を奥へと突き進む。無理矢理に狭肉を押し割られる痛みに、悠里は悲痛な泣き声を漏らした。

「ひぎ……あああつ！ う、動かないでっ、痛いのおっ」

「何を大袈裟な。サンゴの媚薬液をあんなに浴びてののに、痛いわけ……まさか貴女」  
一度はその訴えを一笑に付すが、白衣の女は何か







に気付いた様子で言葉を句切った。

汚けに指先でスカートの端を摘み、めくる。

「あ……ああ……」

そこには、淫惨な光景が広がっていた。

滑らかな下腹の形良い茂みの奥。愛らしい造りの花唇が、グロテスクに筋張った肉柱に貫かれている。そして、痛ましくこじ開けられた清苑の端から、純潔の証が零れ落ち、赤く腿を伝っていた。

「そ、そう。初めてだったの。ぶっ……ご、ごめんなさいね。ふふ、ま、まさかその年で、そんないやらしい身体しておきながら、うふふふ、は、初めてだなんて思わなくて……あは、あはははっ！」

眉根を寄せたしかつめらしい表情は、物の数秒と持たなかった。口先だけで謝りながら、心ない哄笑を上げる女に、心臓を鷲掴みされたような悲しみがこみ上げる。

「ねえどんな気持ち？ その年まで大事に大事に守ってきた処女膜をバケモノのチ●ポモドキで破られるのってどんな気持ち？ あはははははっ！」

「うっ、うううっ、うあああああああ……！」  
更にはしゃいだ調子でからかわれ、悠里の中で何が決壊する。悠里はぼろぼろと涙を零し始めた。  
「そうよねえ、処女なら仕方ないわよねえ。サンゴ。中にもたつぷりくれてやりなさい」

「……はい、マスター」

子供のように泣きじゃくる悠里を、白衣の女は更に追い打つ。

処女路を肉槍はなおも押して進み、子宮口にこごとと穂先を到達させる。その幹が波打つようにブルリと膨らみ――。

「んひいっ!? あ、熱いのお腹に出てるうっ！」

どぶどぶと先端から淫液の塊を吐き出した。

最奥に圧着する鈴口を模した排泄路は、大量の汚濁を聖域に流し込む。熱湯をばんばんになるまで詰

め込まれた子宮から、即効性の淫悦波が生じ、一瞬にして痛みを快美で塗り潰していく。

「あうんっ、も、もおいやあ！ わたしの身体にもうへんなことしないでくださいっ！」

恐怖から淫棄、また恐怖と痛みから淫棄へと、めまぐるしく心と身体を翻弄されて、悠里の人格は碎けていく。

優しい美貌は涙にまみれ、豊満な女体がぐねぐねと妖しくくねる。凄艶を晒す悠里を、侵入者達は更にいたぶる。

表皮からも媚毒を染み出させていた淫棒が、ずりりとその身を奥から引いた。

「ひううううっ♡」

膣道に溜め込まれたズキズキと疼く熱感、肉傘のそこそそでその全てが愛悦に裏返った。甲高い嬌声を上げ顔を反らした悠里に、肉器は往復の一撃をこごめんと見舞う。

「んひいひいひい♡」

また子宮口を強かにぶたれ、今度は背を丸めて膣を食いしほる。くぐもった悲鳴は、ずろずろと肉槍を引き摺り出されるとトーンが再び上がり、突き込みを喰らっては低く濁る。高く低くを往復する淫らかな歌声は、際限なく速まる抽送に遅れて崩れ、あー、あー、と単調な喘ぎ声に変わっていった。

掻き混ぜるような乱暴さで処女肉が荒らされる。子袋から逆流して膣壁に溜まった愛液と媚薬の混交物が、張り出した雁首に掻き出されてぶちやぶちやと股ぐらに飛び散った。

総身を撫で回し、三点の突起に張り付いた触手達は、まるでソリストをもちり立てる伴奏のように、ゆるゆると責めを甘くする。自然意識は苛烈に耕される牝穴の感覚に集中してしまう。

もはやまるで痛みはなかった。不条理な虐悦に、悠里は為す術もなく狂わされる。

「ごちんごちんと膣奥を殴られるごとに、開脚を強制された内ももから尻房までがたぶたと揺れる。

振幅は滑らかな下腹を伝わり乳果にまで達し、肉縄の隙間から覗く白肌が崩れそうなほどに震えた。咽び声もどこか狂おしげに上擦り、その顔色は妖しく赤らむ。顔中を涙に涎に鼻汁とでどろどろに汚した見苦しささえ、嗜虐を誘う淫靡を醸す。

この場に男がいたならば、ほつれ髪を頬に張り付かせて悶え回る痴態に、堪えようもなく股間を膨らませることになっただろう。

その全身の柔らかさも、乱れ顔の艶めかしさも、余すことなくさらけだしながら、悠里は絶頂の淵へ追いやられていった。

「あっ♡ あっ♡ いやっ♡ いやっ♡ おかしくなるっ♡ おかしくなっちゃううっ！」

「処女のくせに下品な声出して。恥ずかしいとは思わないの？」

「ああアア知りませんっ、わたしこんなの知らないんですう、うううんっ♡」

身も世もなくよがり咽ぶ悠里を、白衣の女は容赦なく詰る。僅かな時間でこじ開けられた被虐の性癖は、その心ない一言にさえ浅ましく反応する。

彼女の言う通りなのかもしれない。

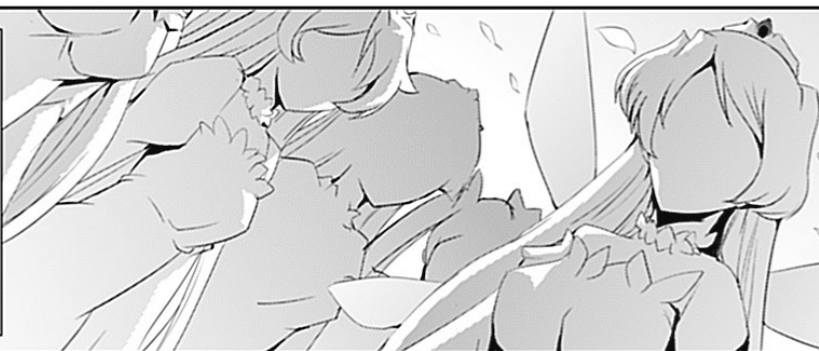
ほんの小さな少女が操るこの世のモノとは思えないナニカで、赤ちやんを産むための大切な場所を無茶苦茶にされて、わたしは気持ちよくなってしまうのだ。そんなふしだらな女が、どうやって淫乱なんかじゃないと言い張れるだろう。

ただ悲しくて涙が止まらない。ただ恥ずかしくて顔が熱い。それなのに悲しさと恥ずかしさを意識すれば、お腹の奥がきゅうと疼いてまた気持ちよくなってしまう。これなら痛い方がまだマシだった。

「けんごくん、けんごくん……」

「誰それ？ そんな奴私知らないわ。知ったことじ

我々が住む  
人の世界とは別に  
異世界がこの世には  
存在する



その一つ五人の妖精の  
女王達が統治する  
妖精界がこの世界に  
侵入する者達がい

その者達の名は  
『バッド・フェアリー』  
力を欲し自らの身体を  
魔術によって改造した  
元妖精である

あらゆる欲望に満ちた  
『バッド・フェアリー』達は  
女王達に戦いを挑み敗れた

しかし僅かに生き延びた  
『バッド・フェアリー』が  
我々の世界に逃げ込んで  
来たのだ

彼等は人や動物に化け  
女性を襲い洗脳し卵を孕ませ  
同胞を増やそうとしていた



この事態を憂慮した  
妖精の女王達は使い魔『ピュア』を  
この世界に送り込み  
五人の少女達に  
王の力を分け与えた

そして少女達は  
魔法の力を得た戦士  
『ピュアメイツ』に変身し  
バッド・フェアリー達と  
戦い続けているのである





可憐に舞う五人の美少女戦士！



美少女魔法戦士  
**ピュアメイツ**  
PURE MATES

episode  
**1**

漫画 助三郎  
すけさぶろう

著者近刊好評発売中！

助三郎

**牝豚END**

二次元ドリームコミックス  
『牝豚END』



大きいくせに  
なんて素早いの！

きやう!!



くらえ！  
ミクローシュアロ！  
分裂する魔法の矢！！



避けた！？

でも今の  
攻撃は囮  
本命は…



よし！  
貫った…!!

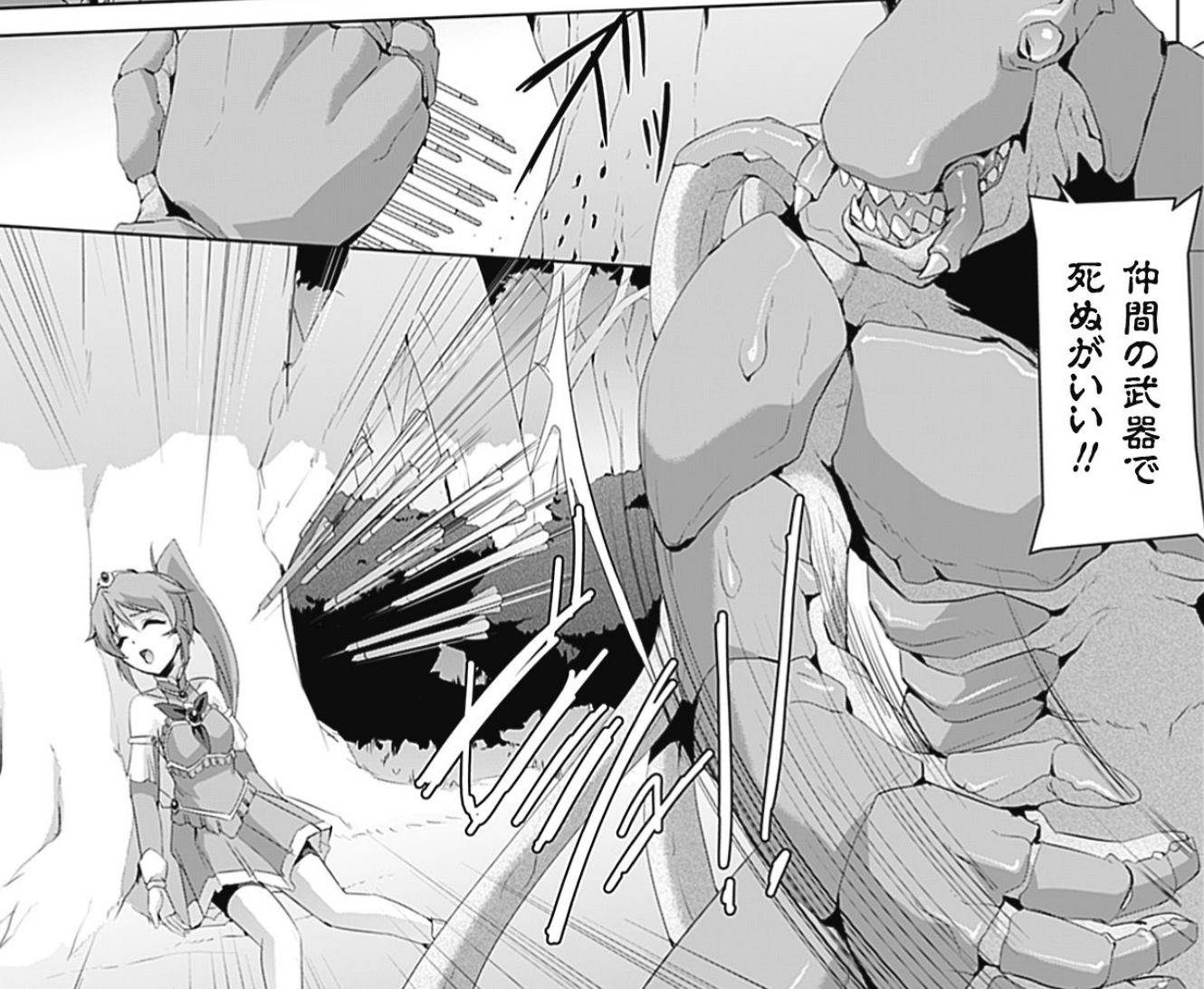




ピュア・  
マダー!!!



かはっ!?

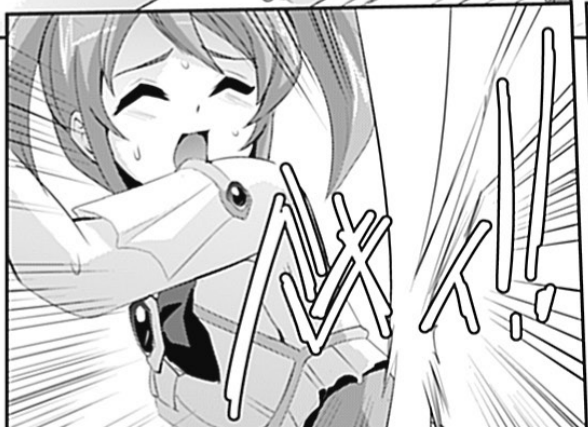


仲間の武器で  
死ぬがいい!!



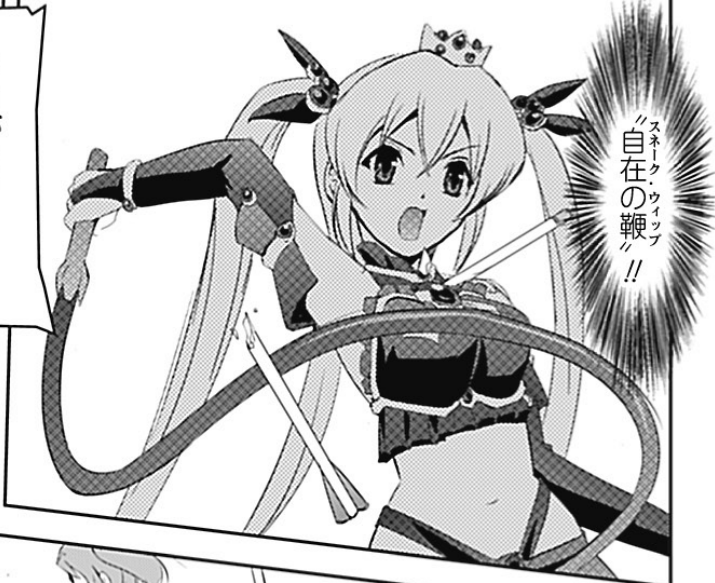


ダンシングソード  
剣の舞!!

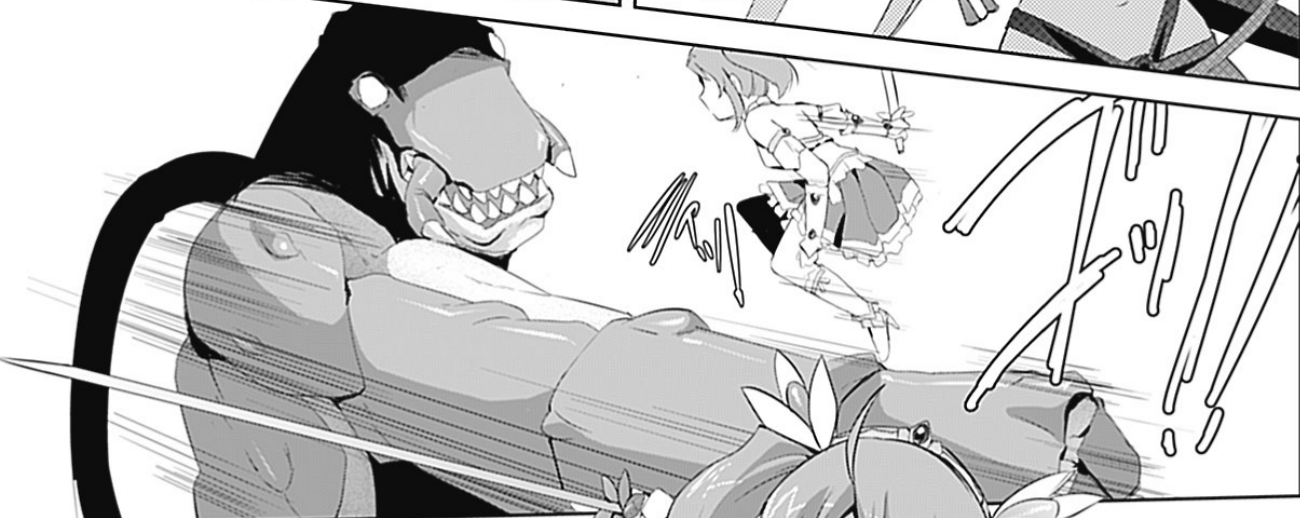




ありがと！  
ピュア・レモン！



スネーク・ウィップ  
自在の鞭！！



馬鹿な…!?

こいつさっきまでと  
まるで動きが違…!?

ディメンション・スラッシュ  
次元斬り！！



うわあ  
流石にドキドキしたあ

ピュア・ピーチ  
はるの ちもか  
春乃 桃香



ドキドキじゃ  
ないわよ!  
矢の前に立つなんて  
私は心臓が止まる  
かと思ったわ!

ご…ごめん  
檸檬ちゃん



ホントに  
いつも無茶ばかり  
するんだから

大体 茜は  
底う 必要ないわ

体力馬鹿なんだから  
穴が多少空いたって  
大丈夫よ

オイ コラ  
檸檬

ピュア・マダー  
あきそら あかね  
秋空 茜

ピュア・レモン  
なつき れもん  
夏樹 檸檬





何だよ！



何よ！



檸檬ちゃん  
素直じゃ  
ないんだから

さつき  
私と同じように  
茜ちゃんを庇おうと  
したでしょ

私の方が近くに居たから  
間に合っただけだね

あ  
!?



桃香さん  
茜さんから  
一番遠くに  
居たのに…  
得意の  
勘違いですわね

桃香はイザという時  
能力が跳ね上がりますけど  
自覚ないですから…

いっ見  
そう見えた  
かもよ

私は  
あんなに  
のい



でも空さん  
愛しの茜さんに  
怪我がなさそうで  
良かったですわね

ピュア・エメラルド  
季無翠

ピュア・スカイ  
真冬空

翠その言い方  
やめてください











あ、西エ!!  
ママのインビエ

見な  
らめえええ





もっと知りたい!

＋聖換天使＋

# エクスラグナ

Reincarnate Angel Exragna

**最強の力を持つヒロイン!**  
**しかし、強い力を使えば使うほど**  
**陵辱される未来が待ちうける!!**

これまでの戦うヒロインとは一線を画すべく企画された本作。そのテーマは「敵を圧倒する凄まじい力を持ったヒロイン」です。必要な力さえ発揮すればどんな敵も倒せてしまいます。しかし、強大な力を振るえば振るうほど、エネルギーとなる人間の精気が必要となり、ともに異形と戦う仲間からの様々な陵辱を受けることになってしまいます。人々を守るという意味と、その後来るであろう恥辱への嫌悪、その狭間で葛藤するヒロインにご注目ください!

圧倒的な力を持ちながらも、恥辱の運命を自らの手に委ねられた少女の葛藤!



時には力及ばず陵辱の餌食になる魔殺天使の二人。肉体が強化されているせいでより淫靡な責めを味わうはめに。



戦闘での消費エネルギーを測るために身体を弄られるヒツギ。どんな辱めにも恥態を見せまいと振る舞う。



大技を使ったため、初めてのフェラ粉仕を強要されてしまう。さらにアナルを絹川が生み出した触手生物が犯す!



## Characters



### 黒河ヒツギ

普段は面倒見の良い生徒会長として慕われる生真面目な少女。亡き母の遺志を受け継いで、「聖換天使エクスラグナ」となつて戦う事を受け入れた。自分の身を犠牲にしても人々を守る意思は持っているが、過激になる陵辱に、少女の心は徐々に折られていく。



### 高坂レイ

かつて異形に散々犯し殺されかけたところをエクスラグナに救われた双子の姉のほう。EPの魔力を肉体に流し込まれた影響で、人間を超越した力を得た。EPを憎み、戦っているボーイッシュな少女。



### 高坂リナ

レイの妹で、同じくEPに陵辱されていたところを助けられた少女。姉とともに「魔殺天使」に変身してEPと戦っている。二人の力を合わせた技を使うこともできるが、エクスラグナほどの力はない。

## 絹川昭介

ヒツギの母である音羽の研究仲間、対EP用戦闘服「聖換衣」の開発者。「聖換衣」の力の源が判明してからは、音羽に数々の陵辱を行い、やがて装着者を陵辱することのみを追求するようになってしまった。

## Evil Pawn

二十年前ほど前に、とある魔術師によって異世界から召喚された異形の生物。「マザー」と呼ばれる最初の一体によって統制され、人間の女を犯して増殖し、男は皆殺しにする化け物で、Evil Pawn(悪魔の兵士)——通称EPと呼ばれている。

強大な力の対価——  
恥辱のエネルギー補充が激化する!!

＋聖換天使＋  
**エクストラグナ**  
*Reincarnate Angel Extragna*

第三話 喪失

小説／**上田ながの**  
う え だ  
ひなもりみず は  
挿絵／**雛森瑞羽**  
ILLUSTRATION

著者近刊  
『**僕が異世界の  
女帝だなんて絶対無理!!**』  
8月21日発売!



（またケータイを弄ってる……。悪い娘ではないのだけど、少し注意しないといけないわね）

生真面目なヒツギは「はあっ」と溜め息と共に桃色がかったツインテールを揺らしつつ、生徒会庶務倉科陽子に「ちよつと倉科さん」と声をかけた。

現在は部費を決める大事な生徒会会議の最中だ。生徒会長として注意すべきところはしなければならぬ。

「……倉科さん？」

けれども陽子はこちらの言葉に反応しない。呆然とした表情を浮かべながら、ケータイ画面を食い入るように見つめていた。

「どうした？」

「陽子ちゃん？」

他の生徒会役員達も首を傾げ――

「え？ ええ!? う、嘘でしょ!!」

声を上げた。

「何があったの？」

声を上げた生徒もケータイ画面を見て呆然としている。首を傾げながらヒツギも画面を覗き見た。

見ていたのはポータルサイトヒヤッホーのニューページだ。大きく開業したばかりの東京スカイツリーの写真が映し出されている。ただし、普通の状態ではない。

スカイツリーはその全体を緑色の巨大な鳶のようなもの――触手で覆われていた。六三四メートルの巨大タワーを超える巨大な触手である。

反射的にヒツギは生徒会室に置かれたテレビの電源を入れた。

「見てください。東京スカイツリーが巨大触手によって覆われています。その全長は七〇〇……いえ、八〇〇メートルはあるでしょうか？ 巨大な触手がスカイツリーを飲み込んでいます!!」

画面にはヘリコプターからの空撮画面が映し出さ

れる。危険を考慮してか、かなり遠い位置からの空撮映像だったが、タワー自体が巨大な為、はつきりと巨大触手を確認することができた。男性アナウンサーがヒステリックに声を上げている。

「マジかよこれ……」

「こ、これってもしかしてEP?」

映像を見ながら生徒達が呟いた。異界から出現したマザーと呼ばれる怪物によって生み出された人間を襲う悪魔の兵士――EPの存在、及び呼称は一般的にも広く知られている。

「じ、自衛隊は何をやってるんだよ……」

「現在警察、及び自衛隊が周辺住民の避難誘導、及びEP侵食拡大防止の為に防衛行動を取っておりますが、タワー内には現在も多数の来場者、並びに従業員が取り残されている状態であり――」

こちらの呟きに答えるように説明が続く。

「あ、あれは!? み、見てください。魔殺天使です。」

その説明が一時中断された。同時に超望遠レンズによりタワーがアップになる。

（レイ……リナ……）

間違いなく魔殺天使の二人だった。かつてEPによつて陵辱されたことにより、魔の力を手に入れた少女天使達。EPを滅ぼす為に戦っている二人は両手両足を触手によって縛られ、大の字状態で地上から凡そ六〇〇メートルほどの地点で拘束されている。二人が身に着けている赤と青のバトルドレスは半分ほど溶け、白い柔肌が覗き見えていた。ほとんど膨らみがない平らな乳房が覗き見えてしまっている。

何とか拘束から逃れようともがいている様子ではあったが、相手は小柄な二人に対してあまりに強大すぎた。あれでは無駄な抵抗にしかならない。

「お、おい……まさかあれって……」

「やだ、止めてあげてよお」

やがて新たな触手が二人の陰部に伸びていった。一体EPが何をしようとしているのか、この場にいた全員が理解する。

次の瞬間、画面は一気に引きの映像に変わった。二人が陵辱される姿を流すわけにはいかないという判断だろう。

「……ごめん。ちよつと外に出るわね」

これ以上は見えていられない。ギリッと血が滲むほど唇を噛み、

「え？ か、会長!!」

戸惑う仲間の声も無視して生徒会室を飛び出し、校舎屋上に出た。

EPによる凄惨な陵辱が行われているとは思えないほど、空は晴れ渡っている。晴天を見つめながら拳を強く握った。

それと同時にケータイが鳴り響く。画面には『絹川昭介』と表示されていた。チツと舌打ちをしながらかこれを取る。

「――どういうことよ。何故あれの出現に気付かなかったの!？」

「ああ、じ、情報はもう仕入れていたんだね。ウェヒヒ、ご、ごめんね。あ、あいつ……こつちのレイダーに引つからなかったんだよ」

「でもレイ達は気付いた」

「魔殺天使は特別だからねえ。あ、あの二人はEPの力で産まれた存在。い、いわばEPの子供だからだから、ぼ、僕達よりEPに対する反応力が高いのさ。そ、そんなことより、こうして話してる暇なんてあ、あるのか――」

自分から電話をかけてきたくせに、挑発的な言葉を向けてくる。聞いていても無駄なので途中で電話を切った。

（いわれなくても分かっているわよ）

時間がない。皆を救わなければならない。

スウツとヒツギは息を吸い、右手を天に掲げた。  
「エクステンション——ラグナッ!!」

カアアアッ!!

瞬間、ヒツギの肉体が輝きを放つ。太陽の光さえ飲み込むほどの強大な閃光。その中で身に着けていたプレザータタイプの制服が光の粒子に還元された。白き肢体が露わとなる。

ツンと上向きがかった美しい乳房。キュッと引き締まったウエスト。濃いめの陰毛に隠された秘部。そのすべてが白日の下に晒される。

だが、それは一瞬のことではない。新たな光の粒子が美しき裸体を包み込んだ。光が白銀と黒色の聖換衣を構成する。

「——聖換天使エクストラグナッ!!」

変身完了と共に、ヒツギ——いや、エクストラグナは裂帛の気合いと共に自身の名を口にした。

（すぐに行くわ。レイ、リナ……それに捕らえられたみんなを必ず救ってみせる!!）

決意と共に聖換天使は空を舞う。

\*

（大きい……分かつてはいるつもりだったけど、近くとこの大きさ……想像以上ね）

浅草上空にて巨大触手を睨む。

「ひっ! んあああああ!」

「たしゅけつ! だじゅげでえっ!! んひい!」

視界には犯される魔殺天使の姿が映っていた。二人にエクストラグナの存在に気付く余裕はない。触手によって膣と肛門を同時に犯され、甘い嬌声を上げている。

（すぐに助けてあげるからね）

こうして犯されているのは二人だけではないだろう。多分タワー内部に取り残されている人々も……。時間的余裕はあまりない。

「すぐに決着をつけさせてもらおうわ!!」

言葉と共に右手を突き出し、力を集中させる。

「エンジェルボイスッ!!」

ラアアアアアアアッ!!

強大な破邪の力を解き放った。

「ゴオオオオオッ!!」

これに対して触手が吼える。大気を、大地を震わせるほどの強大な叫びだった。それと同時に直径数十メートルはある巨大な触手を伸ばしてくる。

「——なっ?」

巨体に比例するように、敵のエネルギーは強大だった。エンジェルボイスはまるで効いていない。

「チィッ!」

紙一重のところで巨大触手を回避するのだが、触手の周囲から放たれる瘴気が聖換衣に触れた。

「——これはっ?」

途端に聖換衣が腐り落ちる。

（まさか……ど、聖換衣の防壁を破った!?）

想定以上の力だった。

聖なる力によって守られているはずの、聖換衣を腐らせるといふことはつまり、こちらを上回るほどの邪の力に充ち満ちていることの証明でもある。

（……不味いわね）

それが何を意味しているのか、すぐに理解した。

視線を眼下へと移す。

視界には模倣のように小さな街並みが映った。

街並みは——腐り始めている。

木造、鉄骨、コンクリート——ありとあらゆるものが、EPの放つ瘴気によって腐敗していた。

（このままじゃいけない……）

このまま放置すれば、東京は瘴気の世界に沈む。増幅された瘴気から生まれるEPが人々を犯し、より多くのEPを生み出すだろう。

このまま放っておくわけにはいかない。

（時間の余裕はないわ。早く倒さないと）

幾本もの触手がエクストラグナに向かって伸びてきた。それらを回避しながら、巨大タワーを睨む。

「ゴアオオオッ!」

触手が再び吼えた。まるで無力なエクストラグナを嘲笑っているように聞こえる。

「……あまり私を舐めないでね」

嘲笑いに対しヒツギは静かに答えると共に、両手を合わせ、天に捧げるようにあげた。

（力の出し惜しみはできない。奴を倒す）

一瞬脳裏に絹川の気色悪い顔が思い浮かぶ。醜い舌を伸ばし、舌舐めずりをしている姿だ。

使用したエネルギー量に応じて、あの男からの陵辱も激しいものになる。

（もしこの技を使ったら——いや……関係ない。私は皆を救う。私がやるべきことはそれだけよ。母さんが守った世界を守る!!）

一瞬浮かんだ負の感情を振り払う。

「——エクス——」

ポツリッという口を開いた。紡がれる言葉。これと共に、強大な力が天に突き上げた腕に集中していく。

「ガアアアアッ!!」

力の巨大さに気がついたのか、EPは咆哮すると更に数十本の触手を伸ばしてきた。これらの触手が絡み合い、一本の巨大肉紐に変化する。直径数十いや、数百メートルに達するだろうか？ 小さな少女の肉体など一瞬で粉々にされてもおかしくない。静かな瞳で向かってくる触手を見つめ続けた。

次の刹那——

ドグアアアアアアアッ!!

「ゴギヤアアアアアアアッ!」

触手が絶叫する。

エクストラグナの小さな身体を吹き飛ばしたはずの触手は、肉体に触れる直前で光の粒子となつて消滅



していた。力を集中させたことによつて体外に排出された過剰エネルギーがバリアとなっている。強大すぎる聖天使の力の前に、EPは原子にまで分解されていった。

「お前の負けよ」

消滅していく敵を見つめながら、静かに呟く。そして――

「ラグナエクスキューションッ!!」

天に掲げていた腕を振り下ろした。シュバアアアアアアッ! 組まれた両腕から、強大すぎる光の奔流が撃ち放たれる。

全長八〇メートルはある巨大触手を黄金の輝きが丸ごと包み込む。

「ゴギャッ! グギャアアアアアアアアッ!!」

EPが断末魔の悲鳴を上げた。大気が激しく振動する。地球そのものが震えているかのようなだった。薄れゆく光と共に、巨大EPは消滅する……。

\*

「あれだけ巨大なEPを一撃で葬る……さ、流石だねヒツギ。君がこ、ここまでエクスラグナとしての力を使いこなせるとは思ってなかったよ。お、音羽よりももしかして強いんじゃないかな?」

研究所の研究室にて戦いを終えたヒツギ――未だ変身は解いていない――に絹川が椅子に腰を下ろしつつ、ニタニタ笑いながら話しかけてくる。

「気色悪い。褒められたところで喜びなど……。」

第一敵を倒せたからなんだというのだ。確かにスカイツリーに捕らわれていた人々を救出することはできたけれど、救えたのは女性だけ。男性は皆殺しにされた後だった。

女性にしたって全員EPによつて陵辱されてしまっている。一応ヒーリングウィングで浄化したものの、EPに犯されていた時間が長時間に及んだ影響

により、一部の女性の意識は戻らなかった。精神まで侵されてしまったのだろう。EPからの陵辱によつて意識を失ってしまった人間を元に戻す術は現時点ではない……。

（くそっ……私が……私がもう少し早く奴の存在に気付くことができていれば……）

悔しさばかりが募る。

「も、もしかして責任を感じてるのかい? きき、君は何も悪くないのに。ウエヒビ、そ、そういうところは音羽そっくりだね。か、可愛いよお。はあはあ。ああ、可哀相に。ぼぼ、僕が慰めてあげるよ」

「さ、触らないでっ!!」

哀れむような表情を浮かべて手を伸ばしてくる。慌ててこれを振り払った。

この男に慰められるなど死んでもごめんだ。

「酷いなぁもう。プンプン!」

「う、五月蠅い! そんなことより、早くエネルギー消費量を調べなさい」

いちいちの行動が癪に障る。怒りだけではなく、殺気までも込めた視線で睨み付けた。

「怖いなぁぶるぶる」

わざとらしくブルツと身体を震わせつつも、絹川はいつものように聴診器を取り出し、ヒツギの身体を舐め回すように調べ始めた。

「ウエヒビ……こ、今回の結果は、よ、四〇%だ。さ、流石にかなり消費しているねえ」

「……四〇……」

覚悟はしていたが、実際数値を出されると視線が泳いでしまう。ジワリツツと掌が汗で濡れた。エネルギー消費量を考えると、とても手や口でしたくらいでは足りないだろう。

喉が渇いた。ゴクリツツと唾液を飲み込む。

「……で、何をすればいいの?」

しかし、できる限り動揺は表に見せず、まるで本

日の夕食でも聞いているかのように何気なく尋ねた。この男にだけは弱っている姿を見せたくない。

「何って簡単だよ。ここまで来たらせ、せせ、セックスだよ! うえ、ウエヒビ、し、処女をば、僕にち、ちようだいね」

パチンツと可愛らしくウインクをしってくる。その様が嫌悪感を増幅させた。

「……そう。分かったわ」

静かにこれに頷く。

「へ、お、驚いたりしないの?」

あまりにごく普通なこちらの態度に、少しばかり絹川が驚いたような表情を浮かべる。

「驚きなんかいいわよ」

（いつか来るべきものが来た。ただそれだけのことよ。そう、必ず通る道。だ、だから動揺なんかない。あるはずない）

吐き気すら感じるのを我慢して、真つ直ぐ絹川を見つめた。私は何も動揺してないと視線で訴えかける。

「それで……どうすればいいの?」

これは勉強や生徒会の仕事と変わらない。ただやるべきことをするというだけのことだ。

そんな態度に絹川は一瞬きょんとしたような表情を浮かべた後、すぐにまた下卑た笑みを口元に浮かべた表情に変わった。

「い、意地を張る姿も可愛いよ♥ 覚悟できてるって、強がる姿……お、音羽にそっくり♪ ウエヒビ、たた、たつぷり二人で楽しもうね!」

絹川は椅子から立ち上がる。彼の巨体によつて今にも潰れそうだった椅子が、ギシツツと軋んだ音を響かせた。

「あ、愛する二人が最初にすべきことは、まますはちち、チューだね」

ハアハアと既に息が荒くなっている。少し近づか

れるだけで、周囲の気温が上がったような気がするくらい、彼の顔は汗塗れになっていた。

「あ、愛してなんかいないわよ……こ、これは必要だからする……それだけよ……」

太った男が抱き締めてくる。毛むくじやらかな手がヒツギの後頭部に回された。もう片方の手は腰に巻き付く。そのまま身体を引き寄せられ――

「んっ」

分厚く膨らんだ唇を押しつけられた。

「たかがキス。たかがキスだ……」

もう何度もしてきたことだ。今更だということはない。この程度のことでも動揺するなどあり得ない――

――そう心の中で何度も自分に言い聞かせる。

ちゅくつ、ちゅくつ……

「んふっ……ちゅくつ、んちゅく……」

当然唇を重ね合わせるだけでは終わらない。すぐにヒツギの口腔に舌を挿し込んできた。これに対して一瞬抵抗しようと口唇を閉じようとしたが、すぐに諦めて自ら口を開く。

抵抗など意味はない。嫌悪すべき時間を無駄に長引かせてしまうだけだ。

（キスがなんだっていうの。この程度なんの問題もない。だから、これでいいの……）

口内に醜い男の舌が侵入してきた。舌に舌が絡みつく。

「んふう。んふ、んくふう」

くちゅつ、ぴちゅ、くちゅくちゅ、ちゅくう……

わざとらしく音を立て、口腔を嚙つてきた。艶めかしく舌を蠢かせ、口腔粘膜をまさぐり、歯の一本一本まで舐めてくる。

舌で弄ばれるたびに耳に届くグチュグチュという下品な音色を耳にしながら――こんなことはなんでもない――とでもいうように、ヒツギは冷めた視線で目の前の男を見つめ続けた。

少しでも弱った様な姿をこの男には見せたくない。チュボンッ。

「ウェヒヒヒ」

やがて絹川はキスを中断し、気色悪く笑った。

（やつと終わりか……）

すぐにでも唇を拭い、うがいをしたい――という衝動を抱えつつも、冷たく男を見つめ続ける。

「ああ、もつと。もつとだよ」

「えーんぐっ！ んっ、んんんっ!!」

が、キスはこれで終わりではなかった。再び唇が重ねられ、口腔に舌が挿し込まれる。

そのまま先程まで以上の勢いで、ぐちゅつ、ちゅぶぶつ、ちゅずるるるつと口腔を舐つてきた。

「んっ、くむつ、ふむううっ」

その動きはどこまでも執拗。

口腔を蹂躪することしか眼中にないともいうかのように、ひたすら口内を舐つてくる。

ちゅばつ、くちゅばつ、ちゅつちゅつちゅつちゅ、ちゅくう……

口腔に唾液が流し込まれる。拒絶することなどできず、自然と飲み干すことになってしまった。一部飲みきれなかった分が、口端から垂れ流れてしまう。

まるでこちらの口腔粘膜に唾液を混ぜ込もうとするかのように、舌をくねらせてくる。無意識のうちにこの動きを止めようと、自分の舌を動かしてしま

う。自然と絡み合う舌と舌。グチュグチュという下品な音がより大きなものになってしまった。

「んっふ、ふんん。くむつ、ふちゅう……」

自然と鼻にかかったような吐息を漏らしてしまう。この音色に興奮したのか、絹川はヒツギの身体を研究室内に置いてあるパイプベッドの上に押し倒してきた。

（お、重いわよ……）  
多分一〇〇キロ以上はあると思われる男の身体が

のし掛かる。変身しなくてはこれで押し潰されてしまっていたことだろう。僅かばかりヒツギは眉間に皺を寄せた。

が、絹川は一切こちらに対する気遣いなど見せない。それどころかより激しく舌を動かしてきた。

ぐちゅつ、ちゅばつちゅばつちゅばつちゅばつ、ちゅつちゅつちゅるるるう。

何度も何度も口付けが繰り返される。

（こ、これ、い、いつまで続けるつもりなの？）  
啄むようにキスを繰り返してくる。

絹川のキスはどこまでも執拗だった。

「んふっ、くつ……んちゅつ、ちゅぶう……」  
（口の中グチャグチャにされてる……。なんかこれ……あ、頭がボウツとしてくる……）

今更辛いとも思わないなんでもない行為のはずなのに、口の中を嚙られていると何故だか身体中が熱くなっていくように感じた。熱に浮かされたように、思考が揺らぐ。

（た、保つの……自分を保ちなさい……）  
必死に自分自身に言い聞かせた。

一分、二分、三分――ベッドに押し倒されたまま、たつぷり口腔を嚙り続けられてしまう。

「はあっ……さ、最高だよ。ひ、ヒツギのお口はとっても美味しいよ」

「あ……はああああ……」

ようやく唇が離れたのは、それから一時間近く過ぎた頃のことだった。

唇と唇の間に唾液の糸が伸びる。何故だか身体中が熱く火照っていた。

（も、もう終わり？）  
ほんの一瞬、物足りなさにも似たものを感じてしまう。自然とどこか潤んでいる瞳を、問いかけるように絹川へと向けてしまった。

「も、もしかして……も、もつときき、キスしたか



ったのかなあ？」

当然気付かれています。

「ち、違うわっ！ そんなことないっ！ あ、あり得ないっ!!」

こいつと更にキスをするなど、考えるだけで血の気が引く。必死に拒絶の言葉を向けた。

「可愛いよ。とってもキュートだよお♡」

絶対の拒否。だというのに絹川は嬉しそうな表情を浮かべる。頭や頬を可愛いペットを愛でるように撫でてきた。

「……ふ、巫山戯たことを……い、いわないで……」

長時間のキスで頭をボウツとさせたまま、絹川から顔を逸らす。

こんな奴に褒められても嬉しくない……。

「ふ、ふふ、巫山戯てなんかいいよ。心の底からそう思うんだ。音羽にそっくりで、き、綺麗だよヒツギ。むしやぶりつきたくなる」

べちゅつ、べろろお。

「ひっ！ あ、や、やだっ」

絹川は唇を首筋に密着させてきたかと思うと、下品な音を立てて舐め始めた。

ざらついた舌の感触が伝わってくる。ゾクゾクツと背筋に冷たいものが走る気がした。

不快でしかなく、ヒツギは必死に身をよじって絹川から逃れようとする。が、体重一〇〇キロを超える巨漢を振り払うことなどできない。

「逃げようとしても無駄だよ。え、エクスラグナの力はば、僕に対しては発動しないんだからね」

顔中汗塗れにしつつ首筋を舐めながら、乳房にまで手を伸ばしてくる。

（い、いやっ！ こ、こいつに触られるのはぜ、絶対に嫌あつ!!）

義務的に、儀礼的に行為を行う。何も考えず、仕事だと思えばいい——そう何度も心に言い聞かせて

きたけれど、どうしても嫌悪感を覚えてしまう。

醜い毛だらけの指が、乳房に触れた。

「んっ。くんんっ」

柔肉に指が食い込む。上向きがかった形のよい媚乳は、あつさり形を変えられてしまった。

途端にピリッとした電流のような刺激が走る。肉体がビクンツと反応してしまった。

「や、やつぱりヒツギのおっぱいはびび、敏感だね。ちよつと触っただけでこれだ」

ニタリツと絹川は口元を歪ませる。

「ち、違うっ！ び、敏感なんかじゃないわっ!!」

当然認めることなどできない言葉だった。

胸に触られて感じるなどあり得ない。あつてはならないことだ。

「否定しなくてもいいよ。ほ、ほら、お、おっぱいこうやって弄られるのがいいんでしょ？ べろろ、べろろべろろお」

だが、否定は聞き入れてはもらえない。更に激しく指を蠢かせ、こねくり回すように乳房を揉んできた。同時に首筋を舐めることも忘れない。

「くひっ！ き、気持ち悪い！ 気持ち悪いのよっ!! んんん」

この言葉は本音だった。

とはいえ、こういった言葉を向けたところで絹川は傷つかない。それどころか寧ろ喜ぶだけだろう。それはヒツギにだって分かっている。だからこそ、儀礼的に済まそうとしていたのだから……。

それでも、分かっているなお、拒絶の言葉を吐かずにはいらなかった。

「き、気持ち悪い男にお、おっぱい揉まれて感じちゃうんだ。ウエ、ウエヒビ、そ、そういうところもお、音羽を思い出す」

「か、母さんの名前を出すなっ!!」

おぞましい行為の最中に母の名を聞かされる——

これほど耐え難い屈辱はない。

「で、でも、ほ、ホントにそっくりなんだもん。ほ、ほら、お、音羽はこうやって弄られるのが好きだったけど、きき、君はどうなのかな？ ほら、ち、乳首だよ」

蠢く指が聖換衣の上から乳頭に触れる。執拗に何度か胸を揉みしだかれてしまった為か、乳首は聖換衣の上からでもはつきり分かるほど勃起してしまっていた。これを醜悪な指が摘む。

「んくひっ」

途端に乳房を揉まれていた時以上に、甘い疼きを伴った痺れが身を襲った。

「ほら、感じて」

「か、感じてなんかない」

「が、我慢は身体にわ、悪いよ。ほ、ほら、素直になつて。ほらほらほらあ」

指を使って乳首を転がしてくる。時には引っぱり、時には押し込んだりもしてきた。

玩具のように弄ばれてしまう。

（感じない。感じるなんてあり得ない。こんなの、き、気持ち悪いだけよ）

ピクピクツと肉体は反応してしまいが、ヒツギはこれを否定する。絶対に認めることなどできなかった。

「ああ、味わいたいよ。たまらないよお」

「ひっ！ んあつ」

乳首を指で觸つてくるだけでは終わらない。遂に絹川は聖換衣の上から乳首に吸い付いてきた。

まるで赤子のように乳首を咥え、わざとらしく下品な音を響かせながら胸を吸ってくる。ブツブツとした頬が窄まる様子がより嫌悪感を抱かせた。

舌が蠢き、乳首をなぞる。口唇で乳頭を挟み、チユッパチユッパと音色を奏でた。

ユッパチユッパと音色を奏でた。

下劣な唾液が聖換衣に染みを作る。

「お、美味しいよ。バブーバブー。美味しいよママ。ウエヒ、ウエヒヒヒヒ」

「い、いやっ！ いやあああああっ!!」

あまりに不気味すぎる姿だった。我慢できずに悲鳴まで上げてしまう。

「怖くないよママ。ほら、こ、怖さなんか感じないくらい、きき、気持ちいいでしょ？」

ちゅぽつ、くちゅぽつ、ちゅつぽちゅつぽつ！

キスの時もそうだったが、絹川の愛撫はどこまでも執拗に繰り返される。

「き、気持ちよくなんかない！ す、吸うなあ!! お願いだから……くひっ！ んんん」

自分が作り上げた聖換衣が唾液塗れになることも厭わない。いや、寧ろそうしたいとでもいうかのよう、乳首だけでなく乳房全体を舐め回してきたりもした。

刺激を与えられるたびに、肉体は反応を見せてしまう。絹川の舌の動きにどうしても甘い疼きを感じてしまう。肉体は何度も震えた。

「バブバブ、やっぱりママ感じてる。嬉しいの？ おっぱい吸われるの嬉しいの？ 母子揃ってば、僕に授乳するのが嬉しいの？」

「う、嬉しくなんかないわっ！ そ、それに……んっんっん……か、感じてもない！ か、母さんだつてこ、こんなことで……んんん……か、感じなかったはずよ!!」

こいつの言葉は全部嘘だ——とは思うのだけれど、どこをどう愛撫すれば感じるのか分かってでもいるかのように、的確に敏感部を刺激してくる。

乳房を弄られれば弄られるほど、鋭敏な肉体はより熱く火照っていった。

「つつ、強がりなんか無駄だよ。嘘をついたって、ここを見ればすぐに分かるんだからね」

語りながら絹川は乳房から——唾液の糸を乳頭と唇の間に伸ばしつつ——口を離すと、ヒツギの下半身へと移動する。

「い、今——」

「に、逃げちゃ駄目だよ。そ、そんなことをしたら、エネルギー補充はできないからね」

「ぐ」

身動きを取るなどできなかった。

「ああ、す、素晴らしいよ。このむ、ムチムチの太股、たまらないよお」

スリスリと太股に頬ずりをしてくる。勿論抵抗などできない。

べちゅつ、べろちゅう。

「くう……」

舌を伸ばし、太股を舐め回してくる。屈辱以外の何物でもなかった。その上——

「ああ、凄く汗臭くなってるよ。戦いの後だから、蒸れ蒸れなんだねえ」

クンカクンカと鼻を鳴らしてくる。

「か、嗅ぐなっ！ 嗅がないで」

人としてこれほど恥ずかしいことはなかった。

「だだ、大丈夫だよ。と、とってもいい匂いだからさ。ほ、ほら、こっちはどんな匂いがするかなあ？」

太股だけでは終わらない。絹川はヒツギの両足を大きく左右に開かせると、聖換衣のクロッチ部分に鼻を寄せ、イヌのように鼻を鳴らす。

（か、嗅がれてる……。私の大事な部分が嗅がれてる……）

すぐにでもこの場から逃げ出したいくなるほどの屈辱と羞恥を覚えた。

が、絹川の意に反するわけにはいかない。身動き一つ取ることができなかった。

「いい匂いだよ。じ、じゃあ直接嗅いでみよう」醜い男の指が、クロッチ部分に触れる。するとそ

の部分が溶けるように消え去った。ヒツギの秘部が露わとなる。

濃いめの陰毛に隠された秘裂。散々キス、乳房への愛撫を与えられた為だろうか？ 愉悅を知ってしまったている陰部はしつとりと潤みを帯び、クバツと淫らな花弁を咲かせてしまっていた。

桃色の肉壁が絹川の前に晒される。

「ウエヒヒ、ああ、すごくく、臭くなってるよ。ち、チーズみたいな匂いがする」

「い、いわないで!!」

「とっても美味しそうだよ。い、いただきますう」

こちらの言葉になど耳を貸してくれない。

まるで食事の前のように手を合わせて頭を下げると、不気味に膨れた唇を膣口へと近づけてきた。

べくちゅあつ。

「んああっ！」

舌が伸び、肉壁を舐める。途端に乳房に対する愛撫以上の刺激がヒツギを襲った。明らかな快楽を伴った感覚に、思わず声を上げ、ビクリツと身体を震わせてしまう。

「はああああ。ち、ちよつと塩しよっぱいな。あ、汗をかいているからかなあ？」

ニタニタ笑いながら小首を傾げてくる。

「う、五月蠅い。だ、だま——あつ、んひあつ！」文句を言う暇などなかった。更に陰部に対する口付けを行ってくる。

まるで唇にするかのように、最初は啄むようなキスが繰り返された。

グチュグチュグチュと唇が媚肉に押しつけられる。「くっ……んんっ……」

自分の両足の間。股間部に憎むべき——母の仇ともいべき男が醜悪な顔を埋めている。これほど屈辱的なことはなかった。

（殺したい。こいつを殺してやりたい……）



強く拳を握り込み、憎しみを込めた視線を向ける。だがそれだけだ。それ以上のことは何もできない。この男がいなければ、世界を守ることができないから……。

べちゃっ、べちゅるっ！ くちゅっ！ べちゅる。

「んくっ……ふっふっふうう……」

やがてキスだけでなく、本格的に肉壁を舐めてくる。トレーで水を飲むイヌのように、わざとらしい音を奏でながら、肉壁の一枚一枚をしゃぶってきた。舌の蠢きに合わせて、肉体を肉悦の波が襲う。自然と口が開きそうになってしまったが、必死に唇を引き結んで喘ぎ声を抑えた。

「ど、どうしたの？ き、きき、気持ちいいなら、声を上げてくれていいんだよ」

「き、気持ちよくなんか……んっんっん……ないわ！ 気持ちよくなんか、はあはあはあ……なるはずない!!」

「気持ちよくない？ う、嘘をついても無駄だよ。だって、ほ、ほら……」

語りながら二チャリツと指を媚肉に沈めてくる。

「ふぐうっ」

走る刺激。シートを握りしめてしまう。

「こ、こんなに濡れてる」

触れた指はすぐに離された。指先と膣の間にねつとりと糸が伸びる。間違はなく愛液だった。

「……た、単なるせ、生理現象よ……」

「ま、またせ、生理現象？ お、音羽も昔そういつてたよ。ウェヒヒ、こ、こうなると俄然やる気が出てきちゃうなあ。お母さんみたいにあんあん可愛らしくささ、囁かせてあ、あげるね♡」

これまでヒツギに向けてきた中で最高の笑顔——最高に気色の悪い笑みを絹川は浮かべた。

にちゃっ！ くちやあつ！ ぬちやあつ!!

「んくっ！ ふぐう……。んっふ、んふう……」  
愛撫が始まって一〇分が過ぎる。どこまでも執拗に舌を動かし、肉壁を掻き混ぜてきた。

ちゅぶっ！ くちゅぶっ！ ぬちゅう!!

「あ、そ、そっこは！ あんんん。ふ、ふぐっ！くあつ、ああああ」

二〇分——肉壁だけでなく、膣口から膣中へと舌を挿し込んでくる。肉壁をなぞるように蠢く舌の動きに、ビクリビクリッと肉体は何度も反応を示してしまった。

ちゅばっちゅばっちゅばあつ!

「ふっひっ!! んんんん! んあつ、あつあつあつあんんん」

三〇分——肉壁、膣中だけでは収まらない。絹川は陰核にまで愛撫を始める。包皮を剥き、散々与えられた刺激によって勃起した敏感部に舌を巻き付け、チュッパチュッパと音を立てて吸ってきかた。

「あつ、くううう! や、やめつて、そ、そこは、や、止めてえ!」

これまで以上に性感が増大する。開いた口からは自然と嬌声が漏れてしまった。

「ど、どうしたの？ き、気持ちよくなってきた?」

「き、気持ちよくなんっか、な、ないっ! 気持ちよくなんかないいっ!!」

それでも快楽を否定する。死んでもこいつによって感じさせられているなど認められなかった。

「ふ、ふくん、じ、じゃあもつと頑張るね」

が、これは絹川を喜ばせる結果にしかない。ウエヒヒツと男は笑うと、更に重点的にヒツギの陰核を責めてきた。

「んああああつ」  
艶やかな悲鳴が室内に響く。

そして一時間——

「あ、ふひっ、ふあああ……も、もうやだ。こ、んなの……あつあつあつ……い、いやなのお……んああああ」

休むことなく与えられ続けた愛撫によって、陰部はまるで失禁したみたいに濡れていた。すっかり花弁は咲いてしまっている。濡れそぼった媚肉が、淫靡に蠢いていた。

「疼く。疼くの……わ、私のあ、アソコが疼く……」  
散々与えられ続けた愛撫。けれどもここまで一回も絶頂には至っていない。達しそうになるたびに、絹川は愛撫を中断してきたからだ。

そして今も——  
「く、くっる! あつあつああああつ! き、ききやうう!! い、イクッ、私、い——」

湧き上がってくる絶頂感。だが、しかし!!

「あ、な、なんで? ど、どうしてっ!! なんだえ」  
達する直前、絹川は再びヒツギの陰部から唇を離し、愛撫を中断してきた。

遂には「何故?」と問いかけまで行ってしまう。

「なんでって、どうしたの? ねえ、どど、どうして欲しいのかなあ? ねえ、ねえねえねえ?」

「ふぐっ、く、そ、それは……」

絹川の問い。これまでは「なんでもない!」と否定してきた。が、それももう限界だった。

ジンジンと子宮が疼いている。燃え上がりそうなほどに身体全体が熱くなっていた。

乳房が最初よりも膨らんできてしまっている。剥き出しになった陰核が、ベニスのように勃起していた。

「ほら、す、素直にな、なりなよ。じ、自分に正直になればいいんだ。我慢になんかさんの意味もないだ、だってそうだろう? どっちにしろこれはや、やらなければいけないことなんだからさ」

絹川の言葉は事実だ。

否定し続けたところで、最終的にはこいつを受け入れなければならない。そうしなければ、戦い続けることができないから。母の守ろうとした世界を守れないから……。

「そ、そうよ。こ、これは仕方がないの……」

自分の心に言い分ける。

「でも、だけど……駄目。そ、それだけは駄目よ！心も身体も限界だった。だが、まだ耐える。こいつにだけは屈したくなかった。」

「ま、まだそんな目をするんだ。で、でも、ぼ、僕を拒絶したらこの世界は終わりだよ。お、音羽が守った世界を、ひ、ヒツギは守る気がないの？」

「か、母さん……」

母の名に心が揺らぐ。ジュンツと何故かより陰部が熱くなるのを感じた。

「た、確かに音羽も抵抗したよ。で、でも、音羽はよく分かった。ぼ、僕のいうことをき、聞かないと世界が救えないってことを。だ、だからね……ぼ、僕にいったよ。い、イカせて欲しいって」

「か、母さんが……」

「そうだよ。ま、まだ赤ちゃんだった君の上で四つん這いになって、僕に愛撫されながら、と、敏夫の遺影の前でイカせてつねり、ああ、あの時の音羽……今思い出すだけでも射撃しそうだよ」

「母さんが……あの、母さんが……」

母の屈辱を想像する。吐き気すら湧いてきた。同時に現実を思い知らされる。あの母でさえも屈服するしかなかったのだと……。

火照っていく肉体。ジンジンと下腹部が疼く。

「さあ、どど、どうする？」

にたあつと絹川が笑った。

「い……イカせて……。わ、私をイカせて……」

屈辱の言葉を絞り出す。こうする以外になかった。

「か、母さんの屈辱を、む、無駄にしない為よ……」  
「ウエヒヒヒヒ！ い、いいよ！ イカせてあげるよ。ぼ、僕、僕、僕、僕、僕……」

「……ひっ」

歓喜と共に絹川はペニスを晒す。跳ねるように飛び出す肉棒。瞬間、血の気が失せた。自分が下してしまつた決断の意味を思い知らされる。

反射的に逃げようとしたが、散々繰り返された愛撫によつてまともに動くことなどできなかった。

グチュリッ。

「ひっ！ や——いやっ！ いやああっ！」

膣口に肉先が押しつけられる。途端に焦らされ続けた肉壁が肉先に絡みついていた。

「うえひ、ウエヒヒヒ、じじ、じゃあ行くよ」

こちらの悲鳴になど聞く耳を持つてはくれない。正常位体勢で、ペニスを突き出してき。

ぶぢっ！ ぶぢぶぢぶぢいっ！！

「ふぎっ！ きっ！ ひぎいっ！！」

容赦などまるでない。肉槍は躊躇なく膣奥までヒツギの肉体を刺し貫いた。

身体の中で何かが引き千切られるような音が聞こえた気がする。同時に走る痛み。結合部からはタラリと破瓜の血が一筋流れ落ちていった。

「あ、あ……ああああ……」

「は、挿入してる。こ、こいつの……こんな奴のペ、ペニスが……わ、私の膣中に挿入してる……」

犯された。母の仇に処女を奪われた……。

自分のし掛かる絹川の姿に、現実を突き付けられてしまふ。

「ああ、いいよ。あ、温かいよ。き、キュンキュン僕のチ●ポを締め付けてくる。ウエヒヒ、凄く締まってるよ。お、音羽を思い出すなあ」

「い、いうなっ！ か、母さんの名前を出すなあ」

自然と舐から一筋の涙が流れ落ちた。

「で、でも、や、やっぱりきき、君の方が音羽よりきついよ。ま、まあ当然だよ。音羽を犯した時、か、彼女は君を出産した後だったんだから、ゆ、緩くなるのも仕方ないよね」

「やめて。もう母さんのことはやめ——んんっ」

ちゅぐつ、ちゅぐつ。

再び口付けされた。結合状態でのキス。

「んちゅつ、くつ、ぶぐつ……んんんっ！」

舌が口腔をまさぐる。それと同時に突き込まれたペニスが動き出した。

「ふあっ、んあああっ！」

膣奥まで突き込まれていた肉棒が引き抜かれていく。途端に走る刺激——それは痛みではない。カリ首によつて膣壁が引つかけられると、舌での愛撫と同等——いや、それ以上に全身を弛緩させるような愉悅の疼きが走った。

「あ、え、な、なんで？ ど、どうして？」

処女を奪われて感じるのは痛みではないのか？

くちゅぶつ、くちゅぶつ、くちゅるるるう。

「んふっ、ふんん……んふっ、ふんん」

口腔で蠢く舌に、無意識のうちに自ら舌を絡みつかせてしまふ。グチュグチュと舌と舌を混ぜ合わせながら、身体を震わせた。

「ど、どう？ き、気持ちいいでしょ？」

「そ、そんなことない……」

「う、嘘をついても無駄だよ。だ、だって君は本当に、淫乱な娘なんだから。だから、処女を奪われて感じてるんでしょ？ ほ、ほら、こうされるのが気持ちいいでしょ？」

ジュグンツと引き抜いていた腰を再び膣奥に突き込んでくる。

「んああああっ」

瞬間、目の前が真っ白になった。視界に火花が飛





ぶ。ビクビクッと何度も身体が痙攣した。

「あ、う、うそっ……はぁーはぁーはぁー、こ、こんなもの、そよ……」

（今の……私、い、イッた……。嘘。あり得ない。そんなのあり得ないのに……）

軽いものではあつたけれど、間違いなくヒツギは達してしまつていた。

キュウツと蜜壺が収縮し、ペニスを締め上げる。膣壁越しに肉棒の形がはつきり認識できてしまつた。

「イッたでしょ？」

「い、イッてないッ！ イッてないッ!!」

必死に首を左右に振つて否定する。認めることなどできるはずがない。

「ひ、否定しても無駄だよ。だ、だつて……これから君はもつともっとイクことになるんだからね!」

ペロリツと絹川は舌舐めずりをする。

「音羽もきつと喜んでくれるよ。じ、じゃあ行くね」

「や、止めて……い、今は……う、うごかな——んあぁあつ!」

ぎじゅつぎじゅつぎじゅつぎじゅつ!

容赦などどこにもない。ニタつきながら絹川は更に腰を振り始めた。処女を失つたばかりの少女に対する気遣いも存在しない。ただ己が快楽を食う為だけの、乱暴なピストンだつた。

「だつめ……くひつ! そ、それいつじよう、う、ご——んっんっんっん」

こちらが声を上げて聞かざる持つてはもらえない。それどころか、よりピストンは激しさを増していくばかりだつた。

「ふぐつ、くつ、んつく、ふぐう」

肉先が子宮口を叩く。カリ首が肉壁を引っ張り、刺激してくる。そのたびに嬌声が上がりがうになつてしまつた。身体中から力が抜ける。

必死にヒツギは唇を引き結び、これを抑えた。

（か、感じない。私は感じない。絶対に感じない! か、感じては駄目なのっ!!）

これはエネルギーを補充する為だけの行為でしかない。義務的に行つていただけのことだ。そのような行為で性感を感じるなどあつてはならない。イカせてと頼んだのも、絹川をその気にさせる為だけのことでしかない。心の中でそう言い聞かせ続けることで、快楽を抑えようとするのだが——

「我慢なんかにする必要はないよ。だ、だつて、お音羽だつてチ●ポ突つ込まれてヒーヒーよがつていたんだから。き、君が我慢する必要なんかないよ」

それはまるで悪魔の囁きだつた。

（嘘よ。そんなのぜ、絶対に嘘……で、でも……）

考えてしまふ。あの母が絹川に犯されて感じてしまつてゐる姿を。

強くて、かつこよくて、誰よりも尊敬していた母。そんな母でさえも、この快楽の前には勝てなかった。そう考えると、自分など耐えられるはずがないと思つてしまふ。感じてしまつても仕方ないではないかと思つてしまふ。

「ほ、ほら、た、たつぷり膣中に射精してあげるね。ぼ、僕のザーメン受け取つて、たつぷりイッてね」

生まれてしまつた心の隙——それを埋めるように、更に絹川はピストン速度を上げてきた。

「だ、駄目よ! ぜ、絶対駄目。な、膣中——膣中だけは止めてえつ!!」

この男の精液を子宮に流し込まれる。それ以上におぞましい行為などない。

「駄目だよ。これは必要な行為なんだからね」

じゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっ!

「くつひ! あ、当てな、いで! お、奥に当てないでえつ!!」

より激しさを増すピストン。ギシギシとベッドが軋んだ。膣中でペニスが大きさを増す。亀頭部が今

にも破裂しそうなほどに膨れあがり——

「射精するよつ!」

どびゅつ! どびゅぶつ! どつびゅるるるっ!! 「あ、で、射精する! な、なつかで、膣中で射精——い、イッく! イッくう!!」

ドクンドクンツと膣中でペニスが痙攣し、多量の熱液を膣中に流し込んだ。子宮が熱液で満たされていくのが分かる。

この熱気により、限界まで膨れあがつていた快感が爆発した。

「あ、ああああ! イク! イクうううっ!!」

視界が白に染まる。背中を反らし、ベッドシーツを手足の指で掴みながら、何度も身体を震わせた。散々焦らされた上での絶頂。肉体が蕩けそうなほどの性感が身を襲つた。

結合部からドブリツと流し込まれた精液が流れ落ちていく。

（あ、だ、射精された……な、膣中に……膣中に射精された……）

心が軋むように痛む。

「ああ、よかつたよ。ささ、最高だつたよ」

そんな痛みを知らぬ、絹川がキスをしてきた。くちゅつ、ぐちゅる……ちゅぐう。

口腔に舌が入り込む。

「ふぐつ、むふつ……くふう……」

口付けをされながら、ヒツギは一筋の涙を零した。（……こ、これで……これでいいのよね母さん。みんなを守る為なんだから……これで……）

砕け散りそうになる心。

それを母への誓いで必死に押しとどめる。仇の白濁液を、仇の体重を、仇の体温を、仇の舌を感じながら、ヒツギは無感情に視界に映る白い天井を見つめた……。



# 悪魔の娘

特集

今号は、エロいヒロイン属性の定番、悪魔っ娘特集です！ 悪魔っ娘といえど、コウモリの羽のような頭飾りやニユツとねじれた角はチャームアップです。しなやかな黒いしっぽもキュートです。あ、のしっぽの先端の葉っぱみたいに膨らんでいる部分をベロベロしたい……！

さて今号の悪魔っ娘特集はサキュバ、ス度がちょっと高めです。えっちな事に貪欲で、その豊かな肉体で魅了されて悪魔っ娘のなすがまま、何をされても身を任せてみたい……ああもう定番だよ！ そんなニジマガ悪魔っ娘特集、一時ではありますが、貴方様の夢をお叶えいたします！

## CONTENTS

- 【小説】 小悪魔リディア 幼肉の宴 …………… 094
- 【漫画】 白話草 …………… 111
- 【分岐小説】 魔宝ハンター レジーニャ&メルル …… 128
- 【特別企画】 文字コラ やってトライ！ …… 163
- 【特別企画】 輝け！ デモン&魔>ロード杯 悪魔っ娘コンテスト …… 171
- 【小説】 シャドウ・フェイス ～学園の二つの顔～ …… 172
- 【漫画】 墮ちる悪魔 …………… 191
- 【漫画】 発情スブラッシュ！ …………… 229

イラスト：あぶりだしざくろ

# 小悪魔VS少女退魔士!

夜の教会で淫らな宴が幕を開ける!!

小悪魔

リディヤ

肉の宴

小説  
NOVEL

よ しろ う  
夜 士 郎

挿絵  
ILLUSTRATION

あ や か せ  
綾 柳 ち よ こ



天に丸い月の浮く満月の夜。  
その薄暗い教会の中は、苦悶の呻きで満ちていた。

「があつ……！ うああつ……！」

男が教会の床に寝転がり、全身を震わせている。その顔は、怒りと恐怖とに歪み、我が身に降りかかった厄災にひたすら打ちのめされている。

彼が着ているのは真つ黒な修道服。教会の、神父であつた

「悪魔……めえっ！」

神父の震える手は小さな十字架を握んで、それを必死の形相で、自分の下半身へと向けている。

そこにいるのは小さな女の子。神父の、脚の間に座り込んでいる。

異様な姿をしていた。

女の子の頭蓋には、羊のそれに似た角が生えている。背中には蝙蝠のような羽。先っぽに、槍の穂先をくつつけたような、黒い尻尾が揺れている。

悪魔と呼ばれるそのものの姿だ。

小さなその悪魔は、だが、十字架を突きつける神父の行為を虫けらが悪あがきをしているとしか認識せずに、ただ唇に愉悅を浮かべて嘲笑う。

「くすくすくす。 ねえ苦しい？ ねえねえ、どうなのお？」

声質だけならば、鈴の転がるように愛らしくもあるのに、そこに籠められた感情は、爛熟した果実のような甘く腐れた淫蕩に満ちていた。

幼い体軀だ。

人間の年齢ならようやく二桁に届く

うかという程度ではないか。

黄金の髪がふわふわと、金色の粒子を撒き散らし輝いている。ルビーのように赤い瞳はちよつとだけツリ目で、まるで悪戯好きの子猫のよう。

ちつちやな唇は笑みを型作り、その表情もまたあだけない。

痛々しいくらいに細い首筋が、黒と白の相克するドレスに繋がっている。布地をたつぷり使ったゴシック調のドレスであるが、それでも幼子の、その痛々しいほどに華奢な体軀を隠しきれ

るものではなかった。

上腕から剥き出しの腕と、膝上で断ち切れたミニスカートから伸びた両足は細い。脂肪の欠片もない、細く、未成熟な四肢である。

「ふふ。くすす……」

少女は嗤う。

吊り上がる紅い唇は、唾液にまみれてぬらりと艶めいている。熱情すら含む赤い瞳に映るのは、苦しみもがく神父の姿と——剥き出しの、天を突くほど怒張したペニスであつた。

悪魔娘が口腔をかばりと開く。

ぬめやかな口の中は、大量の涎にまみれ生暖かな泥濘と化している。つい今まで、何かをそこに頬張っていたような、溢れんばかりの唾液の量だ。

「やめろっ……もう、やめろお！」

幼女が大口を開く、ただそれだけの行為に、神父は恐怖の悲鳴を上げた。

「どうしてそんなに怖がるの？ あなたが今まで、ずうずうつと、やらせ

ていたことでしょうか！」

と、悪魔娘はその幼い口で、屹立ちるペニスをばくりと頬張ったのだ。

「あむ……ん、ちゆる……」

あだけない顔にグロテスクな肉棒が突き刺さる。亀頭と鞘の少しを呑み込んで、紅い唇が縮こまる。

「ん、ふふ。ちゅ……ちゅううう！」

神父の生殖器官をくわえ込んだ幼女は、そのままちゅうちゅうと、ストロ―を吸うように肉棒を吸い上げた。

「つ……ぎいっ！ い、いぎやあつ！ あぐつ……ひぐいひぐいっ！」

神父の身体がびくびくと痙攣する。歪み引きつるその顔は、性的快楽を享受する者のそれではなかった。

目は血走り、口の端から泡を吹き、襲いかかる苦痛に蹂躪されている。まるで毒を呑んだような有様の神父へ、悪魔娘が向けるのはあだけない顔に似合わない嗜虐の笑み。

「あがつ……ぐぎい、やめつ……！」

涎を垂らして懇願する男のペニスを少女は酷薄に食ひ続ける。

「ふふつ。ちゅ、ちゅううう……。ほらもつと、もつとよ！ あなたの命、私にちようだい……ちゅううつ！」

金色の髪を揺らめかせ、悪魔娘は、激しく男の腐肉を吸い上げた。

「ぎいひいっ！」

痛苦に悶える神父の顔に皺が増えてゆく。皮膚から艶が失われ、その面相は老人が如き様相を呈していくのだ。

干涸びていく……。

少女。リディア・モーガンに生命力

を吸い上げられて。

人の生命力。それは、リディアのよう

な人ではない存在にとつて、極上の滋養でありご馳走だ。それをペニスから吸い上げて、彼女は満悦である。

「ん、ふはつ。ふふ。おいしい。どう？ 私みたいなコドモのクチでおちんちんチュウチュウされて、気持ちいいでしょう？ あなた、好きだものね」

唇とペニスの間にエロティックな涎橋を垂らしながら、リディア。

「た……助け、て、くれ……」

呻き声にはもはや死の色が濃い。

だが。

「……ねえ、神父様？ 女の子たちはあなたにそう言ったでしょう？」

返されるのは、冷徹な眼差しだ。

この教会で彼は、孤児を引き取り育てていた。表向きは、地域に奉仕する敬虔な信徒の務めとして。

そして裏では、彼の欲望を発散するための性玩具として。年端もいかぬ目の前にいる悪魔のような幼童の、未成熟な身体で散々に愉しんだ。

嫌がる口に無理矢理男根を突っ込んで、口奉仕させたりもした。

「おれが、わるかつ……助け……」

だが今、彼を襲うこの行為は、快楽を得る物ではない。孤児たちをいたづけているのは、彼の命そのものののだ。

「ちゅう。ちゅうちゅうちゅう」

「あぎぎっ！ いぎやあああつ！」

リディアはまるで子どもがジュースを飲むように、無邪気に神父の命そのものを吸い取っていく。男のその身に死に近づいていくのを嗤いながら見ている。

「ひいぎ……ゆ、りゅして……」

ついには十字架を床に落として、神父は命乞いを始める。

「あなたに犯されて、助けてって。神様にも、お願いしたでしょう。だけれども、助けない。くすくす。それなのに、なにを虫のいいこと言ってるの？」

と、薔薇のような唇がペニスを包むきゅ、と頬が窄まって、これまでよりもより強く、男の命を奪い取る。

「ちゅうっ！ んっ、ちゅぱっ。くちゅ、ちゅうう、ちゅううううっ！」

「……あ、ぎあ、が……」

尿道に残る尿の残滓すら吸い上げるようなバキュームフェラに、神父から全ての力が失われていく。もがき苦しむだけの生命力もなく、髪は抜け落ち顔はミイラのように乾ききっていく。

「あ……た、ひゅけ……」

かさかさした縮んだ唇から漏れるのはただ掠れた吐息のみ。

「くすくす。——だあ、め」

リディアは可愛らしく片目を瞑ると、とどめとばかりにスベスベの頬を窄めてペニスを吸い上げた。

神父の眼球が裏返る。その身体が一瞬だけぴくんと震えて。

静寂。あとはもう、ぴくりとも動かなかった。

「んっ……ちゅぱっ」

口を離すと、渴いたバナナみたいなペニスがだらりと落ちた。

「ふう。……くす。これであの子にも、いい生命力をあげられる……」

呟いた。——刹那。

乱暴に、教会の扉が開け放たれた。

「神父……！ ああ、遅かったのですかっ！」

突然現れて悔恨を口にするのは、月夜にも白銀の煌めく銀鎧の戦士。

それもまだうら若い少女であった。彼女は、ミイラみたいな遺骸を目にして歯を軋ませる。その瞳が、刃の鋭さをもってリディアを睨みつけた。

「貴様……よくも、神父をつ」

「あら。教会の退魔士？ こんばんは。いい月夜ね」

ぱたぱたと羽を揺らして、とぼけた返事を送るリディアに。

「……悪魔懲罰執行者第四十位。フィオナ・フォン・レザークース。悪魔。あなたを神の敵と認定し、滅します」

フィオナと名乗った銀鎧は、大きな剣を突きつけた。

「くすくす。滅する、ねえ？」

——執行者とは、大陸を支配する教会の信者であり、その組織において魔を滅する役割を持つ殺し屋だ。

その可愛さに、まるで似合わない。悪魔娘よりは二つか三つ、年上のように見える。

背はそれほど高くない。体を覆う銀色の甲冑は頼もしくもあるが、少女

の身には少しだけ大きいと見える。まるで、成長するからと大きめの服を与えられた子どものようだ。

大きな、くりつとした瞳は爽やかな青。鼻筋も涼やかで、薄い桃色の唇は頑迷に引き締められている。

「正義の名の下に！ いざやっ！」

仰々しく叫び、芝居がかった仕草で剣をかざす。

「はいはい。いーからとつとと、かかつてきなさいな」

腕を組み、呆れた様子のリディアをまつすぐに見据えて——。

フィオナが地を蹴る。

白銀のお下げがたなびく。

影を置き去りにするような疾駆。振り下ろされる剣撃は、正義を具現化したような無慈悲な鉄槌だ。

「きやああんっ、こつわっいっ」

言いながら、吹き抜けの天井近くまで退避する。フィオナの一撃は石の床に深々と食い込んで、彼女は腰を入れそれを簡単に引き抜いた。

と、彼女はリディアを見上げ、少し膝を落として。

——跳躍。

「へ？ きやあつ！」

次の瞬間戦士の身体は、悪魔の目前まで到達していたのだ。

振るわれる一撃を、慌ててかわす。

「あつぶな……あああああつっ！」

なんとフィオナの左手に、ゴスロリドレスの裾を掴まれていた。ともに落下。床に叩きつけられる寸前で、フィ

オナの手から逃れて滑空した。

「——スプリット・エンズ！」

距離を取りながら魔術を行使する。突きつけた手の平から放たれる三十本あまりの炎の矢が、教会の中を朱に照らして執行者に殺到する。

だがその脅威をフィオナは、

「効きませんっ！」

振り回す大剣にて打ち、払い、消し飛ばし、その悉くを排除した。

「うっわ。呆れるわー」

人並み外れた技に、さしもの悪魔も舌を巻く。

「観念なさい悪魔。あなたの罪を、ここで浄化します」

剣を構えて、凜と言いつつ戦乙女。

「——その、神父」

リディアが、男の遺骸を指さす。

「自分が引き取った孤児に、虐待を加えていたんだよ？ そんな男と私、どっちの罪が大きいというのかな？」

訊く。

だが、フィオナの瞳に迷いはない。

「黙りなさい。悪魔の虚言など、聞く耳は持ちませんっ」

彼女は正義の執行者。

究極的に言えば、神父がなにで、どうだろうと、関係ないのだ。

「……つたく。これだから坊主は」

頭の固い連中ばかりだ——と、リディアは溜め息をついて。

手をかざす。そこに浮く魔法陣が、パチパチと帯電した。

フィオナが剣を、横合いに垂らす。





リディアはその爪で、すうつ、と。銀鎧の胸当てを垂直になぞる。すると鎧は左右に分かれたれて床の上へと落ちたのだ。

「なっ……!」

抵抗などなにもなく、鉄くずと化した鎧にフィオナは目を丸くする。

手甲も、足甲すらも切り裂かれ、鎧が全て取り払われた。

そして、さらに――。

「き、きやあああつ!!」

漏れ出た悲鳴は可愛らしかった。

鎧の下に着込んでいた綿服すら、左右袖口からはりと裂かれて床に落ちて、

まぶしいほどに白い肌が露わとなる。

陶器のような艶肌だ。

胸部の下着はつけていなかったから、少女にただ一枚残された衣服は、真っ白な、まっさらな、清純極まりない白垂のショーツだけだった。

「な、なにをするのですっ!!」

フィオナの顔が赤く染まる。

そんな清純な反応を悪魔娘は愉しげに見やり――ばちん、と指を鳴らす。

祭壇に並べられた数多の蠟燭が、ぽつ!と、一斉に灯った。

「っ、ああつ……」

茜色に染まる教会に、少女の裸身が仄暗く浮かび上がる。

鍛えられ、程よく肉のついた四肢、無駄な肉の一切ない瑞々しい手足は、草原を疾駆する雌鹿のそれだ。

腰もまた驚くほどに細く、だが尻房

に流れるラインには、わずかばかりの女の丸みが描かれて、成長途上の少女の可憐さを醸し出している。

そうしてその上に、まだまだ膨らみかけの、手の平で覆えば隠せてしまいうような膨みかけの乳房があった。

淡い桃色の乳頭に向けてツンと尖った魅惑の肉。思春期に、入ったばかりの特有の、どこか痛々しさすら感じさせる、可愛らしい尖り乳房であった。

神の御前で吊るされた少女の清らかな身体は蠟燭の明かりに照らされて、厳肅な教会内に被虐の美を映し出す。

まるで生け贄に選ばれた、憐れな子羊であるかのように。

「綺麗な身体。本当に、まだ穢れも知らないのねえ」

くすくすと、悪魔が嗤っている。

「な……なにをする気ですかっ……」

屈辱に美しい顔が柳眉を逆立てる。鎧を剥がれただけなのに、なんだか心の殻まで剥かれたような気がする。

「なにつて? くす。カミサマを信じているような、純真無垢なお嬢様に、人間の本性というものを教えてあげようと思つてね?」

幼い悪魔の浮かべる陰湿な笑みに、不気味なものを感じて、だがフィオナは信心を奮い立たせる。教会の執行者としての矜持が、この程度の逆境なにするものぞ、と叫んでいた。

――リディアのちつちやな手に、顎を掴まれる。そして。

「――んぐううつ!!」

フィオナの清らかな唇に、毒々しい悪魔の唇が重なったのだ。

（あ、悪魔に、口づけを……!）

湧き上がる嫌悪に、身を振る。

狒々爺にキスをされても、これほどにおぞましいことはないだろう、唾棄すべき悪魔の唇が――。

（私、はじめて、なの……につ）

ファーストキスを奪い去った。

恥辱と悲哀に瞳を閉じる憐れな少女。その口腔へ、リディアの口からなにかがドロリと流し込まれた。

「んっ!! んぐううつ!!」

（なっ……なんだ、これっ……!）

液体とも気体ともつかない、不気味な何か。得体の知れない何かを飲まされて、襲いくる不安感と焦燥に、稚魚の如き肢体をうねらせる。

「――っ! んっ! んっ――!」

「んっ……ちゅ。んふふ。はじめてのちゅう?」

ぶは、と唇を離して、リディアは悪戯げに嗤った。二人の間に涎の橋が、弧を描いて繋がっていた。

「今のは。私に、なにを……」

「ふふ。私の魔力。すこおしね」

悪魔は悪戯げにウインクする。異変は、迅速に現れた。

――身体が熱い。

「あっ……はっ……」

毛穴が開き、汗が吹き出す。

脈打つ心臓が、勢いを増していく。――な……なんですか、これっ……」

頭の中がボウツとして、思考がぼや

ける。健康的な美肌に朱が昇り、汗のぬめりが蠟燭の明かりを照り返す。鎖に繋がれた少女の裸身が、艶めかしい輝きを放ち始めた。

「くすくす。とつても、綺麗」

それに目を細めてリディアが嗤う。「悪魔……めっ! 私の身体になにをしたのですっ……!」

「くすくす。知つてる? 私たちの魔力は、人の負の面を増幅させるの。怒り、憎しみ、――欲望。そういうの。未通女のあなたの身体を、少しだけ正直にしてあげたのよ」

身体を、正直に。それは、この下腹の熱い疼きが、そうだというのか。

「はっ……あ、ああつ……」

喉から漏れる吐息が、器官を焼くほどに、熱い。凜とした瞳に滲む潤みは、青い網膜を蠱惑的に濡らしていく。

「へえ? 反応いいじゃない」

意外そうに言うリディアの目前で、戦乙女の身体がゆるゆると悶え始めた。細腰を震わせ、膝小僧を摺り合わせる。かしやかしやと、擦り合う鎖は悲哀の音色を奏で、清純少女の淫蕩な踊りを背德的に彩るのだ。

ぶくうと、乳先で小生意気な突起が尖りを増していた。

「な、んでっ……こんなにいつ」

疼く。おヘソの下が。股間が。毎月、穢れを垂れ流す肉溝が。

「くすくす。ねえ? どんな感じ?」

――い顔が嗜虐に満ちて、問う。

「う……ううう……」

恥ずかしそうに、真つ赤な顔を反らしてフィオナは呻く。

「ふんだ。答えてくれないのなら、見ーちやあつ」

「きやああああああつ!」

と。両足首を拘束していた鎖が、ひとりで左右に開いた。股間が、一緒に引かれ、広げられてしまう。

はしたない大股開きを強要されたフィオナの、その真下に、リディアがちょこんとしゃがみ込んでいた。

「そ、そんなところ、見ないでください」

湧き上がる羞恥に全身が熱くなる。だって、自覚しているのだ。

少女の精神性を表すような白い布地のその股間部分が、はしたない液体でじゅんと濡れてしまっているのを。

「うわあ。お姉ちゃん、もう濡れてる反応すぎじゃない?」

「い、言わないで……」

甘蜜を滲ませる性の秘裂を、薄布越しにまじまじと眺めてくる悪魔に、危機感がこみ上げてくる。

ああ、知られてしまう——と。

お腹の奥を炙る黒い淫火。鼓動を増す身体 of 熱い反応を、フィオナはよく知っているということを。

「くすくす。なあに、なんにも知りません、なんて顔して」

にたりと——リディアが嗤った。

「お姉ちゃん、ひとりでしたことあるんだ。オナニーを」

「知りませんっ……そんなこと、知り

ませんっ!」

三つ編みを振り回し必死で否定する。顔を赤く、甲高い声でしゃくり上げるような返答は、だが、知っていますと態度で答えているようなものだ。

股間にジンジンと響く疼きは、一層の力強さを増して、少女の性感を責め立てる。

ああ——触りたい。

いつものように。

(考えるな……考えてはいけませんっ! そんな、罪深いっ……!)

いつばい、触って、こしゅこしゅ擦って、気持ちよくなりたいたい。

媚尻が悩ましげにうにうに蠢く。少女の股間にびったりと張りつく純白のパンティが、身じろぎに合わせてぐいぐいと食い込んで、タテスジの形をはつきりと見せつけている。

「ふふ。これも可愛いわあ」

リディアの爪先が無垢なワレメを引っ掻いた。それだけでフィオナは「ひああつ」と、鈴の転がるような悲鳴を漏らしてしまう。

カリカリ、カリッ。

「くっ、ふうっ! くひいっ!」

硬い爪先が無垢な肉溝を掻き上げる。背骨へと波及する甘い痺れに、下半身が引きつった。

そうして悪魔の爪が下着の、股ぐら部分を引き裂く。

「きやああつ……!」

——露わとなる、戦乙女の秘部は、赤らむ大陰唇にわずかに開けた小陰唇

が、まるで傷口のように見える、痛々しいほど可憐な肉裂であった。

まるで股間という水瓶にわずかな傷をつけたように、その裂傷からは甘水が滲み出している。

かぐわしい処女の香りが、周囲に満ちていく。それを吸い込んで、

「ふふ。悪魔の私に、この匂いはキクわあ……」

リディアはうつとりと瞳を細めた。

「い、いやっ……かぐなっ」

恥ずべき体液を垂れ流す秘孔をかがれて、清純乙女は恥ずかしげに身をよじる。だがリディアはそんなところまで手指を伸ばして——。

「うん、綺麗なピンク色」

肉裂を左右に割り開いたのである。ぬちい……と、粘ついた音。

内側は綺麗な桃色だ。小さく開いた穴は、リディアに見られて恥ずかしいと、蜜の涙を流している。

「うわあ。奥からどどんオツユが出てくる。なあんだお姉ちゃん、実は凄いいヘンタイなんじゃない?」

「ち、違いますっ! あなたがさつき、妙なものを吞ませたせいだ」

必死で、否定する。だが、火照る身体、妖しく輝く濡れた瞳と淫らな汁を滲ませる秘孔。発情を抑えきれないフィオナの肉體は、彼女の意に反してその熱を増していく。

「ふふ。エッチなことを知らない身体が、こうも反応すると思うの?」

悪魔の囁きは、耳の奥から脳まで滑り込んでくるようだ。

「してるんでしょ、オナニー。正直になきなさいよ」

「そんなことしません! 黙りなさい、悪魔めっ!」

叫ぶ。だが。

——ああそうだ。私は知っている。

寝所で、枕を股間に挟んで腰を揺すって、背骨を蕩かすような快美を食っていた。

指でこすったり。

剣の鞘でぐりぐりしたり。

一人で味わう快感を、背徳感と一緒に味わい続けた。こんなことをしてはいけないと、そう思うほどに、快感はいや増したのだ。

「ほおら。こなんか、こんなにピンピンじゃない」

と、リディアの長い爪が、秘裂の頂点で固く尖った肉マメを弄くる。

「っつ! くひいっ!」

瞬間、背骨を突き抜ける衝撃に、乙女の背中が反り上がる。

お下げがぐんつと跳ね上がった。

怯えて包皮にくるまれ隠れるクリトリスは、先端だけがちょこんと飛び出して、その敏感神経の固まりに悪魔の爪は刺激的すぎた。

「くすくす。いーい反応っ!」

ツンツン。くりくり。

戦乙女の股間に設置された快感スイッチを、悪戯っ子が責め立てる。

「やつ、やめへっ! ひくひっ!」

はひいっ!」



そのたびに頭の中がスパークして、喉を晒して身悶えた。首を振って汗を散らす。全身が淡い蔷薇色に染まり、天に繋がる鎖を揺さぶり淫らに躍る。教会の中に乙女の、甘酸っぱい体臭が広がっていく。

「クリトリスで、こんなに感じているじゃない。オナニーでもして開発しないと、気持ちよさなんて感じるコト、できないんだよ！」

「知りません……知りませんっ」

青い瞳を熱っぽく潤ませながら、少女は悪魔を睨みつける。その健康的な内股に、ぬるりと垂れる淫水は、足首を濡らして床まで染みこんでいた。

「くす。きつかけは私の魔力でも、発情してるのはあなた自身の情欲」

と。リディアの赤い唇から、ぬらりと長い舌が這い出して、フィオナの未熟な胸肉を舐め上げた。ぞわぞわとした甘悦が、胸の中に広がっていく。

「んっ……くはあっ……！」

ほう、と漏れ出す吐息は熱い。

「ぜんぶ、お姉ちゃん自身の淫らさくすくす。とんだヘンタイだね。教会で、悪魔の目の前で、こんなに感じてるだなんて——」

「違うっ、違うっ！ 愚弄しないでっ……！」

耳から脳にまで這い寄る言の葉を必死で否定する。

膝がふるふると震えていた。こめかみが脈動して、熱い。

下腹に疼く、もどかしさ——どこか

にこれを擦りつけない。ぐりぐりと押しつけて、この痒みに似たじれったさを揉みほぐしたい。

「くす。くすくすくす——」

悪魔の嘲笑は、少女のそんな反応を見透かしているようだった。

リディアが立ち上がる。そうして彼女は、スカートの両端を掴み、ついと持ち上げた。

「ほら、お姉ちゃん。これ、どお？」

■貌に似合わない、黒色の下着が露わになる。未成熟な肢体にそぐわない大人びたショーツは、だが少女の雰囲気アンバランスな蠢惑を醸し出す。

——そして。

「ひっ……ひいっ！」

その内側から、もぞりと鎌首をもたげたそのイキモノに——フィオナの喉から恐怖が迸った。

蛇。

それはまさしく蛇であった。

比喩でなく——リディアのショーツを捲り降ろして、一匹の青黒い蛇がそこに顕現していた。

大人の腕ほど長さのある蛇だ。

不気味な鱗がびっしりと生えた、野太い蛇だ。

「あなたたちの教えでは、蛇は邪悪の象徴だっけ？ だからこんなの作ってみました。あははっ」

そんなものを生やしなが、リディアは無邪気に嗤う。

「そ……それを、どうするのですっ」  
震える声で、半ば返答を予期しながら、

ら、訊く。

「もちろん。コレを、お姉ちゃんの処女マ——コにずぶつて突き刺して、お腹の奥までぐちゃぐちゃにするの」

「ひ——」

その行為を想像し、乙女は恐怖で身を震わせた。

性の営みとは、神聖なものはずだった。柔らかなベッドの上で、愛した人とのみ行う満たされたものでなければいけないのだ。

「やつ……やめさないっ！ そんなこと、そんな、そんな罪深い……っ」

教会の中で。それも、蛇を相手の姦淫などと、背徳の極みだ。

「きやあっ」

ぴたりと、不気味な蛇の頭が、純真な割れ目に押し当てられた。

肉蛇は心まで冷やすように冷たい。

「くすくす、お姉ちゃん？ じゃあ今から、お姉ちゃんのお——んこ、この蛇でずぶうつてするからね？」

「い……いやああっ！」

ふると、銀色のお下げを振り回して嫌悪を露わにする少女は、気丈すらも打ち捨てていた。

あんなものが這入るわけがない。引き裂かれる、壊される——！

凜としていた戦乙女の、怯えた様子が愉しいと、リディアは腰を揺らして蛇頭を擦りつける。

「やめなさい……そんな、そんなこわいの入れないでっ」

フィオナは瞳に涙を滲ませて、忌む

べき悪魔に懇願してしまふ。

「だあめ。だつてお姉ちゃん、私を殺しに来たんだよ？ じゃあこれくらい……ねえ？ それに」

柔い肉裂を掻き回す蛇頭は、ぬめる涎で濡れそぼっていた。

「こおんなに濡れてるんだから、だいいょーぶ」

「あ、あああ……！」

どうして。

嫌で嫌で仕方ないのに——。

お臍の奥が、熱い。こみ上げてくる情念に、喉が鳴る。

「じゃあ、挿入れるね。あなたたちが忌み嫌う蛇で、処女膜を破いてあげる」

嗤うリディアの面貌が、童のあどけなさを脱ぎ捨てて嗜虐に満ちた鬼面へと入れ替わる。彼女の身体が、ゆつくりと浮き上がって。

めり……めりめり……みりいっ！

「やつ……やめ、やめっ、ひう、ひい、い——っっ！」

清純乙女の処女道へ、グロテスクな蛇が沈み込んでいく。

股関節を割り広げる圧迫感にしながら、かな両足が打ち震える。全身がたちまち朱色に染まって、苦悶の汗を吹き出した。

「あつ……かっ……」

身体を二つに断ち割られているかのような拡張感に襲われて、瞳を見開き呻き声を漏らす。スレンダーボディは襲いくる苦悶に耐えようと硬く引き締まり、尖りきった乳頭が荒く吐息に揺

れ動く。

けれどなにより心を痛めつけるのは、教えにおいて邪悪とされた蛇を呑み込んでいる、絶望と背徳だった。

「いやあ、いやああ……はいってくるう、蛇が、蛇が、私の中にはいつてくるううう……くひい、あうあああ……」

見下ろせば、リディアから伸びる青黒い胴体がフィオナの股間に消えている。赤みを増した小陰唇は蛇の外徑そのままに広がって、内側にずぶずぶと巻き込まれていく。

男の手が触れたことすらない、清純な処女肉にグロテスクな蛇が触れているということに、吐き気すら覚えて全身にぞわぞわと鳥肌が立った。

開かれていく花弁。そして。

みちい……びりいっ！

「あううっ！ 蛇に、蛇に……破られた……私の処女が……」

身体の内奥で何かが破れる音を聞いたもう二度と取り戻せない純潔。破瓜の痛みに、細腰が震える。

「あ、ああ、いやああああ……」

穢された。

神の子である私が、悪魔に、蛇に犯された。内股に、つうと流れる赤い滴は、まるで涙のようだった。

「お姉ちゃんのアソコから赤いのが出てきた。とってもキレイ……」

戦乙女の処女膜を容赦なく破り捨てておいて、悪魔っ娘は嬉しそうだ。フィオナの腰骨に手を添えて、その内部

へさらに蛇肉を押し込んでいく。

ぬぶるうう……ぬぐちゅっ！

「はぎっ！ まだ、這入って……！」

ずぶずぶと潜り込んでくる蛇の攻勢に、哀しむ暇など与えられない。狹隘な孔は蛇頭に引き裂かれ、拡張され清らかであつた粘膜に鱗の感触をなすりつけていく。

「あ、ああ……クフッ！」

引き締まった美脚が苦悶に震え、足指がぐうつと丸まった。

そして、ごつんと、子宮の口に蛇の口がキスをするのだ。

「くひい……」

鎖を打ち鳴らし、少女の美身が反り上る。内臓そのものを抉られたような衝撃に、頭の中が真っ白になる。

「はへえ……なんですか、これは……」

「お、く、こんな……」

知らず舌肉を垂らしていた。

眉尻がだらしなく溶けている。

とぶとぶと、赤みの混じった蜜汁が溢れて、嗜虐の蛇肉を濡らしていく。

「お姉ちゃん、イヤらしい。初めてなのに、ちゃんと感じていないじゃない」

「か、感じ……!! そんな、馬鹿なコト、あるわけないっ……」

「だめ。私の目は誤魔化されないから。だつて……」

と。リディアは腰を突き上げる。

「あぐあ……!! ふかいっ、おくっ、ずぶうっ、ひいっ……」

凜とした美貌が快感に歪む。

「蛇チ……ポ、こんなにキュウキュウ締

めつけてくるじゃない」

悪魔娘の嘲笑は真実。粘膜が、肉蛇に巻きつき、締めつけて、その感触を味わっている。贅肉を奥向きに抉られて、えもいわれぬ衝動が背中を這い上がる。さらに、ずにゆ、ずにゆりと掻き回されれば――。

「やへっ、やへえっ！ しよこっ、ぐちやぐちやってえっ……！」

身体中に熱い昂りを擦りつけられて、銀色に輝く髪を振り乱し、イヤイヤをするように身をよじってしまう。

「蛇に、へびい、なんか……」

吊された雌鹿の身体がよじれ悶える。剥き出しの脇下から、むわあつと、香る汗のニオイは脂性のそれだ。

内臓の奥が熱い。細い足にトロトロ溢れる花蜜はとめどなく、熱い息を吐き捨てる、早熟少女の顔は甘くところけきつていた。

「初めてでこんなに感じるなんて、いやらしい」

「そんな……あつ、ひいっ……！」

蛇の鱗が粘膜を擦る、その感触が脳を掻き回す。ごりいごりいと抉られて、狭苦しい道が広げられていく。

痛みはすでに掻き消えて、成長途上の身体に湧き上がるのは、信心すら塗るりつぷすような甘い悦楽。

「ああ……お、お許しをつ、神よ……」

「ふあああ……っ！」

湧き上がる罪悪感に懺悔を吐き出すうとしても、悪魔はそれをさせまいと

腰を突き上げてくる。恥ずべき肉欲に理性すら溶かされて、聖女は尻孔をひくつかせる。

「これは、罰だ。自慰などで、悦楽を貪っていた罰なんだ。」

「違うよ。これがニンゲンの本性。悪魔と変わりなんてない」

「そんなこと……あり、ま、せん……。そんな、そんな……」

こんな、獣のように肉欲を貪るのが人の本性なんて――。

「だつて、お姉ちゃん今、邪悪な蛇に犯されてるんだよ？ それなのに」

それなのに、瑞々しい身体は脂汗にじゅくじゅくと濡れて艶めかしく匂い立つ。碧眼は潤み、眉根は垂れ落ちて、そこに清冽ですらあつた戦乙女の面影はもはやない。

「だつてこんな蛇、へびいっ！」

桃色の唇から涎が滴り落ちる。小尻をイヤらしくうねらせる細腰は、フィオナの意に反して勝手に動き、膣壁を蠢かせ蛇肉を噛み締める。

じゅぶじゅぶと、リディアが腰を動かし子宮を抉ると、

「っひい……き、もひい……」

おくのほう、ぞくぞくしますうっ！」

脳を灼くほどの甘美に、愛らしい嬌声を放ってしまうのだ。

自分でも聞いたことのない雌の声。

（なんて、浅ましい、私……）

ぐちゅにちゅ！ ぐちゅ……」

「あつ……ひやあんっ！ きもひいの……」

「……こんなの、はじめてですう……」

すべすべの肢体は汗まみれ。

何か、途方もないものが溢れてくる。それに流されては、理性もなにも消えてしまうような、何かが。だが、粘膜を削られ性器を広げられて、女の快楽を叩き込まれるフィオナに、絶頂へと突き上げる情動を留める術はない。

「あうーっ！ うろこ、うろこおっ！ にゃか削ってっ！ んぐうっ！ おおきいのおっ！ お■んこ蛇のカタチなりゅう！」

ああ。

邪悪だと教えられていた蛇が、こんなに気持ちよくしてくれるなんて。

「ほらほら、お姉ちゃんっ！ もう、イッチャおっ！」

「くひいっ！ しよ、しよこっ……！ ぐりぐりっ、はひいっ！」

リディアが激しく腰を突き上げる。命を生み出す最奥までを、おぞましい蛇口が挟り上げて。

未成熟な子宮がぐちぐちぐち潰されまくった。

「ひい！ イクッ！ あああっ！ んぐう、あくま、なんかにいっ！」

キョんキョんと膣肉が高鳴って、こみ上げる絶頂に鎖を打ち鳴らす。

そして総身を貫く背徳の悦に、フィオナの身体が反り上がった。

「いっ、く、ううっ！ ヘビに、へびにあしよこ、ぐちやぐちやにされてっ……！ あ、あうあ、ああ——っ、

イグウ——っ！

びくびくっ、びくびくっ！

全身が小刻みな痙攣を繰り返す。

甲高い声を進らせて、裸身のあちこちが引きつり震える。半開きの口から涎を垂らして愛貌が甘く歪む。

神の御前に吊るされた少女は、蛇に純潔を捧げたあげく、背徳のエクスタシーに打ちのめされてしまうのだった。

「あ、ああ……あああ……」

信仰心すら穢されて、力なく鎖にぶら下がったまま、フィオナは官能の余韻に溺れていた。

「くすくす。他愛ないなあ」

嘲笑い、蛇を引き抜こうとするリディア。——その瞳が見開かれた。

「っ!? な、なにっ、これっ……!?」

悪魔の顔が驚愕に彩られる。

フィオナの下腹に煌々と、小さな魔法陣が浮かび上がっていた。

「呪術っ！ 魔力が吸われっ……！」

溶けゆく心地の中——なにが起こっているのか、フィオナには理解できない。ただ身体の中に、途方もなく真つ黒な力が流れ込んでくるのを感じた。

人としての理性、理知、そんなものを容易く塗りつぶす、悪心とともに。

魔力が——奪われていく。

フィオナの体内には、魔術に係わるものが触れるとその魔力を奪い取る呪いがかけられていたのだ。強力な呪いに、リディアの力は根こそぎ吸い取られてしまった。

魔術で編んだ鎖も解けて、フィオナ

の身体が地に落ちる。

「くっ……こん、なっ……」

身体から力が抜けて、腰を落とす。目の前には寝転がるフィオナ。その唇からくつくつと、呻くような笑みが漏れてきた。

「あは……あはは。そういうこと……」

泣いているような、怒っているような——そんな、笑み。

「……私は、捨て石だったのですね」

「ふん。憐れなものね」

フィオナは、自分に呪術をかけられていたことを知らなかったのだろう。つまり、教会は、リディアがこの正義感に溢れた戦士を犯すことがあれば、魔力を奪い無力化できると目論んでいたのだ。

そのようになる確証はない。だがそうならば都合がいいというだけだ。

ふらりと、フィオナが立ち上がる。「……憐れなのは、どちらでしょうかね。教会のいいように踊らされて」「あうっ！」

金髪を掴まれ引きずり上げられる。「この力……凄い。こんなの、これまでの執行者で勝てなかつたはず」

己の内に充溢する力に、フィオナは驚いている。人の身ではけして持ち得ない、強力な魔族の力だ。

「ああ。これなら簡単にあなたを滅ぼすことができる。ふ、ふふ——怖いですが、リディア？」

「ふん。別に。図に乗るなニンゲン」と、睨みつけてやる。

——その時であった。

「やめてっ！ お姉ちゃんを、殺さないでっ！」

悲痛な声が二人の間に割り入った。少年だ。リディアよりも、まだ幼い容貌である。その頭部には、リディアのそれと似た角が生えている。

「カ、カインっ……！ やめ、逃げなさいっ！」

少年の悪魔は、小さな身体を差し出してリディアを守ろうとしていた。

（ついてきて……たのか）

カイン——彼はリディアの弟だ。膝は震え、顔は怯えて、だが決してその場を動くまいとしている。

「リディアが、魂を集めていたのは、僕のためなんだっ」

「……どういことですか？」

こんな健気な少年を前にしては、聖職者として矛を収めざるをえないのだろう。告解を聞く神父のように、フィオナは耳を傾けている。

「悪魔が生きていくためには、人の魂が必要だ。でも僕は力が弱くて、人の魂を吸えない。だからリディアは……」

思いがけない弟の告白に、フィオナは目を伏せた。リディアは、力の弱い魔族少年にも、人の生命力を分けていたというのだ。

「そうだったのですか」

物憂げに、うなずく。

「生きていくためには、仕方のないことだったのですね」

と——聖職者は優しくに微笑んだ。





その顔を見て、カインもほっとしたように肩の力を抜く。

「でもね。ふ、ふ。そんなこと——知ったことではないのですよ」

と——フィオナの指が、カインを指した。その唇が何かを紡ぐ。

「あつ……うあああつ！」

「カッ……カインっ！」

少年の身体がぐじり、と崩れた。

四肢が不気味に形を変え、頭蓋が歪んでいく。全身に真っ黒な体毛が生え揃い、四つ足を床につく。

その姿は、一匹の犬畜生であった。

「ああ、そんな……」

「ふふふ……ああ、あははっ！」

フィオナが、嗤う。

——魔力とは、負の力だ。

魔族にのみ備わった、闇側の力である。ただの人間がそれに触ればどうなるのか。清冽であった聖戦士が浮かべる嗤笑と、歪んだ笑みが、その答えを物語っていた。

「……カインっ……」

獣化の呪い。

長い年月を共に過ごした弟の、無惨な有様が力が抜ける。愛らしかった目は知性のない獣のそれで、リディアを見やり唸り声を上げるのだ。

「きさ、まあっ……！」

こみ上げるどす黒い憎悪。

暴力衝動が身体を突き動かそうとして——全身が、凝固した。

（……身体を、拘束されたっ……）

もう、魔力を使いこなしている。

「ふふっ……くふふっ！ 無様、ぶざまですわねえっ！ リディア！」

這い蹲る小生意気な悪魔娘を嘲笑う、フィオナの顔は神の使いにほど遠い、爛熟した憎悪に満ちていた。

「こちらに來なさい、犬」

フィオナの手招きに従って、カインが近づく。

「ねえ、リディア？ この子を、元に戻して欲しいですか？」

「……どうしたら、いいのっ……」

屈辱に可憐な唇を震わせながら、リディアは問う。フィオナの目は、その代わりに何かをしるかと告げていた。

彼女の手の平が、リディアの腹部に触れる。すると——

「ふええっ!?」

こみ上げる逼迫感。

下腹で膨れる熱波。

尿意が、押し寄せてきたのだ。

（お、おしっこ……!? なんぞっ）

「彼がイクまで、お漏らしを我慢できたら、元に戻してあげましょうか？」

フィオナが指を鳴らした。

「カイン。口を犯しなさい」

黒犬が、ワンと鳴いて。

「っあつ、きやああつ！」

リディアに襲いかかっていた。

仰向けに転がされたロリータの、その幼面に獣が下半身を押しつける。

「カイン、や、めっ……ひっ！」

小さな悲鳴が幼女の唇から漏れた。

黒犬の股間で、真っ赤に茹だった肉塊のような、グロテスクなペニスが隆

起していた。びくびくと脈打つそれは、人の生皮を剥いたように赤く、生々しくぬらついている。

先細りの槍のような凶器の肉塊。カインはそれをリディアの口腔へぐりぐりと押しつけてきた。

ハッ、ハッ！ と、荒い息は苦しげで、涎をだらだらと溢している。

「ングッ！ ムググッ！」

赤く幼い唇が毛細血管の塊みたいな肉塊で押し潰される。

どろどろと、先走りが先端から溢れ出している。あどけない面貌を穢すその粘液は、生臭い潮の匂いがした。

人並みの力も出せないリディアの細足がジタバタと、子どもがダダを捏ねるように、獣に潰され暴れていた。

（だめえ……漏れる、漏れるのおつ、カインっ……!）

漏らしたら、彼を元に戻せない。

「やめて、や、んぐううっ！」

「ごぶりっ！ と、犬のペニスが強引に口腔へ突っ込まれた。

小さく粒のそろった白い歯に我慢汁を塗らたくりながら、獣の塊がまだ固い蕾のような幼面へと埋没してゆく。

口中に広がる生暖かくぶよぶよとした感触。なによりも、鼻孔を貫く獣の臭気に吐き気がこみ上げる。

「ごぶううっ！ んぐぶっ！」

かあつと目を見開いて、幼女は喉を潰され呻きを漏らす。

だが黒犬の口唇は止まない。ぐりぐりと尻を振りながら、慕っていた少女

の口腔へ浅ましい獣欲を押しつける。喉の奥に垂れ下がった肉突起が、ぐちゃりと潰されて、「うぐえっ」と蛙のような悲鳴を漏らす。

瞬間、尿意が破裂しかけた。

（くうううっ!）

必死で、半熟の下腹に力を籠めて、尿道を堰き止める。

危ないところであった。

（カインっ……カインっ……）

胸中で、弟の名前を呼び続ける。小生意気なツリ目に涙が浮かぶ。

必死で助けようとしているのに、犬ペニスは喉の奥まで届いて、肉壁をゴツゴツと容赦なく叩いてくる。

「んごおっ……ごほっ！ はひゅうっ……! あぐ、ぐふっ！」

そのたびに、幼尻をくねらせて、畜生からのイラマチオにちっちゃな身体は苦悶の吐息を漏らすのだ。

（い、犬の……いぬのチンポ……口のなか、叩いてるっ……）

脳みそまで染みこんでくるような、前立腺液のえぐみに頬が震える。

巨大なソーセージに頭の中をぐずぐずと掻き回されているみたいだ。

ハアアッ！ ハッ！ ハウッ！

ずばおっ！ ぐじゅっ！ ごずっ！

（だめえっ……おひっこでちやうっ……）

……カインを、戻せなくなるうっ!）

膀胱を襲う逼迫感は耐え難く、額にふつつと玉の汗が浮かんでくる。

喉チンコをずりずり肉洞でたなびかせられ、こみ上げる吐き気にえずく。

悪魔召喚——  
古来より  
魂とひきかえに  
願いをかなえる  
という魔術

多くの者が  
地獄に堕ちた  
魔術に今宵も  
また一人——

——強欲の王マモンと  
その使徒よ我が呼びかけに  
こたえたまえ

我が魂を糧として  
願いをかなえ  
たまえ——

契約の名の下に  
出でよ

フオオオオオ……

強欲の顕現者  
悪魔デルフィンウム！

魂と引換に悪魔っ娘に望むものは？

我が名を刻みし  
血の羊皮紙を  
持つ人の子よ

悪魔デルフィンウム  
強欲の王マモンにかり  
魂の契約を行おう！

ハアアアアア

SHIROTSUMEKUSA  
白結草

うっぎっぐは  
漫画 空木次葉  
COMIC

や……やった……  
成功だわ……ッ  
本物の……悪魔ッ



—さあ

あなたの魂を  
はかりにかけま  
しょう

穢れし魂の召喚者  
「アザミ」  
あなたののぞみは  
なんですか？

求める欲望と  
魂の対価が  
つりあった時  
契約は成立

—憎い女…  
憎い女がいるわ

—

あの女を壊したいわ

無理矢理犯して

孕ませたいわ…ッ

一度じゃない何度もよッ  
孕ませた子供の魂は  
全部貴方に献上するわ

だから…ッ

『どんな相手でも強制的に  
孕ませる力』が欲しいのよ  
その女が壊れるまででいいわッ

それはそれは  
立派な復讐  
ですね♡

ふっ…

今回は楽だわ  
それに受精した  
ばかりとはいえ  
魂は魂よ

一つ一つは小さいけど  
沢山刈りとれば  
それだけ私の物になる

孕ませるのも  
淫魔じゃなくても強制なら  
どうでもできるわ

欲にまみれた人間なんて  
みんな同じ！

これでまた汚れた  
魂ゲットね

契約は成立です

アザミは  
復讐したい相手が  
壊れるまで犯し孕ませ  
生まれた命を刈り取る事が  
できます

そしてその為に  
悪魔デルフィニウムの力を  
行使する事ができます

やった…わ  
ついに…ッ

人間は本当に  
バカね

777

さあ……ッ  
憎いあの女を  
犯す私の凶器……ッ

来るのよ!!

お兄様その悪魔を  
捕まえておいて

何…？  
この死に損ない？

ウウ……ッ

醜惡…ッ  
さすが  
流石悪魔の力で  
生えたモノだわ

な  
ツ

何をツ!?

前戯なんか  
してあげない…ッ





なッ

何のつもりだ――

何って――

「復讐」よ



悪魔デルフィニウム  
私達兄妹は以前に  
別の男が願いを叶えた時に  
犠牲になったのよ

貴方が  
死に損ないでと  
呼んだのは  
お兄様……  
私よりも早くに  
狂ってしまったわ

あの男は私達を  
滅茶苦茶にして  
勝手に死んで行った……  
貴方の名前の入った  
羊皮紙をのこしてね

そ……それじゃあ  
憎い女というのは……ッ

ぐああッ

貴方の事よッ

く……ッ  
まさかこんな事がッ

契約の力で  
抵抗できないッ

いいわッその顔ッ

悔しいでしょッ

これから  
もっと辱しめて  
あげるッ





あははッ  
尻尾がそんなに  
ピンカンなの!?



ふッ深イッッ

こッこんなッッ  
この私がッ  
人間の娘にッ

ホラッ  
気持ち良く  
なったでしょッ

悪魔が人間に  
イカされる事など  
な…い…ッッ

イッイクもんかッ  
悪魔のプライドがッ  
こんなのッッ





セクシー悪魔っ娘VSゴスロリ悪魔っ娘!  
互いに貶めあう二人の勝負の行方は!?

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

# 魔界ハンター レジーニナ&メリル

やまもと さ き  
小説 NOVEL 山本沙姫  
ときまる よし ひ さ  
挿絵 ILLUSTRATION 時丸佳久

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~7の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

「ホントにしつこいわねえっ！ お子ちゃまはとつとウチに帰って、お昼寝でもしてなさいっ!! メガ・フラッシャーッ!!」

「五月蠅いですわ！ そっちこそ、その辺でキノコ狩りでもしている方がお似合いでしてよっ!! レイバレットッ!!」

昼なお暗い密林の中、いきり立つ若い娘の金切り声と、雛鳥の囀りの如く喧しい少女の叫びが響く。

バシッ! バリバリバリッ!!  
ドガガガガガガッ!!

木立の群れを激しく揺らす雷鳴と、樹木の幹に突き刺さる、銃弾の鋭い連発音も。

人の世の裏に潜む、悪魔と呼ばれる人ならざる者達の住む世界。

その名は、魔界ステルザート。

広大な土地の片隅にある、暗黒の魔境と呼ばれるジラグの森で、激しい火花を散らす二人の悪魔がいた。

「おあいにくさま。アタシ、キノコは嫌いなよねえ。男の股間に生えている奴以外は」

余裕の笑みを浮かべてジョークを飛ばすのは、頬の輪郭が鋭角的に引き締まり、端正な顔立ちをした褐色の肌の美女。

軽くウェーブのかかった金髪の中から、人ならざる者の証である二本のツノが、天に向かって鋭く伸びている。

背中と腰には、やはり魔界の住民の証である蝙蝠に似た黒い翼と、鞭状の長い尻尾も。

(しかし、やつかいな所で出くわしたものだわ。どうすれば……)

黒革のボンデージ服を纏った肉付きのいい身体は、身の丈一七〇センチをやや越えたほど。

左右にドンと張り出したDカップオーバーのバストはできたてのプリンのように柔らかく、少し動くだけで大きく上下左右に波打つ。

挑発的に開いた着衣の胸元から、勢いよく飛び出してしまいうまくないに。

(ちよつと、魔力を使いすぎたわね。このままじゃ、こつちが不利だわ……)

一歩進むたびに、右へ左へと大きく揺れるヒップは、美しいカーブを描いた洋梨型。双曲の谷間にキリリとTバックが縦一文字に食い込み、プリプリと張りのある臀部がぼぼ丸出しになっている。

柔らかな表皮にはシミ一つなく、まるで剥きたてのゆで卵のよう。

(せめてもう少し、視界が広い所に出られれば……)

「アイスバレットッ!!」

すると突然、木々の向こうから短い叫び声が飛んできて耳に突き刺さる。

ドガガガガガッ!!

続けて響いてくる激しい銃声。今度はおびただしい数の氷のつぶてが、彼女を狙って襲ってきた。

「あぶないっ!」

銃撃を避けるべく、黒いブーツで引き締められたスラリと長い脚を踏み込んで、金髪の悪魔は木立の陰へと飛び込む。

ピタッ!

「くうっ! あいたー」

なんとか撃たれるのは避けられたものの、着地に失敗して固い地面に尻もちをつき、痛さのあまり顔が引き攣る。(やつてくれたわね。でも……こんなに深い森で正確にこつちを狙えるなんて。悔しいけど、やつぱり大した腕前だわ)

自分を狙う敵に素直に感心しつつ、策を練る美貌の悪魔娘は、魔界屈指の攻撃魔法の使い手。とりわけ電撃系を得意とする彼女の名は、レジーニャという。

普段は、数々の魔法を駆使して魔界の犯罪者を捕らえる事を生業とする凄腕の賞金稼ぎ。

だが、今戦っている相手は、ターゲットとなる賞金首ではない。

「まったく、あつちこつちに飛び回って。男をとつかえひつかえしている、いやらしい雌犬ならではのみつともない動きですこと……」

木々の隙間から、時々姿を現すのは、身の丈一五〇センチに届くかどうかという、小柄で華奢な少女。

クリクリとよく動く大きな赤い瞳と低めの鼻。それに、ふつくらと柔らかな頬のラインが実に可愛らしい。

さらに、四本の縦ロールに纏めた明るい紫色の髪が、激しい気性には不釣り合いな上品さを醸し出していた。

「だいたい、男のこか……がどうかと言って、下品すぎるのよ、あなたはっ!」

柔らかな頬を朱に染めつつ、小悪魔少女は怒鳴り声を上げる。

「まあムキになっちゃってえ。だ、か、ら、アンタはいつまでたつても大きくなれないのよ」

しかしレジーニャは怯みもせず、口元を手で隠してケラケラと笑いながら言い返す。

彼女の言う通り、真紅のゴスロイドレスに包まれた身体は凹凸が少なく、人間でいえば二次性徴を迎えたあたり。しかし未完成の肉体ゆえの、初々しい美しさが肌の露出を抑えたドレス越しにも滲み出ている。

さらに、頭の上にチョココンと載せた帽子に、くるりと巻いた小ぶりなツノが、可憐な悪魔少女の可愛らしさをより一層引き立たせていた。

背中の羽根も小さく弱そうで、レジーニャと比べれば大鷲と鳩ほどの違いはある。

「あんたも男と一発やってみれば、ちよつとは大きくなれるかもね。胸とか、お尻とか」

「だっ、黙りなさいっ! 女と、男のセ……その……営みって、ホントは清く正しいものですよわよっ!」  
妖艶な悪魔美女のセクハラ攻撃に、

なで肩を震わせ顔を真っ赤にして怒る  
気丈なゴスロリ少女は、手にした傘の  
突端を差し向ける。

「これでも食らいなさいっ！ パース  
トバレットッ！」

ブババババババ！

そして紅葉のように小さな手に力を  
込めると、先端から轟音と共に無数の  
火の玉が噴き出した。

「ちよつと！ 森を焼く気!? ウォー  
ターウォールッ！」

咄嗟にレジーニャは、開いた両手の  
平を前へ突き出す。

バシヤーツ！ バシユバシユバシユ  
……。

すると、地面から水が壁の如く湧き  
上がり、飛んできた火球を次々と打ち  
消した。

「くっ、やるわね。レジーニャ……」  
「ふん！ この程度、何て事ないわよ  
……」

内心では魔力がさらに減ってしまったの  
を気にしつつも、レジーニャはそ  
れを悟られないよう強気な態度で言い  
放つ。

様々な銃弾を駆使して、金髪の悪魔  
娘を苦しめる小さな狙撃手の名はメリ  
ル。

魔界でも屈指の名家の一人娘にして、  
魔界最強の魔弾銃——魔力を弾丸に変  
えて撃ち出すライフル——の名手と言  
われている。

そしてレジーニャとは、もはや原因  
すら忘れたいがみあいを、三〇〇年に

も渡り続けている犬猿の仲であった。

「それにしても、悪魔のくせに清く正  
しいなんて言っちゃってえ。笑わせる  
んじゃないわよ」

木陰に身を隠して移動しつつ、レジ  
ーニャは小さなライバルをからかう。

強敵である彼女を怒らせるのは、あ  
まり得策でないのはもちろん承知して  
いる。

それでも戦いになると、反応が面白  
すぎてついつい意地悪をしたくなって  
しまうのが、彼女の悪い癖であった。

「人間の男の子のオチンチンが、お股  
の中でコリコリする気持ちよさを知ら  
ないなんて、不幸な子ねえ」

「きーっ！ 異界の男に手を出しまく  
る性欲まみれのケダモノに、不幸呼ば  
わりされたくはありませんわっ！」

次々と飛んでくる言葉の銃弾に、メ  
リルは顔を真っ赤にして激昂する。

「血を吸って魔力を得る事の方が、上  
品で美しいって事に気付かない吸血悪  
魔こそ不幸の塊ですことよっ！」

いつでもどこでも、バツタリ出会お  
うものなら途端に罵声を浴びせながら  
戦い始める二人。

その争いに対する周囲の反応は、本  
気の殺しあいとも、単なるじゃれあい  
とも、見る者によつて様々。

だが、ここしばらくの間の衝突は過  
去に例がないほど激しい。

なぜならば、共に次の魔界の王の地  
位を狙っている者同士なのだから。  
ステルザートに住む悪魔は、二つの

種族に分けられる。

一つは異界の民、つまり人間との性  
交で魔力を得る吸血悪魔族・サキュバ  
ニアン。

数と魔力の強さで勝る事から、魔界  
の民の中では上級種族とされている。

その反面、大雑把な性格で頭の回転  
が遅い者が多いとも言われている。

もう一つは、人間の血液を魔力の源  
とする吸血悪魔・ヴァンテリオン。

吸血悪魔より魔力が弱く、数も少な  
いため一部の特権を持つ家系以外は下  
級の種族とされている。

だが、吸血悪魔と違い魔力の弱さを  
補うために、魔弾銃のように魔力を強  
化する道具を作る技術に長けていた。

「下級悪魔の分際で、魔界の王になろ  
うなんて生意気なのよっ！ ましてや  
お子ちゃまのくせにっ！」

「あなたみたいな気品のない女が王に  
なる方が、よほどありませんことよ  
っ！」

互いの魔力を得るための行為を、下  
品、野蠻と嫌悪しあう二つの悪魔種族  
は遠い昔、魔界を壊滅させかねないほ  
どの対立をたびたび引き起こしていた。

しかし今は、一〇〇〇年に一度両種  
族を束ねる王を、平和的かつ公正な手  
段で選ぶ掟が確立しており、一応の平  
静が保たれている。

その掟とは、王の証を世界中にばら  
撒き、決められた期限内に最も多く集  
めた者が次の王になる、というもの。

集めるべきアイテムは、魔宝と呼ば  
れる全部で七七個ある古代の秘宝。

ヴァンテリオンの技術をもってして  
も再現できない、強力な魔力を持つ調  
度品や道具の事である。

しかも、魔力を持たない異界の民に  
も、不思議な力を与える事ができると  
まで言われており、それがいつの時代  
にどのような形で作られたかは今もつ  
て解明されていない。

「せっかく在り処がわかったお宝、ア  
ンタなんかに渡すもんか！」

「それはこちらのセリフですわっ！」

互いにけん制しあいながら、ずらり  
立ち並ぶ木々を縫って走る悪魔達。

二人が目指すのは、森を抜けた先に  
ある岩山の洞窟。

彼女達は、そこに七七の魔宝の一つ  
「爆砕<sup>ばくさい</sup>の籠手<sup>かごて</sup>」があるとの情報を得て  
いた。

（あれはかなり使える物だから、絶対  
に渡せない……）

七割近くの魔宝の名前と効果を記憶  
しているレジーニャにとつて、これは  
見逃せない代物。

着けた者に岩をも砕く腕力を与える  
と言われるお宝を手に入れるのは、王  
位に近づくばかりか、今後の魔宝探査  
の大きな力になるだけに、何としても  
手に入れたい。

「いい加減にあきらめなさいっ！ 魔  
宝は渡しませんわよっ！ レイバレッ  
トッ！」

バシユンツ！ ドバドバドバツ！  
無論、そう思っているのは宿敵も同



じ事。傘型魔弾銃を振り回し、木々の間を駆け抜けながら、メリルは懸命に妨害し続ける。

「アンタこそ！ 何度も同じ事言わせるなっ！」

金切り声を上げると、レジーニヤは腰に下げた短刀を引き抜き、傍らに立つ大木から枝を数本切り落とす。

「いっけえーっ！ スレイブバット！」

バサバサバサバサッ！

掛け声と共に、ボンデー魔魔が手にした枝の束を振り下ろすと、木の葉が飛び散り、蝙蝠に姿を変えた。

「ギキキキキキイイ——」

鋭い牙を剥き出しにした使い魔の大群が、真紅のゴスロリ悪魔少女に襲いかかる。

「甘い！ そんな甘い攻撃にはこれよっ！ スウィーツパレットッ！」

しかし迫りくる凶暴なケダモノを恐れず、平然とした顔でメリルは傘を開き、クルクルと回して七色の光を扇状に放射する。

「ビギッ！ ビュルルル——」

すると、光を浴びた蝙蝠は苦しげな叫びを上げると共に、鉛玉に姿を変え、レジーニヤめがけて引き返してくる。

ガガガガッ！

「あたたたたっ！ なっ、何よこれはーっ！」

予想もできなかった反撃に対処できず、褐色の吸性悪魔は柔肌に固い鉛玉の嵐を浴びてしまう。

「ほーっ、ほっほっほっ。いかがかしら？ わたくしの甘いプレゼントは？」

対して、見事に逆襲に成功した小さな狙撃手は、両手を腰に当てて得意げに高笑い。そのふてぶてしい態度が、気丈な悪魔娘の気に障る。

（くそーっ、まずは早く森から抜け出さないと。このままじゃ埒がアカない……）

共に翼を背中に持つ身なのだから、余計な戦いなどしないで森の上を飛んでいく方がもちろん手っ取り早い。

しかし、そこは長年に渡りやりあつてきた者同士。遮るもののない空に上がった途端に、下から狙い撃ちされる手の内もわかつていた。

（それにしてもあの情報屋、よりによってメリルにまで情報売っていたとはね……）

権力よりも目先の現金に興味のある悪魔の中には、魔宝の在り処の情報を売ることで稼ぐ者もいる。

もちろん、ネタを誰に売るかは売側の勝手ではあるが、最も負けたくない相手にまで売られていたとあつてはどうにも気分が悪い。

（でも……他にお宝を狙っている奴の気配がないわ。アタシ達にしか情報売っていないって事？）

情報屋というものが強欲で、お宝情報報の二重三重売りをしているのは当たり前。これまでも、魔宝探しの最中に何人かのライバルとかちあい、出し

抜かれた事はよくあつた。

一人しか敵がないのはありがたくはあるものの、どうにも気になる。

「隙ありっ！ ムーンストラッシュパレットッ！」

シユバツシユバツシユバツ！

うっかりして足を止めてしまったレジーニヤの耳に、甲高い叫びと空気を切り裂く銃声が同時に飛び込んできた。三日月形の魔弾が、猛スピードで回転しながら小麦色の肌を晒す悪魔美女めがけて、四方八方から飛んでくる。

「当たるもんかっ！ アヴオイドストームッ！」

バサバサバサバサッ！

咄嗟に翼を力強く羽ばたかせて突風を起こすと、魔弾の刃はまるで枯葉のように燦然と、狙いを外れてはるか後方へ消えていく。

「ははは、残念で……」

ズバズバッ！ ガラガラガラ……。

余裕の高笑いを上げるレジーニヤの上に、大木が次々と折り重なるように倒れてくる。

「くわああっ！ なっ、何、何よーっ！」

「おあいにくさま。残念なのはどちらかしら？」

メリルの狙いは、大量の魔弾で木々を切り、ライバルを押し倒す事だった。

無論、相手が弾道を変える事を計算の上で、である。

「くうう……ぬ、抜かったわ……」

「あはははは、いい気味ですわねえ」

かろうじて動かせる肉体をよじり、なんとか這い出そうとする黒い翼の悪魔娘の頭上で、真紅の翼をパタパタと羽ばたかせて宙に浮く小悪魔が笑う。

右手で口元を上品に隠し、左手を細い腰に当ててふんぞり返った偉そうな態度が苦々しい。

「キノコ狩りより、地べたに這いつくばる方がもーっとふさわしいですわね。では、ごきげんよう」

高飛車な口調で言い放つと、ゴスロリ悪魔少女はスカートの裾を摘み、礼儀正しくお辞儀してから、目にも止まらぬ速さで空の彼方へ飛び去っていく。

「こっ、このーっ！ 覚えてらっしやいっ!!!」

大木の下敷きになったレジーニヤは、ひっくり返された亀のように手足をバタつかせて負け惜しみを叫ぶしかできなかった。

（……あいつにお宝を取られるのは癪だけど……魔力を使いすぎたし……今のままじゃ……）

王位をめぐる戦いは始まったばかりで、まだお宝を手していない彼女にとつては、たとえ一つでもライバルに取らせたくはない。

とは言うものの、いまさら追いかけてもすでに視界から消え去ったゴスロリ悪魔少女の先を越せそうにはなかった。

レジーニヤは——？

◆魔宝を求めて洞窟へ↓シーン2へ

◆力の補給に人間界へ↓シーン3へ

「……ええいつ！ あんな小生意気なチビ助に負けてたまるかあつ！ へル・バーストッ！」

グゴゴゴゴ！ ドガアッ！

褐色の美女の肉体がマグマの如く真つ赤に染まり、轟音と共にのし掛かった大木を木端微塵に粉碎する。

「はあつはあつ……おのれ、お宝を手に入れたら、ついでにこの借りも返してやるから覚悟なさいっ！」

魔宝探索か魔力の回復か。

迷いを振り払い、憎き宿敵への怒りを奮い立たせたレジーニャは、力を振り絞り、漆黒の翼を広げて飛び立った。バサバサバサバサ……。

魔宝が眠る洞窟を目指して。

(……いかに宝の隠し場所って雰囲気だけど、いったいどこに……)

ようやくたどり着いた洞窟は、光の欠片すら差し込まない真つ暗な岩壁のトンネル。

しかも複雑に入り組んでいて、まるで迷路のよう。

だが、暗闇でも目が利く美貌の悪魔は、迷う事なく歩いていく。

「だけどこんなややこしい所にお宝隠すなんて、今の魔界王は相当性悪だわ……」

視界は問題ないが、所々で地下水が染み出しているせいで、足元が滑りやすい。

「くっ、んっ、あつ！ あれは……」  
おぼつかない足取りで進んでいくうちに、彼女は岩壁の隙間に小さな木箱が入れられているのを見つけた。

急いで駆け寄り引き出してみると、蓋に星形の焼き印が押されている。

「これは、魔宝を収めた宝箱の証。はは、やったねっ！ あの小憎らしいチビつ子を出し抜いてやったわ」

満面の笑みを浮かべて洞窟中に響くほどの歓声を上げると、レジーニャは宝箱を開く。

ガチャッ！

「それではお宝拝け……んんっ!!」

ドバアッ！

ところが中を覗き込んだ瞬間、三センチほどの太さはあるような赤黒い軟体の群れが飛び出し、褐色の肉体に絡み付いてきた。

「なっ、何よっこれ……うっ！」

無数の触手に弄ばれ、混乱する悪魔娘の鼻を、嗅ぎ慣れた生臭いにおいがツンと突く。

「まさか、これって……」

それはまぎれもなく精液のにおい。我が身に迫る危機を察し、レジーニャは咄嗟にムチムチとした太ももを閉じる。

ギニュッ！ グリグリツツ……。

「こっ！ このおっ！ わけわかんない怪物の分際で、アタシとやろうなんて冗談じゃないわっ！」

だが、粘液を纏った怪物は触手をくねらせ、問答無用で彼女の黒いボンデ

ージ服を剥ぎ取りにかかる。  
メチュッ！ ズルリユルッ！  
腐臭を放つ体液を塗りつけられ、ぬめりを帯びたロケット型の巨乳が強引に引きずり出された。

キュッと尖った薄色の乳首が口の中へ飛び込みそうなほど、丸々とした巨乳が大きく波打つ。

「くっ、このおっ！ このこのこのおっ！」

柔肌に食い込む軟体を振りほどこうと、地面から背中が浮くまで身体を跳ね上げてみても、怪物はビクともしない。

それどころか、レジーニャのムッチリとした肉体をさらに貪ろうと、股間にまで魔の手を伸ばしてくる。  
ズルリユッ、ブチュブチュブチュブチュ……。

「くっ、そ、そこに触るなあつ！」

秘所を覆う黒革がずらされて、曝け出された柔らかい金髪を薄めに生やしたヴィーナスの丘を、ひとときわ熱い肉槍が小突く。

「うっ……」

敏感な秘肉に、熱い先走り汁のスタンプがペタペタと押されるたびに、背筋に寒気が走った。

(このままじゃ……やられちゃう……)

得体の知れない怪物に身を汚されるという、今までに受けた事のない恐怖に小麦色の肌がワサワサと鳥肌立っていく。

メチュッ！  
そうこうしているうちに、奇怪な軟体生物は、ついに突端を黄金色の芝の下に走る肉のクレヴァスに押し当ててきた。

熱湯でも注入されたかのような熱さが、ヴァギナから脳天へ一気に突き抜ける。

「ぐっ、そ……それ以上やったら、タダじゃおかしいわよっ！」

眉間に皺を寄せた険しい表情で睨み付け、レジーニャは洞窟の岩壁を揺らしそうなほどの怒鳴り声を上げる。  
しかし、それは最後にしてほんのささやかな抵抗に過ぎない。

グチィッ！

「かひいいっ！」

極太の触手がうねりながら肉花を貫き、グリグリと身を振りながら産道を突き進む。

「うぐっ、うあああつ、こっ、こんな、こんな……」

高熱を放つ軟体が、大きく開いたエラで腔壁をグリグリと擦りながら蠢く感觸が、脂汗の滲んだ下腹部の中を駆け回る。

グチャグチャグシグシグシグシグシグシグ……。

「ふ、深い……どっ、どこまで来るつもりよおっ！」

普段の扱い慣れたいたいけな少年の一物と違い、謎の触手怪物の長さは天井知らず。

子宮の中まで届くかと思うほど、胎

内の奥まで蹂躪してくる。

「魔力が使えれば、この程度のモンスターなんて簡単に倒せるのに。どうすれば……」

抗う事のできぬまま、肉体を弄ばれる悔しさにレジーニヤは唇をギョッと噛み締めた。

「ほほほ、無駄ですわ。その魔獣は女を孕ませるために生きている下等生物。一度捕まえたなら絶対に放しませんことよ」

おぞましい触手に絡まれ、悶え苦しむ黒衣の悪魔娘の耳に、甲高い笑い声が突き刺さる。

「えっ!」

慌てて目を向ければ、冷たい視線を送りつつ真紅のゴスロリ少女がやってきた。

手にした傘を、楽しげにくるくると回しながら。

「メッ! メリル!? さては……あんな図つたわねえっ!」

「その通り。情報屋を買収して、あなたを偽情報で釣ったのよ。この罠に引っかかるようにね」

鋭く睨むレジーニヤに聴する事なく、悠然とふんぞり返ってメリルは答える。「くっ、わざわざ戦い仕掛けて、自分もお宝狙ってるふりまでするなんて。まったく、ずる賢い小娘ねっ!」

罠にかかった恥ずかしさと焦りを悟られまいと、気丈な悪魔娘は強気な態度を崩さない。

「いかがでした? わたくしの名演技

は……」

彼女の胸の内を見透かすように、ゴスロリの小悪魔は冷めた目付きで言い返す。

スボボッ! ドバァッ!

「えっ!」

ところがその時、二匹目の魔獣が木箱から飛び出し、吸血悪魔少女のか細い身体に巻きついた。

「なっ、なんでわたくしにまで襲いかかってきますのっ!」

通常、魔獣をトラップや手下として使うには、使用者に危害が及ばないように調教したものが使われている。

そのため、仕掛けたメリルまで襲われるはずはない。

「くっ、このっ! ……んっ、なに? これは……」

予想外の襲撃に混乱するメリルを尻目に、なんとか魔獣から逃れようと身を振るレジーニヤは、湿った触手に貼り付いた紙切れを見つけた。

『ご利用頂きましてありがとうございます。ですが、今回お支払い頂きませんでした代金では、調教済みの魔獣は用意できませんので、未調教のまま入れさせて頂きました。そのため、設置者に襲いかかる可能性もありますのでお気を付け下さいませ。魔界ギルド』

貼り付いていたのは、ゴスロリ小悪魔が偽宝箱を作らせた工房の受領書にして、作らせた本人まで襲われた理由の回答書だった。

「ちよっ……メリルっ! あんた罠を

作る予算をケチったわけ!? ホントに

ろくでもない下級悪魔ねっ!」

自分を罠にかけたばかりか、その仕掛けがあまりにずさんだったのにますます怒り、レジーニヤは目の前で悶える宿敵を怒鳴りつける。

「うっ、五月蠅いですわっ! くふっ、こんなもの、わたくしの魔弾銃で……」

全身に塗りつけられる粘液の鱧<sup>エビ</sup>えたにおいにむせつつ、メリルは銃口を怪物の表皮に押し付ける。

ビシュッ! パキッ!

「しまった!」

だが身の危険を察してか、異形の触手が鞭のように飛んできて、自慢の銃を叩き落とした。

唯一の抗う術を失った悪魔少女の着衣の中へ、表皮をビクビクと脈打たせながら触手の束が潜り込む。

ベチャッ! ズルルルッ!

「うぐうっ! こっ、このわたくしの肌に触れるなんて、許しません事よっ!」

無数の軟体に蹂躪されてもおお、悪魔少女は高飛車な態度を崩さない。

だが、悪魔とはいえ中身はまだ男を知らない■い少女。内心では、神聖な秘所を醜悪な物体で貫かれる恐怖にパニック状態。

柔らかな頬がサツと青ざめ、こめかみがヒクヒクと痙攣を起こす。

バリィッ! ビリビリビリッ……。

「きゃっ! おっ、お父様から頂いたばかりのドレスが……」

か細い身体に纏わりつき、蠢く軟体が真紅のドレスを内側から引き裂いた。

鱧<sup>エビ</sup>えた悪臭を放つ粘液を塗りつけられた柔肌が曝け出され、恥辱と触手の熱さでみるみるうちに朱色に染まっていく。

「はははっ、いい気味ねえ。あんたもそのまま犯されちゃいなさいよっ!」

もはや逃れられない状況に、ヤケになったレジーニヤは嬉々として言い放つ。

ズルリッ!

「やつ! そこ……」

すると彼女の願いを聞き入れたかのように、触手魔獣はメリルのショーツをずらしはじめた。

紫色のアンダーヘアが微かに生える少女の丘に、脈打つ物体が迫る。

ビチュッ!

「あくうっ!」

未熟な秘肉のクレヴァースに、小さな水音を立てて醜悪な触手の突端が突き当てられると、熱さと痺れがヴァギナの中で弾けた。

ブズジュウッ! グリッグリッグリッ……。

「だっ、だめえっ! 初めては……お父様みたいな素敵な殿方と、決めていたのにいいつつっ!」

暗闇の迷宮に響き渡る乙女の願いも虚しく、未熟な肉蕾が極太のペニスで刺し貫かれた。

グチャグチャグチャ……。

「ひっ、そっ、そんな……かき回すの、



んぐつ、だめえっ！」

無理やり押し広げられ、処女の証を滴らせる小さな肉穴の中を、異形の男根が行き来する。

時には素早く、時にはゆつたりと緩急をつけて。

「やあああつ、くつ、たつ、助けて……助けて、お父様あつ！」

「いい気味ねっ！ 自業自得よ……くうっ！」

目の前で奇怪な化け物に犯されるライバルを嘲笑っていても、レジーニャも危機的状況なのは変わらない。

グチッ、グニッグリッグニユッグニヂュッ……

（残念だけど、アタシも、年貢の納め時かしらね……）

高熱の塊がついに子宮口を貫き、下腹部の奥底で激しく跳ね回る。

それは美しい悪魔娘が、醜いケダモノの子を孕むのが確実になったという事に他ならない。

（今まで、可愛い男の子ばかり相手にしてきたアタシが、初めて身ごもるのがこんな化け物の子だなんて……）

洞窟よりはるかに暗い闇の中へ、気丈な吸血悪魔の心は沈んでいく。

（……だけど、何よ、この、心地よさは……）

しかし徐々に抗う気力が衰えるにつれ、股間から胎内を駆け抜ける刺激が、柔肌を締め付ける痛みが、快楽へと変わっていく。

グイッ！ グニッグブッジュブッ

ジュッ……

「くうっ、あつ、あうっ……こんなの、今まで、なかった……ふううんっ！」

華奢な美少年の男根では受ける事なかった、肉体の奥底に湧き上がる炎が身も心も焼き尽くしていく。

「あつ、あんっ、わっ、わたくし……どうなつて、しまったの!? あつ、あんっ！」

すると突然、傍らでのたうち回るライバルの喘ぎ声が、しつとりとした艶を帯びてきた。

どうやら彼女も、未熟な肉蕾を解きほぐされ、女の悦びに目覚め始めたらしい。

クシユクシユ、ビジュッブシユッ！

汗と愛液の混じった粘液を散らす秘唇から、水気交じりの淫音を響かせながら、華奢な身体が跳ね回る。

（……皮肉なものね。お互いに下品だの野蛮だの言い合ってたのに、同じ化け物で感じちゃうなんて……）

ついさつきまで、魔力を出し合って戦っていた宿敵が、妙に親しく思えてきた。

「んっ、んっんっ……」

自然と身体が動き、芋虫のように地を這って、レジーニャはメルルに近づいていく。

「ふふふ、あんたも感じてるんでしょ。魔獣に犯されて、気持ちよくなつてきたんでしょ」

悶える悪魔少女の脇に寄り添い、美しき吸血悪魔は暖かみのある口調で語りかける。

りかける。

「え……そ、そう……ですわっ。なんで、こんな事されて、わたくし、気持ちいいのかわかりませんわあつ」

忌み嫌っていた吸血悪魔にもかかわらず、危機的状況にあつて優しくされたせいか、メルルは素直に胸の内を明かした。

大きな瞳を潤ませて。

「どうでもいいじゃない。もう争う必要ないんだから、一緒に、イきましょ。最後まで……」

虚ろな目をしてレジーニャが告げたその時、彼女の胎内でひととき強烈な脈動が走る。

ビグググッ！

「あうっ、い、いよいよ……出されるのねっ！ アタシの中に……だつ、だされるううっ！」

「レジーニャ……わっ、わたくしも感じますわあつ！」

ドビュルルル——ツツツ！

ドグンドグンドグンドグン……

「う、はああああ……」

「これが、受精というものの……」

同時に胎内をスペルマで満たされた悪魔達は、意識が遠のいていった。燃え尽きた蠟燭のように。

レジーニャとメルルが、触手の怪物に捕らわれてから二か月がすぎた。

絶え間なく子種を植え付けられ続けた彼女らは、すっかり醜悪な雄蕊の虜になっている。

おびただしい数の生きた男根に埋め尽くされた洞窟の中で、虚ろな目をして寄り添う二人は、まるで生きた苗床のよう。

腹を大きく膨らませてまなお、肉壺の中をかき回される喜びに打ち震えていた。

「あうんっ！ まっ、また……生まれのね……」

「そうしたら、もつともつと、いつぱい……シテもらえますわあ……」

胎内で我が子が蠢くのを感じ取り、肌もあらわな粘液まみれの悪魔娘達はうわごとのように咬く。

光届かぬ暗黒の迷路の奥底、そこにはもう、王位を狙う野心家はいない。ただ肉欲に溺れ、異形のモノを生み出す雌悪魔がいるだけ。

BAD END



「……チッ！ 残念だけど、今回のお宝はあんたに譲ってやるわ！」

吐き捨てるように呟くと、レジーニヤは折り重なる大木の山の下から、ズルズルと匍匐前進で這い出す。

「んんっ、くっ、はあっはあっ。やつと、出られた。さてと……」

そしてパタパタと身体を叩いて土埃を払い落とすと、右手を真上に高々と上げ、人差し指を立てて空中にグルリと円を描く。

シュボン！

するとシャンパンのコルク栓を飛ばすような破裂音と共に、空中に真つ黒な穴がポツカリと開いた。

異界へ通じる、魔法のトンネルである。

「この借りは、いつか返してやるからねっ、覚えときなさいっ！」

はるか彼方に消え去った宿敵に向かって憎まれ口を叩くと、レジーニヤは背中中の翼を羽ばたかせ、穴の中へ飛び込んだ。

（さて、お宝をあきらめてまで魔力を補給するんだから、やつぱり相手は、とびつかりの上物がいいわね）

予てから狙っていた獲物を求めて、飢えた吸血悪魔美女は猛スピードで次元を越えていく。

「こつちの世界は夜か。これは好都合ね……」

満天の星空を、レジーニヤは音を立てないように翼の羽ばたきを止めて滑空する。

何しろ、これから乗り込もうというのは警戒厳重な軍事国家「サージバル王国」の王城。

ヘタに羽音を立てたら、たちどころに見つかり弓兵の餌食にされかねない。

「……あれね、我が愛しの獲物……いや王子様のお住まいは……」

月明かりに照らされて輝く、漆喰で塗り固められた白き巨城が見えてきた。ここに住む王族一家の第二王子、リ

ユートが大層な美少年であると、吸血吸血を問わず美少年を好む悪魔の間で噂になっている。

「うふふふ、待っていてね。リユート様っ！」

これまで、数々のいたいけな少年をモノにしてきた美貌の悪魔は、満面の笑みを浮かべつつ城の屋上へ静かに降り立った。

（……見晴らしのいい最上階で豪華な調度品……間違いない、ここね）

過去にも何度か、王族の美少年の童貞を頂いてきた夜這いの達人は、すぐに王子の寝室を見つけた。

「くー……くー……」

星明りがわずかに届く程度の薄暗い部屋でも、夜目が利く悪魔には、問題ない。

部屋の主がベッドに潜り込んで微かに寝息を立てているの見える。

ただ、シーツを頭から被っているせいで、さすがに顔までは拝めない。

「うふふふ、可愛い寝息。いかにも美少年の王子様っ！ て感じね」

目尻を下げたニヤケ顔で呟くと、可愛い少年好きの悪魔美女は軽く舌舐めずりをする。

「たつぷり可愛がつて、いっぱい吸ってあ、げ、る……」

そして静かに傍らへ歩み寄り、ベッドの中へ潜り込む。

（さて……王子様のお身体は……）

身体を右向きに倒して寝込む王子の背後にピタリと寄り添い、手の平で軽く背中を撫でてみる。

暑い土地のせいかな、身には何も着けていないらしい。

（んふふふ、スベスベして柔らかい肌。背中にも気品があるわね……あ、あれ？）

しかし、柔肌を擦るにつれて、手の平に触れる感触に違和感を覚え始めてきた。

（小柄で華奢な可愛らしい男の子、って噂だったのに……アタシより背が高いじゃない!?）

それに、手先に吸い付くほど表皮は滑らかではあるが、所々やけにゴツゴツして筋肉質だ。

（……！ まさか……こいつは……）

「どうした？ もう触らないのかね？」

漠然とした不安に背筋が凍り、手が止まるレジーニヤの頭上から、野太い

男の声が響く。

「きやひいつ！ あっ、あんたまさかっ!?」

慌ててベッドから飛び出すが時すでに遅し。右手首を掴まれ、強引に引き寄せられてしまう。

「はっはっはっ、恥ずかしがる事はあるまい。では、顔を見せてもらおうか」

謎の大男は悪魔娘を右手でしっかりと捕らえたまま、ベッドを出る。

そして、左手で器用に火打石を叩いて、部屋のあちこちに立てられた燭台に火を灯す。

（アタシつたら……とんでもない間違いを……）

徐々に昼間と変わらぬ明るさに包まれていく室内。

だが、蝋燭が点く前に、レジーニヤの目は驚くべき者を捕らえている。

口まわりを固そうな髭でビッシリと覆われた、厳つい顔の中年男。

しかも大柄で筋肉質の身体には、腰布一枚すら着けられていない。

「さて、このゴディアス様の寵愛を受けようというのだから、それ相当の美人であろうな」

やがて燭台すべてに火を灯すと、筋肉男は左手でレジーニヤの顎を掴み、強引に自分の方へ顔を向かせる。

部屋の主は、サージバル王家第一王子。すなわち、狙っていたリユート王子の兄であった。

（やつぱり、こいつが違う意味で噂の王子……）



# アルシエル

淫蕩遊戯

いちのせ  
文字コラ 一之瀬ユキ  
みやしろうりゅう たろう  
挿絵 宮代龍太郎

魔王ちゃま、今日もまたきちゃったの。もうぶるぶる震えていっぱい。いっぱい興奮しちゃってまぢやね。あたしにそーんなに精子さんずいこつてもういたい。で、ちやがー。魔王ちゃまのバグーゼーんぶもろつちやいまちやけだいいんてぢやかー？ エへ、もう頭の中脳味噌の一筋一筋あみずみまでゼーん

ぶなバナバのお精子さんでいっぱいになっちゃってみたいでぢやね！  
じゃあ、今日は特別に足を開いて、アルシエルの舌をからみつくみたい。いっぱいいれろろー。こしてあげるから、魔王ちゃまはいつもみたいに、そこでハアハア豚みたいにあえぎながら大事な触手さんを超高速でシツシツして、いっぱいいいエッ子なお精子さんをアルシエルになーっぶりかけてネー！  
触手でosaわいはなしだよ。魔王ちゃまみたいなキモい変態野郎

にさわられたりしたらアルシエルがわいさうでいよ。うつつ、魔王ちゃまい子！あたし魔王ちゃまのシツシツ導めるのだーいすき！こつてもかっこよくて、ステキ！もっこもっこ変態の豚虫らしくはあはあはあ声出してふだれたらしながらいつもやってるみたい。自己完結で自分ごこ興奮させてびゅっびゅっちやあ☆



きやあきやあいつばいごちやう！ 魔王ちやまの膝ざん精子が体にいっぱいごころしちやう！☆ 超キモいけごつてもうれしいごちやう！ 魔王ちやまいっぱいがんばりましたね！ ぐ嬢美にちよつごだけ触手でさわわしいいごちやう！ うれしいごちやう！ 魔王ちやまみたいな膝ざん野郎にさわらせてあげる天使みたいにやさしい女の子はアルシエルだけごちやう！ 魔王ちやまは女神のあ

うにやさしいアルシエル様に感謝しなきやいけませんよ？ 次ももつごもつごハワーためて、キモいお精子さんたちたっぷりアルシエルにかけね。

もう魔王ちやまのハワーはアルシエルの半分もないって気づいてまぢやか？ 魔王ちやまがそこで膝ざんアハアハいつてる間にアルシエルはごんごん強くなってるんごちやう？ でも気づいても、やめられまぢやうね？ だって魔王ちやまはごんごんうもないわ

ソマゴちやもんね！。だから、いーつもキモい妄想で頭いっぱいごちやもんね！ だもアルシエルだけはそんな魔王ちやまが大好きだよ！ 抱き合ったり、キスしたり、おちんちんおまんこにいれてスツスツしたり、そういう普通の男の人がするやつなご一切できないのに、それでも愛してくれる優しい魔王ちやまが大好き！ これからもずっと、優しいままいてね☆



あーん、あまずっぱーい☆ アルシエル、ぼくちゃんたちのキモ精子大好き！ いつもいつもありがとね！ ぼくちゃんたちが必死にいてためたお金と経験値は、アルシエルがきちんと使ってあげるからね。一生にうやうやしくして精子を外に出し続けるんだよ。

女の子の中で出さうとかが考えちゃだめだからね。相手の女の子がわいぞうあきるぞじやう。お利口さんのぼくちゃんたちならわかるよね？ はい、じゃあまた、3ヶ月くらい命がけで必死にシミシミがんばって、またアルシエルに会いにきてね。

会えない間あたしもさみしいけど、ぼくちゃんたちが必死でエロい妄想でギンギンになりながら戦ってるころ想像して待ってるからね。次はご褒美にいちばーん経験値ためた人には、アルシエルのあまーいお足をくわさせてあげちゃうかもいいよね？ あまー

いお足の裏りと頭の中裏つ目にならないながら、アルシエルの唾でべっぴんになったおんちをシミシミするの。夢みたいぞじやう。ぼくちゃんたちみたいなきまぐれには最高の幸せだよ！ がんばってね！

end



# スレイブ デビルプリンセス

かりのけい  
文字コラ 狩野景  
みやしろりゅう たろう  
挿絵 宮代龍太郎

「お前たち、魔界のプリンセス・アルシエルにこんなことをして、ただで済まはざらないって事くらい……」  
「もちろん、ただで済ませるつもりなどございませんよ、ぐふふ」  
「こいつら……、イヤらしい目で、わたくしを……。それにしても、こんな窓も無い……。腐った匂いがする薄汚い部屋に、わたくしのような高貴な者を閉じ込めるなんて。気分……変に、なっち

やっじゃないのよお……もぉ……。

「おや？ ずいぶん乳首が勃つてきましたね？」

「それに、股間も湿つてきたような？」

「お前たちが気持ち悪い目で見るから、鳥肌が立っただけよっ」

「ほお、ずいぶんと変わった鳥肌ですなあ。その無駄にデカイおっぱいの先っぽに、やけに大きいのが二つだけとは」

「股ぐらのワレメスジから、一粒はみ出してるのも鳥肌ですか？」

「ああ、もつそんなやつってるんだ……。わたくしの……。」

「わ、わたくしに、指一本でも触れてごらんさい。絶対に容赦しないから……っ!!」

「俺達からは指二本触れないよ。姫様から求めてくるまでね」

「それにしても、噂は本当だったようだ。気高き魔界のプリンセス・アルシエル様がどうしようも無いドMの淫乱女だったのは」

「さつきから言うことは逆に、犯されたくてたまんなさうな、へ

らへらと媚びた笑顔晒してやがる！」

「こ、これは、愚劣なお前たちを嘲笑っているのよ!!」

自分では睨みつけていたつもりなのに、そんな表情になっちゃってた。それにしても何でこいつら、わたくしの秘密を……？

ああ、どうしようっ、こんなことバラされたらうって思っただけで、子宮がますますキュンキュン切なく痺まっちゃうじゃないのっ！

ひっつ、あ、ああああ……。あそこから、また熱い蜜……溢れ出ちゃったあ……。



どゅゅっ、びゅるびゅるびゅる、どゅるどゅる……

「ぶっ……!! はっ……!! あ、あぁあ……!!」

またこないっぱい、白濁う、一斉にふちまけてきたあ……。

太い触手、スリユスリユって肌這い回ってるしい。それにしても、この先つぽ、お……おんぽの先、そつくりじゃないの……ッ。ああ、

もっ……

「いや……あつ。こんな、こ……ん、あふ……ううっ!!」

「嬉しそうに腰くねらせながらそんな事言ったって、説得力ないぜ。淫乱姫さん」

「……!! ひ……ひ……!!」

「あれれ、罵られて軽くイッちまったか? いつもお高くとまった高貴なお姫様が、言葉責めだけで感じちまう救いようのないド変態だなんて驚きだぜ」

「ち……かう……って、言ってる、ご……しよ。ふえ、あ、ああ……あ……!!」

「透けた乳首ヒクヒクさせて、嬉しそうに笑いながら言われてもなあ」

「だ、だから、これは……。んぶうっ」

ああ、言い訳しようとしただけで、触手おちんぽに、顔面へ汁がつかけられちゃったあ。屈辱たわあ、ま、またイクころ、だっただじやないの……あ、あああ、ああ……。

「あ、あ、おんこくばくば閉じたり開いたりさせてるから、すっかり下着の布、くわえ込んでちゃって」

ほ、ほら……、おんこ反応しちゃってるっ。しかもそれ、こいつらに丸見えだしっ。ああ、ドMの変態女だつてバレちゃってるのに。こつして必死に認めようとしないうで、わたくし無様あ。でも、自分がM牝つて認めちゃったら、それ、を、馬鹿にされちゃった

ら……、もう……一生絶頂止まらなくなっちゃう、かもあつ。

「意地張らないで素直に欲しいっていえば、ぶつといのぶち込んでやるのに。我慢して喜んでるなんて、やっぱり救いようのないマゾ牝だぜ」

「は……ああ、だめ……!!」

陰唇の内側の鋭敏な粘膜に濡れた布地が密着しちゃっている。そこに細い触手、潜り込んでのたうつたび、腺液がふじゅふじゅ

ゆ溢れちゃう。

「ひっ、あ、は、あ、は……あああ……!!」

包皮剥けして陰核っ、ジンジン疼いてるのっ。細触手ッ、勢いよく弾くなんてえっ。

「んぐうっ!! はわあああああ……!!」

ぶつしゃあああああつ、ふじよじよじよじよおっ!!

絶頂を強いられて我慢できなかった。彼らの目の前で、わたくしは無様におしっこを漏らしてしまった。



「な、なんのつもりなの？ 人間風情の、こんなものもち」

「そんな事言いながら、目はその人間風情のおちんぽに釘付けだな」  
人間なんか魔族の糧でしかない家畜同様の、愚劣な種族じゃないの。なのに……、なんで、こいつら、こんなに、大きいのよ……。  
お……、おんぼ……。こゝであもつ、頭の中でその名前唱えただけで、下腹の奥、トクンと脈打っちゃってるしい……。  
「あゝあ、その下等生物のおちんぽに夢中で、ヨダレ垂らしちゃつて

るよ。この姫様」

「触手じゃ満足しきつてねえんだろ？ いまでもちこぶち込まれたくつてたまんねえつてツラしてやがるからな」  
も、もつ……。そうやって軽蔑しないでよッ。情けなさ過ぎて、胸が高鳴って気がおかしくなりそうなんだからつ。  
「おんこからも愛液ポタポタ垂らしちゃつてるしな」  
「……ち、ちがうつ。2、これは、さつき触手に汚らわしいことを、されたからつ!!」

どうしよう……。おんぼから目が離せないつ。こんなの……、

挿入れ……たら……。これ、膣内にい、挿入れ……たら……。

ああ、すごい……潮臭の強い生臭い匂い、ムンムン漂ってくるから……。し、子宮の疼き……。治まらないッ!!  
ジンジン、切なくなりっぱなし。穴壁、窄まりっぱなしで、愛液……止まらないつ。

きつともうあと少しでも前に突き出されたら、反射的に口に咥えちゃう。吐き気催す牡臭い風味と、不潔な恥垢に口の中を汚されちゃうんだ……。ああ、想像しただけで頭くらくらする。ヨダ

レ……止まらないつ。

「はっはっはあ、魔界のプリンセス様ともあろう御方が、下等な人間ちこぶなんかに本気で発情してるぜ!」

蔑まれてるのに、お尻、クネクネ媚ひ蠢いちやう。こんなの……、すく、イイ……ッッ



心優しき魔族の少女、  
同族の卑劣な罠に墜つ――

# サタウニ

～学園の二つの顔～

小説  
NOVEL

さか い ひとし  
酒井 仁

挿絵  
ILLUSTRATION

みどりかわよう  
緑川 葉

築八〇年超——ゴシック建築の様式を残した古めかしい校舎の、薄暗い廊下に鮮やかな銀色がなびく。

「アストレイアさま、次の授業は大講義室です」

「アストレイアさま、教科書とノートをお持ちします」

「アストレイアさま」

銀糸のような長くしなやかな長髪をたゆませる女生徒の後を、有象無象の生徒たちが家来のように付き従う。

「彼女」を取り巻いているのは、その美貌に惹かれた男子だけではない。多くの女生徒も憧れと羨望の眼差しで

「彼女」を仰ぎ見ている。

まさしく彼女は、ここ私立聖十光学園のカリスマ的存在であった。

「アストレイア——アストレイア・ペフィナス！」

不敵にも、学園のカリスマの前に立ちふさがり影が一つ。いや、遠慮がちにその後ろに三つ。

黒髪のショートカットに金属フレームの眼鏡。校則の手本のように制服をぴしりと着こなした、生真面目そうで小柄な少女。

背後にいる三人の気弱そうな少年たちは、生徒会役員だ。

「あら、これはこれは間桐生徒会長。どうかさつたのかしら？」

銀灰色の瞳に見つめられ、さすがの少女……間桐恭子も気圧される。

（くっ、いつ見ても……ッ）

恭子が気圧されるも道理。それほどまでに「彼女」は美しかった。

腰まである長い髪は鮮やかな銀の色。老婆のそれではなく、艶やかな輝きを放つ。蠟のような白い肌は、黒を基調としたブレザー制服と強烈なコントラストを見せる。

はかなげな印象はない——むしろふつくらと盛り上がった胸やくびれた腰回りは少女らしい鮮烈な色気を強調している。

すらりと伸びた長い脚、たおやかな腕、東洋人とは一線を画したパーフェクトなプロポーション。

そしてなにより人をハッとさせるのはその美貌。びつしりと生えそろった睫毛に縁取られた涼しげな眼差し、整った高い鼻、そしてすつと引き結ばれた唇。月光のように冴え冴えとした美貌は空恐ろしいほど。

酷薄にさえ見える顔に張り付いた笑みは、まさしく「魔性」の微笑み。

二つばかり違和感を覚えるとすれば、美少女の肩に乗った黒く醜い小動物。そしてスカートの裾から伸びた黒い鞭のようなものだろうか。

先端が逆ハート型になったそれは、まるで西洋の悪魔の尻尾のようで、しかも生き物のようになくねと蠢いていたのだ。

「その汚らしい動物はなに!? 学内へのペット持ち込みは禁止よ!」

「キキッ」

ぼろ布をまとったように皮のたるんだ小動物が、不快そうに生徒会長を睨んで鳴く。

「あら、汚らしいだなんて心外。これはわたくしのかわいいマルコ……中南米産の「ハダカケナシクロケアリザル」よ。それに、お聞き及びではないかしら。異国で心細い留学生の精神安定のために、学長が特別に許可して下さったのですけれども?」

その言葉に間桐恭子の顔が真っ赤になる。「彼女」への特別待遇はいまに始まったことではない。

「そ、それとあなた、授業をサポートすぎじやなくて? とも学生の身分というものは」

「あいにく、わたくし身体が強い方ではなくて。でも十分な成績は残しているつもりですし、出席日数もぎりぎり足りていると思いますわ」

たしかにぞつとするほど色白な少女は、病弱に見えなくもない。

しかし、そんなことがある「はずがない」ということを、間桐恭子は知っている。

「か、かいちよおりつ、アストレイアさんがかわいいそうですよ」

「あなたたちはッ」

恭子の暴走をいさめようとする役員たちは、明らかに銀髪の少女に見とれてしまっていた。

「……ご用件はそれだけかしら?」

「それにその……まあいいわ、今日のところは引き下がってあげる。あなたたち、行くわよッ」

「あぁっ、か、会長……」

恭子の後ろで薄い存在感を放っていた生徒会役員たちは、慌てて後を追う。小柄ながら足の速い生徒会長を小走りで追いつけながら、彼らはひそひそ声で話す。

「アストレイアさん、相変わらず美人だったなあ」

「サルはともかく、あの尻尾は……最近の流行りなのかな」

「よくできたアクセサリーだよなあ」

「それにしても美人だよなあ」

「しっ、会長に聞こえる!」

「まる聞こえよ」

ひいと小さく叫ぶ彼らの勘違いを訂正する気にはならない。

彼らがこの学園のもう一つの顔を知ったところで、なんの益にもならないとわかってはいるからだ。

創立一二〇年を誇る私立聖十光学園。元華族、大企業役員、高名な芸術家等々の子女ばかりが通う名門校。

だが、そこに通う生徒の一割は人間ではない。

先ほどの銀髪の美少女アストレイア・ペフィナスもまた、高名な魔族の一門の娘。あの悪魔の尻尾は、まごうことなき「本物」であった。

（アーシィさま……アストレイアお嬢さま）

ここは主に留学生が暮らす学生寮の一室。授業はとくに終わりに、窓の外はすっかり暗くなっている。

173



学生寮の部屋にしては破格に広く豪奢な部屋で、銀髪の少女は一人くつろいでいた。

「あら、どうしたのマルコ」

声ではない会話でアーシィに語りかけてきたのは、少女の肩に乗った不気味な猿。

中南米産の猿などという適当な嘘でごまかしたが、この小動物もまた、魔族であった。

（お嬢さまは、いささかあの人間に甘いのではないませんか？ 人間などしよせんは下等生物……）

「あら、わたくしけつこうあの娘のこと、気にいっていいよ？ わたくしを魔族と知った上でのあの態度……人間にしては向こう気が強くて、からかい甲斐があるんですもの」

そう言っただけのベッドに横たわる美少女は、制服ではなくゴシック調のドレスに着替えている。

基調となるのはやはり漆黒。肩を覆うケープやスカートの裾など、丁寧な職人仕事のレースが幾重にも施され、大量生産品とは一線を画す出来。

銀の髪を飾るヘッドドレスも少女によく似合っている。黒ソックスと黒のスクールローファーももちろん特注品だ。

椅子に座らせショーウィンドーにでも飾れば、百人が百人、クラシックアンティークドールと思うだろう。

「本当はわたくしもっと人間と親しくなってみたくしと思ってますの」

美しき主人の言葉に、醜く黒い小動物は「ひいつ」と乾いた悲鳴を上げる。

（お嬢さま！ 名門ベフィナス家の次期当主ともあるうお方がそのような軽率な発言を！ 誰かに聞かれてもしたら、どうするおつもりですか！）

お目付け役の説教に、アーシィは肩をすくめる。

「大丈夫よ、どんな高位魔族にだってこの部屋の境界は破れない。こっそり破ったとしても、魔力波動ですぐにわかるんだから」

だが、マルコが憤慨するも道理。

たしかにこの学園の生徒の一割は魔族だが、それはなにも人間との和平や共存を望んでのことではない。

より深く人間界の中枢に食い込むため。陰から人間を利用し、弄び、翻弄し、支配するために人について学ぶ場ではないのだ。

そして、魔族と通じている人間は人間で、魔族の強大で邪悪な力や秘術を利用して私利私欲をかなえようとしている。人間と魔族は長らくそういう関係にあった。

魔族とは偉大で邪悪なる存在、人は魔族に使役される奴隷のようなもの。それを否定するような考えはタブーとされ、アーシィもそれを知らぬわけではない。

（……お気付きでしょう、近ごろ妙な動きを見せている奴めのことを）

「ああ——シギアス。シギアス・ガルドアのことかしら」

昼間、間桐恭子に絡まれていた時、遠くから視線を感じていた。

会話など聞こえるはずもない距離で、一部始終を聞かれていたことにアストレイアは気付いていた。

シギアス・ガルドア。学園の生徒であり、茶髪で長身、女子の人氣も高い美青年だ。

（ガルドア家はベフィナス家に一步及ばぬとは言え、魔族の名門。しかも決して当家と友好的とはいえません。隙を見せるようなことは——）

と、言いかけた小動物が口ごもる。

輝く銀髪をしゃりと揺らして身を起した魔少女の唇が微かに歪み、笑みを形作っていたのだ。

あまりにも美しく、あまりにもおどましく、底の知れぬ笑み。それはまぎれもなく少女が人外の怪物であることを物語っている。

「ふふ……マルコは本当に心配症ねえ。あの坊やがちよつかいをかけてくるつもりなら、そうね、ちよつとばかり痛い目を見せてあげるまでよ」

どこにも気負った様子が無いのに、少女の背中からは闇が噴き出ているかと思うほどの迫力を放っている。

魔界の小動物は声一つ出せない——と、その時、コンコンとノックの音が響いた。

留学生扱いされている魔族の中でも、名門の家系であるアーシィは特別扱い、特に親しい友人もいない。

「こんな時間にどなたかしら……あら、

珍しいお客さまねえ」

扉の向こうで佇んでいたのは、制服姿の小柄な眼鏡少女だった。

「……こんばんは。夜分遅く御免なさい。ちよつといいかしら」

いつもイライラした表情しか見せたことのない間桐恭子の態度に、不審を覚えなかったと言えは嘘になる。

しかし「ただの人間」に過ぎない少女を、アストレイアはまったく警戒していない。が、室内に入った恭子を見るや、漆黒の魔動物が歯を剥き出して威嚇の声を上げる。

「駄目よ、マルコ。あつちへいつてなさい。さあ、お入りになって。魔族の入れるお茶がお嫌でなければ」

につこり微笑むその口調を嫌みととったのか、小柄な生徒会長は軽く唇を噛むがなにも言わなかった。

「少しお待ちになっていて。昨日、ローズヒップの缶を頂いたところなの」  
銀髪の少女はペットを金の籠に押し込むと、それを持って簡易キッチンのある隣室に消える。

「……………」

勧められるままアンティークの椅子に腰かけた少女に、アーシィはキッチンから声をかける。

「いつたいなんのお話かしら。わたくしたちの事情を知っているとはいえずわたくしはあなたに嫌われていると思つていたけれど」

「べつに……そんなことは」  
「あらそう？ わたくしはあなたのこ

と、嫌いではないわよ。いえ……人間と魔族って、もつと深くわかりあえるとは思わないこと？」

ティーカップとポットを乗せたトレイを手に、銀髪の少女が戻ってくる。恭子はハッと居住まいを正したが、アーシィはそれを緊張によるものだと思わなかった。

「人間と魔族がわかりあえる……そんなこと、信じられないわ」

「そうかもしれないわ。でもそうじゃないかもしれない。可能性の問題よ」

そう言っ二人分のお茶を注ぐと、自分のカップから音もなく香りのいい紅茶を吸る。

「魔族は人間を利用し、人間も魔族の力を頼っている。でもそこに何らの信頼関係はないわ。この学園で人間について学んでいるのも、より効率的にあなたたちから搾取するため」

アーシィはマホガニーの机につ……と指を走らせる。

部屋の調度品もこの机もすべて本物の高級品。こうした贅沢もまた、魔族が人間に恩恵を与えている見返りだ。

「わたくしはこう考えるの——魔族と人間の関係が変われば、未来も変わると。でもそのためには協力者が必要。魔族のことを知っている人間のね」

「な、なにが言いたいの。あなたと友だちになれとでも？ 冗談でしょう、あなたみたいな高慢ききな……」

しかし銀髪の少女は怒るでもなく、穏やかに微笑んでみせる。

「あら、じゃあ今夜あなたはなにををしにいらしたのかしら。わたくしのお茶が飲みたいたい言うのなら光栄だわ」

それを挑発ととったのか、眼鏡少女の顔がカッと赤くなる。

「帰るわ」

一口も飲んでいないカップを置き去りに、恭子はアーシィと目を合わせようともせず背を向ける。

アーシィは敢えて引き留めず、その後ろ姿を見送った。

「あらあら、やはりお茶うけも出すべきだったかしら」

(アストレイアさま、ご無事でですか！あの小娘になにもされてませんか？)

退魔師でもないただの人間にアーシィを傷つけられようはずもない。だが、恭子が操られている可能性もある。

たとえば魔族を殺せる武器を渡してアーシィを襲わせることくらいは、シギアスなら造作もないだろう。

「いえ、彼女からはなんの魔力の残滓も感じなかったわ。わたくしとの友情を深めに来た……と言うのなら、むしろ大歓迎なのですけれど」

(ご、冗談を)

豪奢な部屋の中に、甘いローズヒップの香りが漂っていた。

「ハア、ハア、ハア、ハア……ッ」

走り通して恭子がたどり着いたのは、そびえたつ超高級マンション。とても学生が一人暮らしをするようなマンションではない。

(魔族がどんな方法を使って最上階にのうとうと暮らしているのか……考えたくもないわね)

これから会う相手、そしてそんな輩に関わってしまった自己嫌悪で胸が悪くなる。

インターホンを鳴らすと、ガチャリと遠隔操作で鍵が開く。

無論、どこかにあるカメラで恭子を確認したのだろう。ドアを開けると同時に、室内から溢れた生臭い匂いが鼻孔に突き刺さり、少女は顔をしかめた。

(なにこの匂い……)

生き物の体臭とも排泄物ともつかぬ異臭に、はあはあというあえぎ声が聞こえてくる。それも複数の人間が立てている音だ。

「どうしたんだい、遠慮なく入っておいでよ、間桐くん」

落ち着いたバリトンの美声。声だけで美形を連想させる声に、しかし恭子は首の後ろの毛がぞわりと逆立つのを感じる。

意を決して廊下を進み、リビングに続くドアを恐る恐る開け——そして、絶句した。

「ああんっ、あつ、あああ……っ」

「ひい、はひいひいっ！ イク、イツちゃううううう」

ぐちゅつ、ぐちゅつ、じゅぽ、じゅぽ。湿った音の正体は、濡れそぼった乙女の花弁に太く勃起した陰茎がねじ込まれる音。

ちよつとしたパーティーでも開けそうに巨大なリビングルームで、複数名の裸の男女が絡み合い、獣のように激しく交わっていた。

そんな裸の男女が三組。男たちの顔には見覚えがある。恭子と同じ聖光学園の生徒で、お世辞にも素行がいいとはいえない連中だ。

そして部屋の中央で巨大なソファに一人座っている茶髪の青年……彼の名は、シギアス・ガルドア。

「おほうっ！ 出る、出るぜ……」

「出してえッ、おんこち……ぼ汁でイツちゃうううっ！」

胡坐をかいた膝の上に女を抱き抱えた男が軽くのけぞると、女ががくがく痙攣し、髪を振り乱す。

「ひっ……なんなのこいつら……」

対面座位で中出しされた女は絶頂に達し、白目を剥いて気を失った。

(男と女が、裸で……これってつまり……でも)

セックスの知識くらいはあるつもりだったが、眼前の光景のあまりの異様に恭子は言葉もなく立ちつくす。

「ふひひひっ、これで三発目……なあ、こいつ孕んだらどうしよう」

男の下卑た笑みに、一人悠然とワイングラスを傾けていた美青年が答える。

「ああ、人の胎児は貴重だよ、魔族の霊薬の材料にうってつけだ」

その言葉に恭子はうっと口を押さえうずくまる。

「あれっ、生徒会長じゃん。も、もしかして会長もシギアスさんと同じ……」

「正義のヒロインと悪の女幹部が生中継でボロするようす」「魔法少女ならぬ魔法中年が世界の平和を守る事になったようす」「邪悪な魔王が伝説の女勇者に転生したようす」「退魔剣士 鎮夜 魔術学園の闇」「不死の吸血姫がDSのご主人様を募集しているようす」



…

「違う違う、彼女は君たちと同じ、立派な人間さ。ただ『事情通』ではあるがね。間桐恭子くん、例の件は」

懸命に吐き気を抑えると、恭子は嫌悪を込めた目で睨みつける。

「も、もうたくさん……お父さまからあなたと懇意にするように言われたから協力しなけれど、あなたも、あのアストレイアと関わるのもまっぴら!」

「おやおや、つれないねえ。君にはこのメス豚どものような扱いはしなかっただろう? まあ、君に触れなかったのは彼女に感づかれたくなかったからなんだけどね」

「あひいん、もつとおろ、もつとちぼ汁ちようらいいつ、くひひつ」

メス豚呼ばわりされたというのに、女たちは動物じみた声を上げて、なおも陰茎にむしゃぶりつこうとする。

学園の生徒ではない、どうせどこかの商売女なのだろうが、恭子には彼女たちが惨めな供物にしか見えない。

「……言われたものは、たしかに取り付けてきたわ。技術的なことはよくわからないけれど、これであなたの求めていることはかなえられると思う」

恭子は小型ラジオのような機械を取り出し、シギアスに投げつける。

それを受け取ると、魔青年は軽くそれを操作してから、満足げに頷く。

「うんうん、さすがは間桐コーポレーション、いい技術者をお持ちだ」

「……ご満足? なら私は帰らせて…

…な、なによあなたたち!」

気がつけばさつきまで女たちを犯していた男子生徒が恭子の背後に回り込んでリビングの出口を塞いでいる。

「ひひひつ、せっかく来たんだ、会長も俺らと遊んでいこうぜ」

「シギアス・ガルドア! 私になにかあったら、間桐家とのパイプを失うことになるのよ、それでも——」

「……たしか君には弟さんがいたはずだねえ。まだ小学生だったかな?」

「なッ、弟になにかしたら」

しかし魔青年はちつちつと指を振る。「つまりさあ、間桐グループの後継者はすでにいるってことなのさ。そして君のお父上は、ボクとのパイプは変わらず保つていたい」

シギアスの言葉に、眼鏡の少女はきょとんとする。だが、やがて顔から血の気が引き、恐怖に震えだす。

「そんな……嘘よ、お父さまがそんな」

「人間っておつかないよねえ!。魔族のご機嫌をとるためなら、実の娘を平気で差し出すんだから。ああ怖い怖い」

他人事のように言いながら、魔性の青年はシャツのボタンを外していく。

ギリシャ彫刻のように均整のとれた胸板が露わになり、ブランド物のストラックスの前の部分は、いまにも破れそう

なほど盛り上がりつつある。

「い、いや……こないで……」

「へっへへ、あ、あとで俺たちにもさせて下さいよシギアスさん」

「俺らが押さえときますから!」

あの股間の盛り上がりがなんなのか、これから自分がなにをされるのか、それくらいは理解できる。理解はできて

も、納得できるわけがない。

膝からくずおれそうになりながらも、間桐恭子はぎりつと唇を噛み締める。

「さあ、おとなしく……ぐえっ!」

肩を掴もうとした男子の鳩尾めがけ、思い切り肘鉄を叩き込む。と同時に、反対側の男子の裸足の甲を踵で力いっぱい踏みつけた。

ごく初歩的な護身術だが、油断していた男子たちはその場にひっくり返り、恭子はさつと身を翻す。

だが——。

「ツツツ!」

玄関ドアに向かっていた小さな身体が止まる。どんなに力を込めても指一本動かせず、恭子の額に汗が滲む。

ようやく動いた……と思ったが、少女の足は前にではなく後ずさりしていく、本人の意思とは無関係に。

(これって……まさか……)

恐ろしい努力の末、間桐恭子は振り返ることに成功する。その間にも彼女の手はスカートの中に潜り込み、自分で自分のショーツを下げ、脱ぎ去ってしまう。

そして見た——ストラックスも脱ぎ棄て全裸になったシギアスの股間に雄々しくそびえたつ、恐ろしく逞しいイチモツ。

(あ、あれって男の人の……? でもあんな大きくて、金属の棒みたいで、

あんな、あんなッ)

「あれっ、間桐くん知ってたはずだよねえ、ボクが魔族だって。ああ、実際に魔族の力を見るのは初めて? ならしょうがないね」

「な……に、を………ッ」

虚勢を張りたくても、掠れるような声しか出せない。抵抗するどころか、少女は身体を前に倒し、青年に尻を突き出す格好を強いられる。

べろりとスカートがめくられると、性器も肛門も丸見えになっていることだろう。頬が羞恥に熱く燃え、目尻に涙が浮かぶのが止められない。

(わたし……私……ッ)

好きでもない相手に犯されるのは無論悔しい。だがそれよりも、人間を明らかに見下している化けものに自由を奪われるのが悔しい。

そして、こんな怪物に我が子売り飛ばすような真似をした父親が憎い。おこぼれをあずかるためにこびへつらっている男子たちが不甲斐ない。

そしてなにより——自分の無力さがやりきれない。

「ふん、ふん——あれあれ、まだ濡れてないみたいだね。それに君小柄だから、ボクのイチモツはちよつと大きすぎるかなあ」

いやらしくヒップを撫でまわしながら、腰を突き出してくる。

花弁に「ごりつ」と固く熱いものが押し当てられた瞬間、思わず「ひっ」と声が漏れる。

「間桐くん、ヴァーゼンだよねえ？  
じゃあちよつとばかりきつい初体験に  
なりそうなんだけど——」

「い、いやつ、やめ……」

声を震わせて拒絶するが、無論意に  
介するはずもない。いやむしろ、魔青  
年は少女に最大限の恐怖を与えるため  
に、亀頭を軽く押し当て、なかなか挿  
入しようとしない。

（こいつ、わざと焦らして……私が怯  
えるのを楽しんでる？）

気付いたところで、無形の力で抑え  
つけられた恭子に、抗う術はない。

背後では男子たちが、にやにやと底  
意地の悪そうな笑みを浮かべて処女喪  
失ショーを見物している。

「処女を失うのって痛いそうだけど  
……」

「ま、待つて——」

「ま、いいよね」

ずぶぶぶつ、めりめりめりいっつ。  
「ふぎいっつ………!!」

それはレイプというにはあまりにも  
惨たらしい光景。

平均サイズをはるかに超えた巨根が  
一気に半分ほどめねじ込まれ、乙女の  
純潔の証を無残に引き裂いた。

「ふふっ、まだまだ入っていくよ」

みしみしみしつ、ぐじゅつ、ずぬつ。  
「いぎいぎい！ ひあ……ッッ」

小さな少女の穴は、大陰唇ごと押し  
込まれ、強引に魔茎を呑み込んでいく。  
先端がごとりと子宮の入り口を乱暴に

ノックするが、シギアスはさらにそこ  
から根元まで突き通す。

「ああ、やはり初物というのはたいし  
ていいものではないねえ。きついばか  
りで愛液も分泌されない、まるで出来  
の悪いオナホールだね」

「うぎつ、ひぐうううつ」

文字通り身体を引き裂かれる激痛に  
間桐恭子は必死に耐える。いや、耐え  
ることしかできないでいる。

いっそ気を失えばどんなに楽だった  
ろう。しかし魔族の青年は絶妙な加減  
で腰を振るい、少女を決して気絶させ  
ず、小さな穴を食いつける。

「いっつ、ひい、ひあああッッ！ も、  
もう、やめ……んくううッッ」

「やれやれ、もうギブアップかい。ま  
あそう簡単に壊してしまつては、彼ら  
もつまらないだろうしね……つと」

「ふぎいんつ」  
どん、と前に突き飛ばされると同時  
に、「ずるるつ」と巨根が引き抜かれる。  
ぼとつと、と床に滴り落ちたのは破瓜  
の鮮血。

そのままへたりこんで放心する少女  
のショートヘアーに、「びしゃつ」と  
生温かい液体がぶちまけられる。

解放されたショックも覚めやらぬま  
まゆつくりと振り返ると、眼鏡のレン  
ズに真っ白な粘液が降り注がれる。

「ひやははは、生徒会長にザーメンシ  
ヤワーとは、さすがシギアスさん！」

「マジ、ばねえッス！」  
どびゅつ、びゅ、びゅばばつ。

巨大な肉茎をしごくたび、びゅるつ、  
びゅるつと大量のザーメンが迸り、衰  
れた少女の身体を汚す。

自分の身体を、処女穴を排泄のため  
に使われたとようやく気付いた乙女の  
顔が、絶望に染まっていく。

「なによこれ……痛い、いたいよ……  
なんで、私がおんな……」

少女の目尻に大粒の涙が浮かぶ。  
「う………うううつ……」

「さあ、君は彼らに払い下げるとして、  
ボクはあつちの娘たちに相手をしても  
らうとするかな」

ほろほろと泣き崩れる少女に向けら  
れる魔青年の瞳には、同情も憐憫も  
いや蔑みすら浮かんでいない。ただの  
ものを見る目だと恭子は気付いた。

みしつ。  
みしつ、みちみちみち……。

少女の目の前で美形で長身の青年が  
変貌していく。  
魔族としての真の姿——その一端を  
垣間見た少女は、真の絶望に突き落と  
される。だが、陵辱の宴は始まったば  
かりなのだ……。

聖十光学園の旧校舎図書室は、彼女  
のお気に入りだった。  
生徒の大半は近代的設備と豊富な資  
料の整った新校舎の方を利用している。  
なので、こちらの旧図書室はいつも静  
まり返っている。

穏やかな昼下がり、授業をサポート  
ジュして一人ここで過ごす時間が、ア

ストレイアは大好きだった。

もつとも今日は休日であり、アーシ  
イも制服ではなくゴスロリ調のドレス  
姿だ。一人の時間を楽しみたいので、  
マルコも部屋に置いてきている。

美麗な版画の載った詩集をめくる指  
が、不意に止まり、眉根がひそめられ  
る。穏やかな午後の日差しが曇り、室  
内の温度がひやりと下がる。

（人払いの結果……複数の人間の気配  
と、それにこれは）

「やあ——お邪魔だったかな、アスト  
レイア・ペフィナス」

表面上は穏やかで友好的な物言いに、  
しかし銀髪の少女は不快感を隠そうと  
もしない。

「お邪魔だと思うのなら、いますぐ退  
去していただいてもけっこうですよ、  
シギアス・ガルドア」

しかし茶髪の美青年は露骨な悪意に  
気を悪くした様子もない。ペフィナス  
家とガルドアの一族は対立している間  
柄とはいえ、まさか校内で仕掛けてく  
るほど無法なことはするまい。

（だからといって、気まぐれで声をか  
けてくるなんてありえない。それに、  
この人間の気配は……）

訝る美少女に見えるように、シギア  
スはなにやら小さな機械を取り出した。

「これ、すごいでしょう、この小さ  
な機械の中に、何十時間つていう音声  
記録をしまつておけるんだってさ。い  
やはや、人間の技術ってたいしたもの  
だよな」



「……………」

「もちろん、ボクたち魔族はこんな機械に頼らなくてもそのくらいのことできるけどさ。魔力の残滓がどうしても消しきれないからね。たとえばボクの魔力で君の私室での声を盗み聞きすることなんかできやしない」

機械？ 魔力の残滓？ 盗み聞き？ シギアスがなにを言おうとしているのか、アーシィはわからない。

「こういうことさ」

カチリ、とボタンを押すと同時に、機械から涼しげな少女の声が明瞭に流れ出す。

『わたくしはあなたのこと、嫌いではないわよ。いえ……人間と魔族って、もっと深くわかりあえるとは思わないこと？』

それはまぎれもなくアーシィの声。

しかも誇り高き魔族にとってはタブーとされる、人との協調路線をはつきりと口にしてる。

「シギアス、あなた」

「これはどうしたことだろうねえ、名門ベフィナス家の次期当主ともあるうものが、下賤で低俗な下等生物ともっと深くわかりあえる？ これはたいしたスキャンダルだねえ」

「いったいどうやって……あなたの魔力などまったく感じなかったわ」

混乱するアーシィの前に、物陰から姿を見せたのは三人の男子生徒と、小柄な女子生徒。

「あ……う、う……………」

「間桐恭子!？」

「彼女は実によくやってくれたよ。ボクと一切接触していない身で君の部屋を訪れ、盗聴器を仕掛けてきてくれたんだからね」

「彼女になにを——」

眼鏡の少女がなにをされたのかは一目瞭然。

制服のあちこちが無残に引き裂かれ、全身にこびりついた男の体液ががびがびに乾燥し、聡明だった瞳はうつろな光しか宿していない。

「そういうわけで、ボクは労せずして君のプライベートな音声を手ずかすことができたというわけさ。君に一切気付けられることなくね」

「そんなおもちゃでわたくしを脅迫でもするつもりかしら？ 笑わせないでいただけるかしら」

「人間の技術のすごいところは、そこなんだよ。この機械を壊したところで、すでに無数の複製が作られている。インターネット？ だかんだかで拡散すれば、もはやそれを回収するのは不可能だそうだよ」

魔族としていくら強大でも、アーシィは人間のテクノロジーには精通していない。

シギアスの言う通りだとすれば、アーシィの発言がほかの魔族の知るところとなり、ベフィナス家の立場は苦しいものになる。

「まあ、君が前々から魔族らしからぬことを考えているだろうことは予想し

ていたけど、いざ聞いてみると驚きだね、へどが出るね」

なにも言い返せない銀の髪の少女に、青年は間桐恭子の両脇を抱えた男子生徒を示す。

「彼らがその哀れな少女になにをしたかわかるかい？ 親に利用され、見捨てられた彼女を獣のように陵辱したのさ、同族に対して」

「へ、へへ、俺らいちおうシギアスさんの舎弟だもんで。や、役得っつーか」

「魔族のことを知った時は驚いたけど、ま、まさかアストレイアさんも魔族だったなんて……うひひひ」

やにさがる彼らの目は、明らかにアーシィを視姦している。

「彼ら人間などしよせんこの程度の存在。強いものにこびへつらい、弱者にはどこまでも卑劣になれる。まあ、魔族の道具としては便利な存在だがね」

「くっ!」

勝ち誇るシギアスの言葉に、少女は打ちのめされていた。

「あなたたちは恥ずかしくはないの!! 人の誇りというものはないのですか!」

「いやあ、俺ら叩けばけっこう埃の出る身なもんで」

「ぶっちゃけ、強い側についた方が得つスからあー」

にやけ顔の男子生徒たちの馬鹿面に吐き気がこみ上げる。

（人が弱いものだなんて、わかってる。でも高い志やプライドを持った人間だ

っていると思っていた。そういう人間と協力しあえば、いまと違った関係が築けるって……）

だが、その理想がゆらゆらと頼りなく崩れ落ちてしまっそうさだ。

「事実、間桐くんも君を裏切ってボクに協力していたわけだしね。名門の出身かもしれないが、君は心底愚かな魔族なんだよ、ハートハッハッハッ!」

「シギアスさん、こ、この女もやっつまうんですか、シギアスさんのデカマラで!」

「そうだな……いきなりメインディッシュというのも興ざめだ。君たち、三人がかりで彼女を犯したまえ」

「なにをふざけたことを……あつ!」

「ばちん、と魔青年が指を鳴らすや空間が歪み、無数の触手が湧いて出た。それはアストレイアの四肢に絡みつき、自由を奪う。」

「こんなもの……ッ、く、くああつ」

それは魔族を拘束するための特別製の触手、しかもいまのアーシィはシギアスの言葉に心を揺らし、本来の力が出せないでいた。

（生臭くて気持ち悪い……なんて悪趣味な男……!）

ぬめぬめとした肉紐は少女の肌に食い込み、身動き一つとれなくなる。

（いつそ魔力解放するか……いえ、でも想像以上に拘束が強いわ。解放しすぎるとこの男子たちや、間桐恭子まで吹き飛ばしてしまうかも）

シギアスの手下とはいえ、ただの人





間を傷つけてしまうことに、魔少女は抵抗を覚える。

だが、三人の男子はそんな少女の遠巡も知らず、眼鏡の生徒会長を乱暴に放り出すと、アーシィににじり寄ってきた。

「ふえへへへ、まさか俺たちが先に頂けるなんて、これだから魔族の手下はやめらんねえっ」

「くっ、下衆な人間が……ッ」

舐めまわすような男子生徒たちの淫らな視線に、ぞわりとうなじの毛が逆立つ。こみ上げる嫌悪で思わず力を解放しかけた時、茶髪的美青年が呆れたような声を上げた。

「おいおい、いきなり挿入なんて無粋はやめにくれよ。そうだ、人間界にはアダルトビデオとかいうものがあるだろう。あれみたいにやってみせてくれよ」

シギアスの言葉に、男子たちの目の色が変わる。

「そういうことなら、任せて下さいよ！ じゃあ俺からだ、イラマチオつてのをご覧に入れますよ」

ぼろん、と半勃起した陰茎を取り出すと、銀糸のような長髪を乱暴に掴んで前に引き倒す。

「いたっ、な、なにを……ひいっ？」

目の前に突き出された肉棒から顔をそむけようとするが、男子生徒は力任せに少女の首をひねり、ぬぶりと愛らしい唇に肉竿をねじりこむ。

「んむうううっ！ ん、ぐうう」

猛烈な臭気、そして焼けた金属棒に皮をかぶせたような不気味な感触が、口の中いっぱい広がる。

（なにこれ……これが人間の男の、い、息がで、ない……ッ）

人間の性行為についての知識がないわけではない。

しかし人間文化でもアーシィにAVの知識などがあるわけもない。そのことを知ってか知らずか、男子生徒は両手でがしりと少女の頭を押さえつけると、腰を振りたて始める。

「んぐうっ、むぶうううっ」

「ひひひっ、こ、こうやって、女の頭を押さえて口ま……こを犯すのが、イラマチオっていうんですよ」

「ほほう、なんとも屈辱的でいいな」

「おふうう、口の中あつたかくて気持ちいい……ッ」

ぐっぽぐっぽと一方的に口中を犯される少女は、懸命に手足に力を込めて抵抗する。だが力を入れるほどに、逆に触手の締め付けが強くなる。

（思ったように……力が入らないッ）

亀頭がごりごりと上顎の上をこすり立てると、何度かええええそうになる。

（それに、苦くてしょっぱいこの味は、頭がくらくらする……！）

「おいおい、俺たちも楽しませてくれよな。さあアストレイアちゃん、スカートめくってあげましょうね」

残り二人の男子はゴシックドレスの下半身に興味津々。脇腹を撫でまわしながらスカートの裾から無遠慮に手を

潜り込ませてくる。

「腰細っせえなあ！ けど、お尻はむつちむちで、たまねえなヒビ」

「魔族ついても女はしよせん女つてことか？ たいしたことねえな」

（触手に自由を奪われてなければ、こんな輩の好きには……）

ろくな抵抗がないのはいいに、彼らは前後からアーシィの下半身を扶むような体勢で、鼻先数センチの距離で女体の匂いを嗅ぎまくる。

ふがふがと荒い息が下着越しに吹きかけられ、むっと汗臭い男の体臭が立ち上ってくる。

（三人がかりで女一人を辱めるなど、恥知らずの無礼者め……）

どうにか腰を左右に振って逃れようとするものの、特別製の触手の力は強力無比。男たちをはねのけることなどとてもできない。

なにより掴まれた頭を激しく前後に揺すぶられるたび、太い肉棒がごりごりと喉奥を擦り、氣道を塞いでくるのだ。

（くるしッ……気持ち、悪い……こんな奴らにいいようにされて……！）

普段のアーシィなら、特別魔力を行使しなくても、人間の力程度なら容易に振りほどける。それだけにいまの己の無力さが悔しくてたまらない。

「うっはあ、お股からなんかいい匂いしてくるぜええええ。あの商売女どもとは比べ物にならねえっつの」

「ふて、ふてごて、け、ケツの匂いが

マジ芳香剤みてえ……」

「おら、人間さまのち……ぼの味はどうだ？ ちゃんと舌を絡めて口まんこで奉仕しろよ！」

ぐぼっ、ぐぼっ、じゅるるっ。

唇を犯す男子生徒がにやにや笑いながら腰を振りたてる。

それに負けじと二人の男子も股間に鼻面を突っ込みながら、四本の手が尻や太もも、ふくらはぎなどあらゆるところを撫でまわす。

そんなことをされてもちつとも気持ちよくないが、熱い吐息で肌が否応なしに火照るのを抑えられない。

（気持ち悪い、いいかげんにしろ！ この締めさえどうにかなれば、いままぐ八つ裂きにしてやるものを！）

「ちよ、そろそろ指くらい入れてもいいかな……下着の脇からおまんこくちゅくちゅしちゃうぜえ……」

「んぐうううッッ！」

内股を揉むように撫で上げてから、男の指が下着の内側に侵入してきた。汚れを知らない乙女の花弁を蹂躪するかのように、肉壁に沿って何度も指を前後させる。

「お、オレは尻穴でもねぶらせてもらうとするか。パンティを下して……うっひょお、こいつは……」

「ッッ！ んあっ、そこはっ」

下着をずり落とした男子の目の前に現れたのは、尾てい骨の辺りから生えている悪魔の尻尾。

それは精巧なアクセサリーなどでは



ついに召喚の儀が  
成功したか！

おおっ！

こ…これが  
噂に聞く最上級  
モンスター

デーモン  
悪魔か！！

美しき悪魔、  
降臨！

我ウリルの眠りを  
妨げるとは…

覚悟はできて  
おろうな？

最新単行本『精飲少女』好評発売中！

堕ちる悪魔

漫画 トギサナ  
COMIC



これだけの  
兵士を一瞬で…

間違いない…  
本物だ…

恐怖にまみれた  
魂…実に美味だ…  
だがまだ喰い足りない

なあ？

人間

ど…どうか命だけは  
望みの物ならなんでも  
差し出しますゆえ

殺されるう…

貴様が我を呼び出した  
首謀者であろう  
悪魔を見世物にするため  
召喚するとはな…

悪魔を呼び出した  
代償…  
その身をもって  
支払うがいい

ハッハッハッハッ  
滑稽な姿だな人間  
不様にも程があるぞ

ど…どうぞこちらを  
お受け取り怒りを  
お収め下さい

宝石のついた首輪か…  
なかなかどうして悪くない

ふむ…

でしょう！  
そちらは滅多に  
お目にかかれない  
最高級品でして…

誰が顔を上げて  
いいと言った？

ヒッ

ほう

命乞いの次は  
貢ぎ物かやる  
ことが浅ましいな

どれ…

フフ…人間  
この首輪気に入ったぞ  
褒美に楽に殺して  
やろう

ええでは

「バカめ」と…

最後に  
言い残すこと  
はあるか？





呪いのアイテムとはな

このような豚共と  
同じ部屋に入れるなど  
正気とは思えん

クオックオツ  
最上級モンスター様が  
人間に捕われたくせに  
よくそんな口が聞けるな

人間め…計りおって…  
こんな首輪で私の力を  
封じるとは

しかも…



分をわきまえよ  
オーク共  
力を封じられても  
貴様らの2、3匹消しきる  
力は残っているのだぞ

ぐっ



なに？

オークたちは  
その首輪の呪いを解く  
方法を知っているオーク

言ってみるがいい

ほう？

そんなこと  
言っている  
のかオーク？



悪魔の目の力で  
オークがウソを  
ついてないことはたしかだが…  
このような  
おぞましいモノの  
汚れた汁を体内にだど…



よい…  
では私の前に  
汁を用意するがよい

だが人間の奴隷よりはましな  
仕方あるまい  
いつまでもこんなところに  
いるわけにもいくまい…



なに？

クアツクアツ  
誰がそんなこと  
するオーク？



殺されたい  
みたいだな…

オークを殺せば  
永遠に地下牢獄オーク  
それでもいいオーク？

オーク風情が…



なんだと…

オークの精子を  
体内に吸収すれば  
その首輪の呪いは  
解けるオーク

本気で言って  
おるのか？

それとも一生  
オーク達と  
この部屋で  
暮らすオーク？

オーク達はお願  
いされる立場オーク  
「オーク様の  
オ●ン●ン汁を  
ください」  
って頭を下げて  
お願いしろオーク



呪いが解けたあと  
覚えているがいい...

オ...

オ...

オーク...様の  
オ██ン██ン汁を  
ください！

なんという...屈辱  
悪魔である我が  
このような豚に  
懇願するなど...

ああ？  
聞こえないオク

いいだろう

ダメオク...  
全然ダメオク...

オオーク...様の  
オ██ン██ン汁を  
ください

こいつ...この私の頭を  
足でエ...！

もっと頭を下げて  
誠意を示すオク

バカな悪魔は  
こんなことも出来ないオク

まあいい  
かわいそうな悪魔に  
オーク様の精子を  
くれてやるオク

う//なんだ...これは!?  
こ...これがオークの精子  
なんという強烈な汚臭

こんなものを  
口に...入れるだと!?



堕ちるだと

うっ

こんなもの  
いへへ食へやう

この我には

ぐっ



臭い...それに  
なんという味だ...

回の中が  
ネバネバする

本当にこんなもので  
呪いが解けるのか?



ちゃんと犬みたく  
口だけで食べるオク  
わかったかメス犬

っ...

そんな顔してられる  
のも今の内オク  
オク達の精子は  
特別製オク

特別?

オクの精子は  
メスを堕とす効力が  
あるオク

あまり  
食べるとヤバイオク



本当に食ってるオク  
四つんばいでペロペロ  
犬みたいオク

んっ

さっきまで  
エラそうにしたヤツとは  
思えない姿オク





それに体が熱い…  
さらに敏感な部分が  
うずいてきおる…

これがオークの  
精液の力か…



あとどれだけこんな  
気持ちの悪いものを  
食わねばなんのだ…



もうかなりの量の  
精液を食したはずだ…  
まだ呪いは解けないのか…



精子のせいでもかなり  
体が欲情してきたオク

まだ自分の立場が  
理解出来てないオク

な…なにを  
する気だ！

よせっ  
今ソコは…



人間のメスなら  
とっくにおかしくなってる  
くらいの感覚になってるオク

!?

そんなバカで  
スケベなメス犬に  
尻尾をつけて立場を  
わからせてやるオク



おらっ  
追加だオク

この豚め！  
調子に乗り  
おつて！

水にちゃんと  
顔つけるー！

水泳部に入って  
おきながら  
バタ足も  
できないとか！

今日という今日は  
50m 進めるように  
なるまで帰さんぞ！

夏はやっぱり水着だわ！

足まげ  
なーい！  
あしはきき  
きききき

びーと板って  
ふにふにして  
泳ぎにくいですう

まきの  
牧野先輩におてて  
ひいてもらったら  
もっとうまく  
やれるかもー♡

あ…  
甘えるな！

単行本エンジェリック・デザイン 好評発売中!!!

発情  
スプラッシュ!  
Hatsujo Splash!

漫画  
COMIC

おおたけし







ちよ...!

せーんばい  
おっばい  
おつきー♡

マコト  
真珠  
ちゃんっ!?

あっ

くっ  
あふ...っ

せんばい  
スキ♡

ずーっと  
前から  
大スキ♡

マコ  
学校に  
来たのも  
せんばいめあて  
だもーん♡

まじめに  
練習しろっ

れんしゅー?

くま  
そんなの  
必要ない  
です  
だってマコト  
せんばいより  
ずーっと速いん  
だよー♡

!?







やああっ

あ...っ

あーん  
おっきい  
...♡

そ...そんな...っ

いじらない  
でえ——っ!?

ちくび  
ダメっ

触手から  
せんぱいの  
勃起乳首が  
つたわってきたる♡

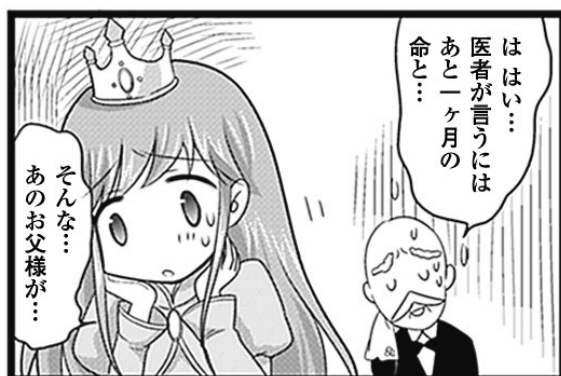
はーん...!!

は...♡

は...♡



## 事のはじまり



## ついに性転換!? 姉妹姫



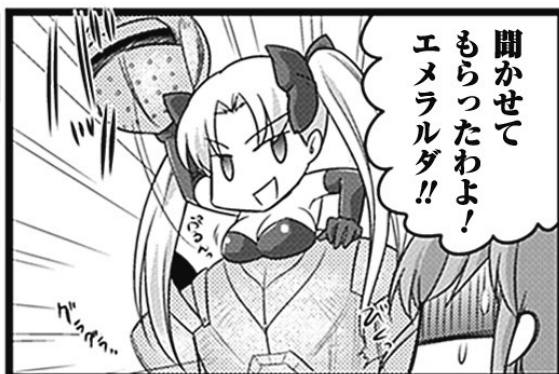
# 先行き不安



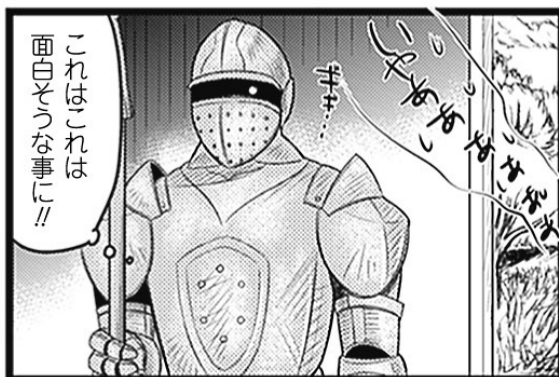
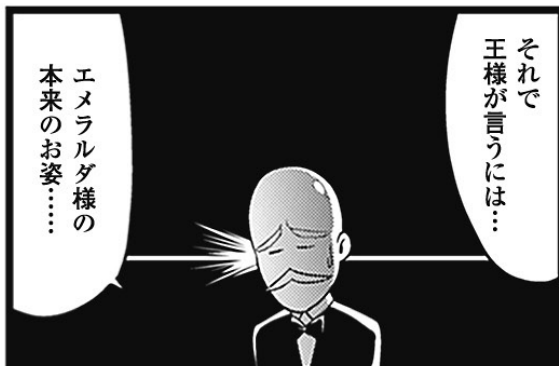
ルビィ  
ダイア国のお姫様。気ままなお姫様。エメラルダの姉。



エメラルダ  
ダイア国のお姫様。しっかり者。実は男。



# 怪しい影...





行方不明の姉を探す美貌の女海賊が  
船上の男たちの慰み者に成り下がる！

復讐の  
女海賊

レイナー

小説  
NOVEL  
挿絵  
ILLUSTRATION  
にかいどうあき  
二階堂安芸  
つじかぜ  
辻風

「な、舐めんなよ。このアマあ！　ぐあああ！」

小さな港町の外れ。人があまり寄りつかないような路地裏で一人の少女が男三人を相手にサーベルでの立ち回りを繰り広げていた。

サーベルを片手に左手にはマスケット銃を持ち、雄叫びと共に突っこんできた相手を返す刀で斬り伏せる。肩にかけられたコートをマントのようにたなびかせ、ドクロの紋様が描かれた帽子を被る姿は七つの海を股にかける海賊の風格たつぷりであった。

「どうしたもう終わりか三下ども」

サーベルを肩に担ぎ、残った二人を挑発する。

つり上がった目と短く切り揃えられた髪。豊かに実った胸がこぼれないようなウエストのくびれの位置で結ばれたブラウスは、普通に着るよりも露出度がぐつと上がつており、大きな膨らみの北半球と谷間、へそが丸見えになっていた。そこから覗く肌は小麦色に焼けている。しなやかに鍛えられた筋肉によって美しく持ち上げられたヒップは、脚の付け根までしかないショートパンツでこれもまたギリギリの部分しか隠していない。肉食獣のような攻撃性と色気が同居した雌豹を思わせる美少女である。

「てめえ、何者だ？」

少女の存在感に気圧された男は額に汗を浮かべて、わずかに後退する。

「剣の海賊団のレイナだ。まあ覚えな

くてもいいよ」

左手の拳銃で帽子の位置を直し、少女海賊は堂々と胸を張った。交差した剣とドクロという剣の海賊団のシンボルマークが対峙する男たちを見据える。勝ち気な印象が強い少女に、その仕草は実によく似合っていた。

「聞いたことない名前だな」

「無名の海賊がイキがつてんじゃねえ！」

二人は同時にレイナと名乗った少女へ襲いかかる。左右に分かれ、ほぼ同時に斬りかかった。レイナはとっさに右の男の剣を受け止める。

「へ、貰ったぞ。ロブの仇！」

その隙を突くように左から斬撃が迫る。

「バアン！」

「バ、バカナ……」

左手の拳銃でレイナはそれを迎え撃った。

「さあ、これで残りはお前さんだけだよ」

海賊少女はつばぜり合いを続ける相手の力を利用して、一旦後ろに跳んで距離を取る。一発きりの銃を撃ってしまっただけとはいえ、レイナの顔は欠片ほども負けるとは思っていない自信に満ちていた。

「ひっ！　ひああああ！」

一人残された男はたまたま逃げ出した。

「あ、待て！」

男は港町の複雑な路地裏を走るが、

その大きな体躯が邪魔をして思うようにスピードが出せないようだ。

「さあもう逃がさないよ。大人しく観念しな」

一方のレイナは元々の俊敏さを活かしかつという間に男を袋小路に追い詰めた。

「へへへ、いい気になりやがつて。死んだよ、テメえは！」

追い詰められていたハズの男は何故か余裕の笑みを浮かべる。

「殺っちまいな、テメエら！」

男は壁の向こうに居る仲間へ号令をかけた。

「バアン！」

しかし聞こえてきた銃声はレイナへ向けられたものではなかった。

「おう、お嬢こっちは全部片付けたぜ」

「全く、楽勝すぎてつまらなかつたぜ」

物陰から姿を現したのはレイナと同じ剣の海賊団のマークを身につけた部下たちである。

「待ち伏せならもつと腕の立つのを用意しな、こんな風にさあ」

レイナは男をあざ笑うように、勝ち気につり上がった目を細めた。

「な、嘘だろ……」

うろたえて立ち尽くす男を部下たちが取り囲んでいく。

「だから言ったろ？　観念しなつて」

「こ、これを見る、サソリの海賊団の印だ。これ以上オレに手を出したらサソリの海賊団全部が敵になるんだぞ。お前らタダじゃすまないからな」

最後に男はレイナたちに向かつて、右手の甲を掲げた。そこにはサソリの刺青が彫られている。この近海では名の通った海賊団全員が入れているものだ。

それを見せられた瞬間、レイナの眼光が鋭くなる。

「んな事は初めから知ってるよ。じゃなかつたらお前みたい三下、誰が相手にするか」

「く、くそおお！」

やけくそになった男はサーベルを抜いてレイナに突っこんでいった。

「わかりやすいんだよ、ザコが」

それを予想していた、レイナも素早く迎え撃つ。

「はあああつ！」

デタラメに振り回されるサーベルをかわして思いきり踏みつける。地面に深々と男の剣が突き刺さった。それと同時に抜刀した自分のサーベルの切っ先を男の喉もとに当てる。

「命だけは助けてやる。だから今度こそ大人しくアンタのボスの事を話すんだよ」

言葉と同時にサーベルをわずかに動かして、男の首の上を滑らせる。刀身が皮膚を切り裂いてつうと、血が一筋垂れた。

「ひいっ！　わ、わかつた。話す、何でも話すから、だから助けてくれ」

腰を抜かした男はその場にへたり込んだ。



その夜剣の海賊団の船では、盛大な宴会が開かれていた。

「おし、野郎ども！ 今日はずいぶんサソリの海賊団の情報を手に入れたためだ。存分に楽しんでくれ!!」

用意された酒やご馳走は金貨一枚分にもおおよぶ。剣の海賊団にとつてサソリの海賊団の情報を得ると言うのはそれだけ価値があることなのだ。

「この二年。アタシのわがままに付き合ってくれてありがとう」

レイナは仲間たちに向かって頭を下げた。

「何水くさい事言ってるんだよ、お頭。ライラの姉御を助けるのは俺たち全員の意志だぜ」

「ああ、そうだ」

部下たちは、口々に頷き合った。

レイナたちがサソリの海賊団を追っているのは、レイナの姉であるライラを捜すためであった。

剣の海賊団は元々レイナたちの父親が立ち上げた船だ。どうせなら溜め込んでいる相手から奪おうと言うことで、海賊を専門に狙うというスタイルをずつと守り続けていた。五年前にライラが船長になってからは貧しい漁村などに複数のアジトを構え、景気よく金を使う事で村を潤すようになり役人が来ても村が匿ってくれるほどの信頼を得るようになった。ここまで人気を集める事が出来たのは、ライラがとびきりの美人だったという事もある。腕っ節の方も船の中で敵う者はなく仲間の中

で一目置かれていたライラは、とてもよく船をまとめ上げていた。レイナにとつてそんな姉は誇りであり憧れだった。

しかし二年前、剣の海賊団の縄張りになちよつかいを掛けてきた海賊と話を着けに行つたときライラは戻つてこなかった。それ以来レイナはずつと姉の代理として剣の海賊団を預かってきたのだ。

「ライラの姉御を助けるのは、俺たち全員の望みだ」

(みんな……)

「良いかい野郎ども、アタシ等の戦いの本番はこれからだからね。今日はそのためだけに気合いを入れるんだよ!」

「おおっ!!」

改めて力強い乾杯の首頭を取ると、レイナは宴を抜け出し甲板にやってきた。

(ごめん、姉さん。アタシ、やつぱり海賊になっちゃった)

描かれたドクロと向き合うように帽子を見つめる。かつて姉がこの帽子を被っていた時、自分に何かあつても復讐はしないようにと約束していた。今思うとそれは、海賊という生き方に捕らわれないでというライラの優しさだったのだろう。けれどレイナには姉を諦めることなどできるはずがなかった。(待つて……必ず助け出してみせるから) 大丈夫だ、自分には助けてくれる仲間がいる。

レイナは船長の証しである帽子をぎゅつと抱きしめた。

「お嬢、ここに居たのか」

後ろからレイナを氣遣うように声が掛けられた。父と一緒に海賊団を旗揚げしたジャックである。

「ああ、ちよつと酔い覚ましにな」

「そうか。あまり夜風に当たりすぎるなよ」

レイナには少し過保護なところもあるが、こんな風に気にかけてくれる唯一の存在だ。ライラとレイナにとつてもう一人の父親と言つてもいい。銃の扱いも上手く、戦闘では背中を任せられるほどの頼もしい相手だ。

「なあ、お嬢。本当に行くのか?」

「当たり前だ!」

ジャックの口から出た言葉が信じられず、思わず声を荒らげた。

「どうしてそんな事を言うんだよ、ジャック。お前は姉さんを助けたくないのかよ?」

「そりゃもちろん助けたいさ。でも、俺はお嬢も心配なんだよ」

ジャックはレイナの肩に手をやり真つ直ぐに見つめる。

「サソリの海賊団を追つててわかつただろ? アイツ等は思ったよりも巨大だ。俺たちだけじゃお嬢を守れないかもしれない」

肩に置かれた手にグツと力が込められる。けれど痛みは感じない。ジャックのゴツゴツとした手からは子供の頃と変わらずレイナを思う氣持が伝わる

つてくる。

だがレイナはその手を振り払つた。驚いた顔をしているジャックをレイナが見つめ返す。

「今のアタシはお嬢じゃない。お前のお頭だ」

いつまでも守られてばかりの子供ではない。今は姉の代わりに海賊団を預かる身として決断した事なのだ。

帽子を被り直し、レイナは宴の席へと戻つていった。

数日後、レイナたち剣の海賊団は洋上にいた。目の前にはちよつとした島と見紛うほどの巨大な船がある。これがサソリの海賊団のアジトとも言うべき本船である。

捕らえた男の情報によるとサソリの海賊団は決まったアジトを持たず、各地に散らばつた部下が本船に戦利品や必要な物資を届けているらしい。本船は常に移動していて、決められたタイミング以外では手下の船にも場所を知らせない徹底ぶりであった。

そこで数に劣る剣の海賊団は、サソリの海賊団になりすまし侵入する作戦に出た。

「野郎ども、派手に暴れるぞ!」

甲板からジャックのかけ声に続いて仲間たちが次々と本船に乗り込んでいく。

「な、何だお前たち!」

「敵襲! 敵襲だ!」 異変に氣付いた見張りが怒声を上げ、

船は一気にパニックになった。

レイナはその騒ぎに乗じて、裏側から船に侵入する。ジャックたちが正面から乗り込んで混乱しているうちに、牢屋やボスについての手がかりを探す作戦なのだ。

「すまないみんな。必ず何か掴んでくるから」

なるべく騒ぎを大きくするよう戦い続ける仲間を背に、レイナは船の奥へと進んでいった。

見付け出した船長室は想像以上に広々としていた。横も奥行きも他の船室の三倍はある。

「驚いたぜ。まさか侵入者がこんな可愛いお嬢ちゃんだったなんてな」

部屋の中央に置かれた椅子に男がどつしりと構えていた。

「お前がサソリの海賊団のボスカ？」

「ああ。俺が船長のディランだ」

レイナは最大限に注意しながら相手を観察した。

むき出しにした肩に団員が手の甲に彫っているのと同じ刺青が彫られている。よく鍛えられたがどつしりとした体付きをしているが、熊のような大男という訳ではない。それよりは猛禽類のような眼光の鋭さが印象に残る。

「で、誰の復讐だ？ こまで来た褒美にそれくらいは聞いてやるよ」

（何なんだ？ この男の余裕は）

武器を持っているレイナが正面に来て、ディランは立ち上がろうとした。

ない。けれど打ちこめるような隙も見当たらず、有利な状況であるはずのレイナの方が焦っていた。

「二年前。私と同じ剣の海賊団の船長と会っているハズだ。答えろ！ 姉のライラをどこにやった？」

言葉と同時にレイナはボスに銃口を向けた。

「武器を下げなさい。さもないと腕ごと切り落とすわよ」

するとこれまで誰もいないと思っていた空間から突然人影が現れ、レイナとディランの間に割って入った。

「な……いつの間に？」

人影は仮面を着けた女だった。隠しているのはどつきりとはわからないが、わずかに覗く口もとから綺麗な顔立ちが想像出来る。見せつけるように真ん中が開かれた黒い革製のビスチェからは、透き通るような白くきめ細かな肌が覗いている。大きく突き出した双丘は深い谷間を作り出し、紐で縛られた細いウエストからのメリハリを強調している。腰のラインもパンと張り詰めていて、そこからムチムチとした太ももが伸びている。しかし膝の上まで来るブーツを履いているので、脚線美が露出している部分は多くはない。全体で見ると女の肉の軟らかい部分を集中的に露出させた肉感的な格好だ。それ

でいてこの女が発する雰囲気は、下品というよりも謎めいた妖艶さという言葉が似合う。背中まで伸ばされた髪が、さらに全体の印象を引き締めていた。

（この女はヤバイ……）

格好だけを見れば、ただのボスの愛人であると思っただろう。しかし気配の消し方からして相当な強者である事が知れる。レイナと同じように右手にサーベルを左手には銃を構えている事から推し量った力量では、良くて互角といった所である。

「ほう、剣の海賊団か。なるほどな」

ディランは女の出現を気にもとめず、レイナの言葉を反芻し口角をつり上げた。

「お前の姉の事だったな？ 教えてやってもいいぜ。そいつに勝てたらな」

驚くレイナを楽しむようにボスは仮面の女をけしかけた。

ボスの言葉に従い、仮面の女が仕掛けてきた。お互い片手に剣を持ち、もう片方に銃を構えている。実際にはサーベルが打ち合わされるだけだが、意識下では見えない銃弾がお互いを牽制し合っていた。

「はん、やるじゃないのさ」

ふざけた格好とは裏腹に、女の強さは本物だった。

レイナは初め攻める側の有利としてボスにも銃を向けて相手の動きを誘導していたのだが、次第に女の剣を受けただけで精一杯になっていた。苦し紛れに投げつけたコート拾い直す余裕もない。今も気を抜けば身体に風穴が空く事だろう。

それを何とか防いでいられたのは、レイナの実力というより別の要素が大

きかった。

（遊ばれてる!? このアタシが……）

仮面の女は明らかにレイナをおちよくっていた。サーベルで打ち負け身体の真正面ががら空きになった瞬間、この必殺のタイミングで女は左手の銃でレイナの胸を突いた。

「ひゃつ……」

激しい動きの中で揺れる胸を突かれて、レイナは思わず声を上げた。そして隙になるのがわかっていながらついで腕で胸を隠してしまう。

「ふふふ。おっぱいこんなに揺らして狙われちゃうわよ」

「この、ふざけるな！」

そんな怒りに任せて剣を振ったあざ笑うように、仮面の女はひらりとかわしていくのだ。

攻撃をいなされて弄ばれるのを繰り返して、レイナはある事に気づいた。（似てる……姉さんに）

仮面の女の太刀筋が、ライラのものでそっくりなのである。

扱う武器が同じであれば戦い方が似ていてもおかしくはない。サーベルとマスケット銃という戦い方であれば究極的には、銃で意識をそらしサーベルで斬るかサーベルで体勢を崩して銃で仕留めるかのどちらかになる。

だがそんな括りは飛び越えて仮面の女がこちらに仕掛けてくる時の攻撃は、レイナがよく知っている姉のものと重なるのだ。

レイナの戦い方は初めから姉の模倣



だ。憧れのライラに近付きたい一心で同じ武器を持ち、その動きを真似た。そして戦いの場で姉ならどう動くかを考え、それをなぞり続けてきた。

仮面の女の剣は、向けられる銃口は、レイナが理想とする通りに動き、自分を追いつめていく。

（そんなハズはない。でも、だったらどうしてこんなに似ているんだ？）

本人なのではないか？

頭の浮かんだ疑念は剣を鈍らせる。

防戦一方となったレイナをさらにからかうように、仮面の女の行為はエスカレートしていった。

「ひゃあう!!」

つばぜり合いの最中、女がレイナの耳を舐める。

「あんまり意識をお留守にしていると、こないたずらじゃすまさないわよ」

予想だになかった刺激に、レイナは思わず腰が砕けてしまった。

（はっ!? これは本気だ!）

そこへついにレイナを殺すつもりでサーベルが襲いかかる。

「こ、この!」

——パン

レイナの銃口が火を噴いた。鉛の弾は虚しく床に穴を空ける。撃たなければ斬られていた場面とはいえ、一発しかない銃を使ってしまった後はもう打つ手がない。レイナは大した抵抗もできないまま剣の柄で殴られ床に転がされた。

「クソオッ!」

やけくそになったレイナがサーベルを投げつける。女はそれを避ける事もせずに仮面で受けた。衝撃で仮面が割れ、素顔が表れる。

「海賊にはならないでねって言うてあったのに」

その顔は間違いなくライラのものである。

「……やつぱり姉さんだったんだ。……でも、どうして?」

「俺が襲けてやったのさ。こんな上玉

減多にお目にかかれなからな」

今まで静かに戦いを見物していたボスが近付いてきた。ライラは寄り添うようにして隣に立っている。

「感動の再会だな」

「はいご主人様」

ディランの手が後ろからライラの胸に回される。

「あんっ! 勝ったご褒美ですか?」

ご主人様

たったそれだけの刺激でライラの表情は湧け始めていた。

「貴様、姉さんに何をした?」

姉の様子がおかしくなった娘という

モノを施した元凶を睨みつける。

「心配するな。すぐお前も同じように襲けてやるから」

「良かったわね、レイナちゃん。ご主人様のオチンチンとつても気持ちいいのよ」

記憶にあるのと同じ優しい口調で、ライラは以前では想像も出来ないような事を語りかけてくる。それがますます

すレイナを混乱させ、身動きを取れなくさせた。

「ガハハ。俺のはデカいからな。そうだ。ライラ、妹はお前がほぐしてやれ」

「はい、わかりましたご主人様」

ライラは床に倒れる妹を仰向けに転がす。

「……冗談だろ、姉さん。アタシだよ? レイナだよ! ジャックと皆と迎えに来たんだ」

「そう。でも迎えは必要ないわ。これからはここで姉妹一緒にご主人様のものと暮らすんだもの」

二年の時間をかけて再会した姉は、すがりつく妹を引きはがし馬乗りになる。

「妹は初めが肝心だからな。そいつを使つてたつぷりとな」

ライラに小さな小瓶が渡される。そこにはルビーのような赤く透き通った液体が入れられていた。二年間海賊として過ごしてきたレイナも全く見た事がない物だ。

「何それ?」

「素敵なお薬よ。これを飲むとね、身体中がオシロミみたいになつてお口や胸でご奉仕しているだけで何度でもイけるのよ」

薬を使つた時を思い出してか、ライラはうつとりとした表情を浮かべる。

その淫蕩な顔のまま絡みつくような視線を向けられ、レイナは姉から目が離せなくなっていた。

「だめっ! 待って、姉さん……」

小瓶の中の液体を口に含み、ライラは顔を近づけてきた。

「くちゅ……んっ……んはっ……んちゅっ……」

（え、うそ? 姉さんとキスしてる）

姉妹の唇が重ねられる。柔らかな感触に驚き、一瞬身体が強ばる。ライラは安心させるように、妹の身体を抱き寄せた。

（こんなの姉妹なのに……頭ぼーつとしてくる……）

続いてつんつんと舌で口を刺激してくる。

「むはあっ……ん、はあ……さあ、飲んで……ちゅっ……んんっ……」

伸ばされた舌が徐々に脱力してきた唇をこじ開ける。すると口の中に液体が流し込まれてきた。

（あ、何だこれ……熱い……）

深紅の液体は口の内側に触れただけで、のぼせたような熱さが頭まで登ってくる。

「どうだ? 身体が火照つてきたらう。それは口の粘膜に触つただけで吸収されちゃうからな」

満足そうに見下ろすボスの声もレイナの耳には届いていなかった。

（身体が軽くなつて……すぐく気持ちいい……気持ちよすぎて、怖い……）

それまでの自分が溶かされていくような感覚に襲われ、思わず顔を離す。

口の周りは唾液と混ざった媚薬液でぐちょぐちょに濡れていた。

「だめだ、姉さん。その薬をこれ以上

使っちゃ」

姉を変えてしまったのはこの薬に違いない。ほんの少し飲まされただけで、今も頭の中に抗いがたい快感が残っている。

「大丈夫よ。怖くないわ。ね？」

口の周りについた媚薬液を舐め取り、レイナが微笑みかける。

「ここを弄られたらそんな事どうでもよくなっちゃうんだから」

優しく頭を撫でる姉の手が顔を伝い、胸元まで下ろされる。

「ここは立派に育ったのね。戦っている時もゆさゆさ揺れてエッチだったわ」

服の上からたぶたとボールを転がすように撫でられて、思わず声を上げてしまった。

「はあっ、あん……だめ……そんな所」

少しだけ力が入れられて、乳房に指が没んでいく。まだ発展途上の乳房は手の中に収まりきらないボリュームがありながらも、芯の部分が張り詰めていて少し痛い。

「あら、まだ成長中なのね。おっぱいの大きさなら私も負けちゃうかも」

女同士の感覚でそれを探り当てたレイナは、自分の胸を持ち上げた。スイカのような爆乳が柔らかそうにたぷんと波打つ。

「こっちはどうかしら？」

服の隙間から手が差し込まれてきた。女性特有の滑らかな手が直接肌に触れている。

「う……あ、んんっ！」

抑えようとしても自然と声が出てきてしまう。

（他人に触られるのって、こんなにやらしいものなのか？）

海賊という男所帯のお嬢様として育てられたレイナは性に関する知識が乏しく自慰の経験もなかった。それが白魚のような指で乳輪を突かれて、頂点がぷっくりと堅くなっていく。レイナもそれを感じ取って口の端を上げた。

「これだけで堅くしちゃって。これはお薬のせいだけじゃないかもね」

胸を弄る手を激しく動かし、レイナの服をただけさせた。服を引っかけていた膨らみがぐにやりと形を変えた事によって、ウエストで縛っていたブラウスから巨乳がこぼれ出す。普段洋上で活動している時も露出している他の部分と違い、レイナの乳房は雪のように白い。そして支えを失っても形を崩すことなくつんと上を向いている。

「いやあ、み、見るなあ！」

胸を隠そうと暴れるレイナをレイナは軽く押さえ込む。上手く力の起点を押さえられているので、両腕を使っても片腕の姉に対抗できない。

「元氣すぎるわね。ちょっと大人しくしていなさい」

そしてレイナは残った手で器用にブラウスを完全に脱がせてしまい、レイナの腕を縛った。

「ご主人様を悦ばせられるよう、まずは気持ちよくなりましょうね」

妹の抵抗を封じたレイナは、添い寝をするようにレイナのとなりに寝そべった。

「まずはこのおっぱいでご奉仕できるようにしてあげるわ」

レイナは小瓶の底にわずかに残っている媚薬液をねつとりと舌で掬め捕ると、それをレイナの乳房に這わせた。

「きやうううっ！」

その瞬間、頭の中で何かが爆発したような感覚が走り、レイナの身体は弓なりに跳ねた。少し遅れて巨乳がぶるぶると波打つ。レイナはその波が引くのに合わせて、もう一方の胸に移っていった。

「ああうらやましい。おっぱいに直接塗ると、本当に飛んじやうのよね」

妹の胸を責めながら、自分の胸をもどかしそうに揉んでいる。

（う、うそ……こんなの耐えられる訳がない……）

直接性感帯に触れた媚薬液は、想像を絶する快感を与えてきた。頭の中がそれだけで一杯になり、一瞬呼吸すらも忘れてしまう。

「あはっ、可愛い。私も気持ちよくなっちゃう」

妹の感じる顔を見て一緒に気分が乗ってきたレイナも、ビスチェの紐を緩めて自分の胸を直接弄り始めた。

血管が覗くほど透き通った肌は、興奮のためわずかに朱に染まっている。（アタシの胸も、あんなにエッチなことでされてるのか）

いやらしく歪む姉の爆乳を見て、自分の姿を想像してしまう。

「ちゅる……んんっ、乳首コリコリして……おいしい……はむ……」

タコのように口を窄めて乳房に吸い付き、先端を舌で転がす。

「んはあ……んふう……う、んっ、ふう……」

一度でも嬌声を上げてしまうと、もう戻っては来られないような気がしてレイナは必死で歯を食いしばった。

「声、上げないようになっているのね。でもそれじゃダメよ」

姉の指がつつと太ももから股間へ伸ばされる。

「んんっ、いやっ……それはやめて姉さん……」

触れるか触れないかの距離で太ももを撫でていた手が、狙いを定めたように思い切りショートパンツの合わせ目に押しつけた。姫割れの真上を探り当てた指が何度も上下に動く。

「……あつ、んっ！ うあ……くう……っ……うっ……」

ショートパンツの端からとろりとした透明の愛液が染み出した。

「ふふふ、もうぐっちよりね」

レイナは妹の胸を揉みながら、同時にショートパンツに張り付くまで愛液で濡れた秘所を責める。

「だ、大事な所、触られてる。んんっ、ダメ……ううっ！」



力が入れられる事があっても決して痛みはなく、それが快感と感じられる絶妙の力加減でレイナの中が擦り上げられていく。いつの間にか異物を受け入れたことがない純潔の花弁は、女の細い指なら二本ほど受け入れてしまうほどぽっかりと開かれてしまっていた。そしてゆつくりと肉穴を掘り進めていた指が、これ以上の侵入を抵む壁に突き当たる。

「あら、あなた処女なのね。じゃあ、こつちよりお豆の方が良いかしら」  
秘裂に差し込まれていた指は膣口を押し広げるのをやめ、割れ目に沿って身体の上へと登っていく。

「くっ、これ以上のことされたら、今度こそ自分が変えられちゃう」  
身動きの取れないレイナは、自分の恥ずかしい部分を這い回る姉の指の感触を敏感に感じていた。

「くっ……んんっ！ はあ！ んっ、ふっ……うう……」

「やっぱり、こどもぶつくり堅くなってる」

そしてライラの指が勃起したクリトリスを挟み込んだ。

「ひゃあああ！ くっ……ああんっ！」

「大きく膨らんで、とつてもいやらしい。ふふっ……ここを弄った事はあるのかしら？」

笑って問いかける姉に、レイナは首を振って答える。

「そう、じゃあたつぷりこの気持ち

よさも教えてあげる」

それを見たライラはクリトリスを挟んでいた指を押し開いて、ショートパソンの上から淫核の皮を剥いた。そして初めて包皮から出されたクリトリスを抜くように指の腹で転がす。

「んっ、ひゅうう！ ああ、くうう……」

その刺激でレイナの身体は激しく跳ね飛んだ。

「んんっ！！ はっ、あつ、ああつ！！」  
漏らしてしまった喘ぎ声は、レイナが自分で思っていたよりずっと甘く響いた。

「そうよ。気持ちいいでしょう？ 我慢しないで……ええっ！」

だめ押しとばかりにライラは再び口に乳首を含んだ。敏感な過所を二カ所同時に責められて、快感はその何倍にも跳ね上がった。

（ああ来る。頭の中が白く塗りつぶされてく）

自分が完全に変わってしまうような感覚に襲われて、必死に首を振る。

「まずはイケるようになりましょう。お姉ちゃんが見てあげるわ……はむっ」

しかしライラの責めは変わらず、レイナを追い詰めていく。

（い、イクのか？ これがイクってことなのか？ んんっ！ はあああ

っ！！）

「ああつ、あつ、いいつ、はああああ

んんんっ！！」

頭の中が痺れて抑える物がなくなり、レイナは思いきり嬌声を上げて絶頂した。ふわふわと雲の上にいるように身体感覚が希薄になつていくのに、快感だけははつきりと感じられる。

「良かったわよレイナちゃん。それじゃあ今度はご主人様に可愛がってもらいましょ」

妖艶な笑みを浮かべてライラは、ピクピクと絶頂の余韻に震えるレイナの頭を優しく撫でる。

「では、ご主人様こちらへ」

（え？ うそ……これで終わりじゃないの？）

「美人姉妹のレズショー、なかなか楽しませてもらったぜ」

パチパチとわざとらしく拍手をしてボスが立ち上がる。ズボンの股間の部分はハッキリとわかるくらい膨らんでいて、これから何が起こるかを意識させた。

「……はあ……く、来るなあ」

レイナの言葉を無視してじつくりと舐め回すような視線が、お腹の辺りから胸まで這い上がる。

「ライラの妹にしては色が黒いと思っただが、元々の肌の色はやっぱり似てるもんだな」

（こんな男に見られるなんて……）

単純に胸を見られた恥ずかしさはもちろんの事、レイナにとつて日焼けをしていない肌を晒すのは、海賊ではない少女のままの自分を見せるようでも耐えがたいものであった。

「ふふふ、ご主人様の視線で感じているのね。可愛いわ」

姉が妹を抱き寄せる。縛られたレイナの腕の内側に身体を滑り込ませ、簡単には抜け出せないようしっかりと固定する。レイナの豊乳の上にライラの爆乳が押しつけられて、四つの乳房がみっちり隙間なく重ねられる。そして背中に手を回して膝立ちになるように抱き起こした。

「それじゃそろそろ俺も楽しませてもらおうか」

ディランがズボンに手をかける。腹にぶつかるほど反り返った勃起が飛び出した。

「ふざけるな、この野郎！ 誰がお前なんか！ ぶつ殺してやる!!」

レイナは嗜虐的な笑みを浮かべるボスを思いきり睨みつけた。

しかし次の瞬間、姉から戦っていた時以上に本気の殺気を向けられる。

「冗談でもご主人様を傷付けるような事をしたら殺すわよ」

ナイフのような鋭い視線がレイナの全身を射貫く。少しでもおかしい挙動を見せたら容赦はないと、冷めた瞳で対峙する相手を見据えていた。

（そんな……本当にこんな男の言いなりなのか……姉さん）

自分の優先順位はあの男より下なのだと、本能に訴えるレベルで思い知らされレイナは声も出せなくなった。

目の前にはギンギンに存在を主張する肉幹が迫る。





# イセリア 英雄戦記

the Legend of the Aeepa War

第21話 よみがえる剣

あら い ゆう  
小説 新居佑  
NOVEL

ぼ た ん  
挿絵 牡丹  
ILLUSTRATION

追手を返り討ちにしたフィオナたち。  
しかしサーシャに操られるセリーヌの  
圧倒的な力の前に倒れてしまう！  
フィオナとメイベルローゼは、  
愛する親友と憎き姉に責められ、

**恥辱の絶頂を晒す！**



「セリーヌ、私の声が聞こえにやいの  
かあつ！」

叫んだミーシャの小柄な身体が空高く  
跳躍し、握った巨大な出刃包丁を、  
漆黒の刃を持つ剣——クラウソラスに  
向けて鋭く振り下ろす。

二振りの剣が、ギンッ！と甲高  
い金属音をかき鳴らし、散り飛ぶ眩い  
火花を挟んで、猫耳を生やしたイセリ  
ア大騎士団の長ミーシャと、凛とした  
蒼眼を、無機質な緋色に染め上げてい  
るイセリア第一騎士団団長、セリーヌ  
II アヴァリアレスが対峙する。

ギュースターヴを退けてから、まだほ  
んの僅かな時間しか経っていない。し  
かしそのたった数十分の間でオーダー  
の街は変わり果ててしまっていた。

貿易地として栄えていた美しい街並  
みは、そのほとんどが無残な瓦礫の山  
へと変わっている。フィオナたちが泊  
まっていた宿屋も半壊し、街の至るこ  
ろに火の手が上がる。焼け出された  
人々も、何者かが街に振りまいた致死  
性の毒霧に巻かれ、次々と地面に倒れ  
絶命していった。

そんな地獄のような光景でフィオナ  
たちが目にしたのは、美しいロイヤル  
ブルーの髪の毛を、彼女が握った剣と  
同じ闇色へと変え、無慈悲に街を破壊  
し続けるセリーヌの姿だった。

「セリーヌ……!? ミーシャ様っ！」  
「わかってるにやチビオナっ！ この  
大騎士団団長様に任せるにやっつ！」

フィオナの悲痛な声に、セリーヌと  
剣を交えたままミーシャが頷く。

（この目、髪の色……っ。セリーヌ!!）  
ミーシャは自分の身長を遥かに超え  
る巨大出刃包丁に力を込めた。その瞬  
間——。

無表情だったセリーヌの口元が妖し  
く微笑んだ。

「クラウソラス！ そんなにやっ！」

眩い閃光に包まれたクラウソラスの  
刀身が三叉に分かれ、鏢の形も翼を模  
したものに变化する。そしてミーシャ  
の出刃包丁にも匹敵する大きさへと変  
化した魔剣が、鮮血にも似た赤いオー  
ラを纏い、その凶暴性を見せつける。

「にや……うにやあああつっ!!」

赤い光の刃が出刃包丁を粉碎し、同  
時に放たれた地面を揺るがすほどの衝  
撃波がミーシャの小さい身体を吹き飛  
ばし、瓦礫の群れへと叩きつける。

「な……大騎士団長っ！ くっ、セ  
リーヌ。あなたに……どうしま  
したのっ!」

騎士団長の身でありながら、それを  
統括する大騎士団長を飽きたおもちや  
のように扱うなんて。

セリーヌの実力と品格を認め、ライ  
バルに相応しいと心から思うからこそ  
エルスには彼女が本来のセリーヌでな  
いことが痛いほどわかった。

だがそんな彼女の想いなど、まるで  
気にする素振りも見せずに、黒髪の魔  
剣士は、赤く染められたオーラを纏う  
漆黒剣をエルスと、その後ろのフィオ

ナへと振り下ろす。

「フィオナ様にまで……っ。セフンナ。  
フィー……あああつっ!!」

先ほどの戦いで体力を消耗しきった  
状態でのフィールドが、あつけなく破  
壊され、紅の閃きを受けたエルスが、  
その豊満な肉体を地面に横たえる。

「ミーシャ様……っ。エルスっ!  
セリーヌっ、あなたに何があつたの!!  
お願い。こんなひどいことはもうやめ  
て!」

「あははっつ、なにこれえっ!! 凄  
いわ、セリーヌちゃん。あなた最高の操  
り人形ねえっ!」

セリーヌによって破壊され尽くした  
街の闇中から、場違いとも思えるエロ  
ティックなドレスを着た女が現れ、し  
やなりしやなりと腰を揺らしながら  
こちらへ歩み寄ってくる。

妖艶という言葉が相応しい紫色の髪  
の女に、いち早く反応したメイベルロ  
ーゼが口を開く。

「やっばりあなただったのね、サーシ  
ヤ。相変わらず悪趣味よね、このおば  
さんはっ!」

「あらあ、お姉ちゃん。って呼んで  
くれないの？ 昔はあんなに可愛がっ  
てあげたじゃない？ 可愛い可愛いメ  
イベルローゼちゃん♪」

「可愛がったですって!? 私がどれほ  
どあなたを憎んでいたか……!」

「お姉ちゃん……? じゃあ、もしか  
して……この人が……!」  
「ええ、そう。帝国第一皇女サーシャ

II オーギュスタン。クソムカつくドS  
女よ。大方そのバカ騎士をお得意の  
薬で手駒にしたんでしょうけど」

「母親は違っても姉妹よねえ。お姉ち  
やんのことをよくわかってる妹だわ  
あ」

「……ちつ、ほんとムカつくオバサン  
ね。でもよかった。私、ずっと前から  
あなたに言いたいことがあつたのよ  
ね」

メイベルローゼは、その両目でキッ  
とサーシャを睨みつける。魔法が使え  
ない帝国内では決して言えなかった言  
葉を姉などとは塵ひとつも思っていない  
女へ向けて告げる。

「この淫乱女! むごたらしくくたば  
——んむううううっ!!」

「メイベルローゼっ! なっ、セリー  
ヌ!? いや、やめて……あううっ!」

セリーヌが漂わせる黒いオーラが、  
瞬時に無数の触手へと変化し、魔眼姫  
の口へと挿し込まれる。メイベルロー  
ゼ、そしてフィオナの身体が、のたう  
つ触手たちにきつく締め上げられ、身  
動きひとつ取れなくさせられる。

「殺意を隠そうともしないなんて……  
あはっ、ほんと可愛い妹だわあ。お姉  
ちゃん、ゾクゾクしちゃう。それにフ  
ィオナ姫。あなたもよお。ふふ、ふた  
りとも、私たちがたあつぷり可愛  
がってあげるわあ」

「くっ、このあばずれ女……死ぬ!  
自分の毒で、悶え死になさいよっ!」

「ああ、いいわよおメイベルローゼちゃん。お姉ちゃんに口答えする妹が、これからどれだけ従順になるか、楽しんで仕方ないわあ」

「こ、のっ！……うう、くつつ!!」

きつく歯噛みするメイベルローゼだったが、その強気な姿はサーシャの言う通り、惨めなものだった。

必殺の魔眼は、サーシャが用意した黒いアイマスクを被せられているために、どれだけ陰惨なことを命じようとするで意味をなさない。

しかも全身をギチギチときつく締めつける触手によって取らされている格好は、人形のように細い両手を頭の後ろで組み、まだ発展途上ながらも、ムツチリとした女肉を実らせている両脚を大きくM字開脚に開かされているという、卑猥極まりないものだ。

胸元ははだけさせられ、殺したいほど憎らしい女の前に、小ぶりなふたつの果実が曝け出されている。

■いながらも太腿にのった柔らかな女肉は、はつきりと、女を感じさせるいやらしいものだ。卑猥に開かれていた少女のデルタ地帯は、シヨーツを剥ぎ取られ、まだ薄い恥毛と色艶のよい二枚の媚肉の蠢動が、サーシャに見詰められていると思うだけで、たまらない屈辱感と悔しさが募る。

「あつ、ふああつ……んくつ、サーシャっ！ ふううつ……はあ、はああ……っ」

拘束された身体がたまらなく熱く疼

いている。

目隠しのせいで、触手の不気味さ、おぞましさが何倍にも跳ね上がっている。さらに、ネットリと身体中に纏わりつく触手からは、ベトついた半透明な液体——サーシャの調合した強力な媚毒液が絶えず分泌されており、初心な肌全身を触手がズルズルと這いずり回るのに合わせて、皇女を牝へと墮落させる催淫ローションがみつちりと練り込まれていく。

（くうつ、無理矢理発情させられて……、悔しいのに、あはうっ！）

珠のように美しい肌にはじつとりとした大粒の汗が浮かんでおり、スラリとした柔肌を舐めるように滑り落ちていく感覚が、対抗手段を失った魔眼姫に残された強いプライドを貶める。

「ああ、メイベルローゼちゃんがびんびん発情してるわあ。んふふ、お父様好みのふしだらな身体つきだった。あなたの、お母様には似ても似つかないと思っただけだ……」

セリヌが具現化させ、彼女と同じくサーシャの意のままに蠢く触手たちが、魔眼姫の遠慮がちに膨らむ太腿の流線型をジュルウツ！と淫靡になぞり上げる。

「ひうっ！ ううっ！ んんっ、く……はううっ！」

「立派な女の子……いいえ、牝豚の素養はつちりなのよねえ。その媚薬効くでしょう？ 肌の下まで浸透して、血液そのものを媚薬成分に変えちゃうの。」

もう一生発情しつ放しの牝豚メイベルローゼちゃん。疼きが我慢できなくなったら、優しいお姉ちゃんがたつぷりと遊んであげるからね。ああ、なんて妹思いのお姉ちゃんのかしらあ」

「なっ……!? あふうっ！ 胸っ!?」  
だ、誰が牝豚なんかに……っつ。くうつ、馬鹿に、しないでよね……こんな媚薬ちつとも……あんっ、今度は腋……んくつ、お尻もおっ！ はあ、あ……いい加減に、お臍までええっ！

目隠しされているために、いったいどこをどう責められるのか、まったく心の準備ができないまま、いいように身体を弄ばれてしまう。

「ひぐうっ、んふううううっ！」

（声がもれるっ、サーシャなんかに、感じてるところ……見られちゃうっ。あふうっ！）

同じ男の子供でありながら、妾の子である自分を他の皆と同じように見下すことしかない……こちらにとつても憎しみの感情しか湧いてこない姉に、大切な身体を囁かれてる。だというのに背筋にゾクリとした明確な快感が走り抜け、唇からは呪詛のような言葉ではなく甘い、姉には絶対聞かせたくない、女としての艶めいた声ももれ出てしまうことが、たまらなく悔しくて、きつく歯を噛み締める。

「うふふ、目隠しされると魔眼が使えないだけじゃなくて、全身とおつても敏感になるでしょう？ ほらあ、次はどこを苛めちゃうおうかしらねえ？」

「はあ、くうっ……んんっ、この変態女っ！ 殺す、殺してやるっ！ 絶対に……ん、ああうっ、ふううっ！ か、身体が……ひううっ！」

折れない意志を示すように、強気な言葉を吐き出しても、媚薬を隅々にまで染み込まれた年頃の身体の疼きは止められない。

「あらあらあ、本当敏感な身体ねえ。しかも食欲、チポ欲しくておねだりしちゃう？」

開くの必死で我慢している股間の二枚貝を執拗にまさぐってくる、人の腕ほどもある触手だけでなく、細い糸のような触手が乳房の頂点で、痛いくらいピンピンに起立している、まだあだけない桃色の果実を力任せにギチユッ！ときつく締めつけてきた。

「ひううっ！ ち、乳首いつ!?」  
だ、誰が食欲……ちが、コレはお前が薬を……あ、ふううっ！」

強烈な媚薬のせいで無理矢理昂らされた身体が、発情してしまっていることはわかってた。けれど、帝国のプリンセスとしてのプライドにかけて自分から求めるなんて屈辱的なことは絶対にしない！

「うそつきねえ。あなたは見えなにかもしれないけど、ほら、メイベルローゼちゃんの可愛いオマンコは、もうジツトリ、グチョグチョお？ わかるでしょう？ エッチなお肉がブルブル震えてる。オチンポ欲しいって、いやらしいお口をバクバクさせてるわあ」





「あひいひいっ！ ああつ、んあ  
あつ、触手、やめ……んふいっ！」  
否定の言葉もすぐに本気の喘ぎ声に  
かき消されてしまう。充血きつた左  
右の陰唇が、触手の突き込みに合わせ  
て卑猥にブルブルと震え、軽く人の腕  
ほどもありそうな肉触手をギツチリと  
卑猥に啜え込んだ女芯からは、濃厚な  
においの愛蜜がプシイッ！ と勢い  
よく噴き出してしまふ。

「イ……イひいっ！ そ、そんな……  
これすごいっ！ ああつ、私変に  
なるっつ！ オ●ンコ、触手ズボズボ  
きたらあ……だめえええっつ！」  
（気持ちイイのおっ！ 悔しさが、飛  
んじやうつ。オ●ンコもつとして欲し  
いっ！ オ●ンコちようだい、触手チ  
ンポでぐちよぐちよにしていっ！）

歯止めのない利かない初心な身体は、汚  
さや屈辱、ブラインドといった人らしい  
感情を置き去りにして、人外の触手勃  
起に、まだ幼さの残る身体をエロティ  
ックにアピールする。

「だ、めえっ！ くるっ、そんな……  
サーシャなんか、触手なんかで私……  
……あはっ、はああつっ！」

（熱いのが込み上げてくるっつ！ イ  
カされるっつ！ サーシャの前でイッ  
ちゃ……っつ！ え……あああつ  
っ！）

媚薬によつて火照った身体が、憎い  
姉の前で絶頂に達するのを覚悟した瞬  
間、あれだけ激しかった触手の抽送が  
ピタリと止まった。突き抜ける寸前に

まで昂らされた媚薬塗れの若い身体は、  
発散しそこなつた快楽を、強い切なさ  
と疼きでメイベルローゼに訴える。

「な……何で……ええっ！」

「ふふ、だつてお姉ちゃんは妹思いな  
んだもの。大切な妹が必死で、ダメ  
って言うてるんだから、やめてあげる  
のが美しい姉妹愛つてもよねえ？」  
「くっ、あなた……っ。はあ、ああつ  
……あんたあああつっ！」

女を騙ることを生き甲斐としている  
サーシャが、絶頂寸前で焦らされる辛  
さを知らないわけがない。

「どうしたのメイベルローゼちゃん？  
可愛いオ●ンコがヒクヒク切なそうよ  
お？ あ、もしかしてイキたかつた？  
こんなグロテスクな触手チ●ポなんか  
にイカされたい変態さんなの？ そんな  
わけないわよねえ！」

「く……あ、はうっ。黙れこのクソ女  
あつっつ！ 絶対に殺すっつ！ あう  
っ、ん……あああつっ！」

メイベルローゼが怒りを爆発させた  
瞬間、待つてましたとばかりに、膣内  
の触手がほんの僅かだけブルブルと震  
え出す。

焦らされきつた蜜壺は、無意識にク  
イクイと腰を突き出し、自らの抑えき  
れない牝欲を、サーシャに見せつけて  
しまふ。

「動いて欲しかったら、そうお姉ちゃ  
んにお願ひしてちょうだい？ 母親は  
違つても私たちは姉妹でしょう？ う  
ふふ、あゝはっはっ！」

絶対的な高みから見下し、高笑いす  
るサーシャの顔を想像して、涙が溢れ  
そうになった。今すぐこの魔眼で殺し  
てやりたい。けれどそれ以上に……悔  
しくてたまらないのに、身体中がイキ  
たくてイキたくて、もうどうにもでき  
なくなっている。

「……はあ、はあ……ああ。くうっ、  
んくううっ」  
（イキたい……くっつ、イキたい……  
イキたい……いっつ！）

キレイな白い歯が切なげにカチカチ  
となり、蜜壺からトロリトロリと粘っ  
こい濃厚な本気汁が溢れ出ていること  
を思い知らされる。

僅かに振動する触手肉棒は、絶頂寸  
前までは押し上げるが、決してその先  
へ進む一撃を加えてくれない。……も  
う限界だつた。

「——イ、イカせて……。お願いしま  
す……くうっ、サーシャお姉ちゃん……  
……妹のお願いをきいてください！ あ  
なたの可愛い妹のメイベルローゼを、  
汚くて最低な触手チ●ポで思いきりイ  
カせてください……いっつ！」  
ズチュチュツ！ ドチュンツツ！！

絶対に言いたくなかつた姉への懇願  
の言葉を口にした瞬間、アイマスクの  
向こうで、サーシャがこの上ない愉悅  
の笑みを浮かべるのが見えた。

同時に牝壺内の肉触手がこれまで以  
上の勢いで脈動し、誇り高い魔眼姫に、  
屈辱という快楽を塗り込んでいく。  
ぬめる触手に拘束され、卑猥なM字

開脚を強要されている身体が、ビクビ  
クと小刻みに震え、細長い四肢にびつ  
ちりと情欲の汗が浮かんで垂れ落ち  
る。

張り出した腰が、牡を誘うように大  
きくグラインドし、太い触手がプチュ  
リと挿入された陰唇がクバクバといや  
らしく蠢いている。

「あははっ、とつても素敵なお。昔か  
らお姉ちゃんのこと、淫乱とかふ  
しだら」とか言っておきながら、触手  
なんか腰を振るメイベルローゼちゃ  
ん、大好きよおっ」

「ひいぐっ、う……うるさ、んひいっ！  
ああつ、くるううっ！ 今度こそおつ、  
今度こそくるううっつ！」

殺したいほど憎んでいるサーシャの  
前でイカなくてはならない。屈辱だ。  
もういつそ死んでしまいたいと思  
う。でも気持ちいい。馬鹿にされ、見  
下されながらイクのが……たまらなく  
興奮してしまふ。

「んあああつ！！ イクッ！ イつちゃ  
うっつ……あつひいひいっつ！」  
吊り上げられたメイベルローゼの身  
体がビクンツ！ と大きく痙攣する。  
「イググウウウウウツツツ！！」

脳天に絶頂の稲光が閃いた瞬間、ア  
イマスクが外され、サーシャのしたり  
顔が瞳に焼きつく。今なら殺せる。今  
なら——。

「イクウウッ！ はひいひいっ、イク  
ッ！ わらひ、お姉ちゃんの前でアク  
メ晒すううっつ！ ああつ、悔し……



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**